

の三折の紙入を出して、底から小さな紙包、開くと草の葉の色の、殆ど端倪すべからざるものを取つて、掌に据ゑた。

「これだ、こりやね、恙う二ツに岐を打つてませう。二岐の車前草ツて、滅多にや無いもんでさ。而して何んだね、蔭干にしたのでね、油を塗つちや乾し、乾し、大抵な丹精ぢやありませんぜ。で、何うすると言ふと、癆病の寢て居る室をね、夜ならば灯を消します、晝間でも雨戸を閉切つて眞暗にして、其から病人の寢床に竝べて、新筵を一枚敷きます、可うがすかい。其處でこれだ、と言つて掌を動かした。車前草の葉は、ぶる／＼と揺れた。

此に灯を點して、恙う其病人の額の上へ。……言ひかけて、屹とへの字形の口を結び、葉を取直して、抓んで前へ出して、目を据ゑて透かして見せた。

頭の方を照します、影が映りませう、病人の、其影が、右の筵に映るのを、其ま、緊乎巻込んで、スウと引放して、持つて出て、直に川へ行つて流すんですがすよ。魔法ぢやあがせんから、呪文も何も要りやしません。私が覺えてからも、其で治つたのが七人あります。學問をなさるお前さんにや、馬鹿々々しいでがせう、……といふ時、天を仰いで呵々と笑つた。小使が其時の風采は、一個不思議の道士のやうに見えたと——橘は言ふ。

聲も震へて、何處の方だね、と何氣なく聞いて見る。龍岡町を通るツて然う言つたつけ、下谷の徒士町の邸ださうでがす。と教へて、小使は喟然として、胸を打つて、歎息して、昔々と一概に言ふけれども、今の肺病なんぞ、矢張死病てえ折紙が着いてましたよ。木の根の黒焼や、草の葉をらんびきに懸けたのぢや、浴せたつて叶はねえ。處で、不思議と言ふものは、今の世にやはやらねえさうでがすが、昔はお前さん、逆もいけねえといふ其病氣が、私の知つてます法で治つたから不思議ぢやがせんかい。病院の先生方には話されるわけではなし、又入院をしようと言ふほどの人達には、言つたつて、から、用るませんから、見放されて出て行くのを見る毎に私あ目を瞑つてまさ。

何ういふ法なんだね、と眞顔で尋ねる。

何くだらねえ、車前草の葉なんでさ。

と自ら嘲けるやうに言棄てたが、内心自負する事の極めて大なるものであるのは、顔の色に顯はれた。

車前草の葉を何うします。

や、お前さん、少いに似合はねえ、聞きますかい。

此奴は話せるぞ、とだぶ／＼して少し裂目の見える、衣兜の缺唇へ手を突込み、古びた印傳皮



渠は思ふ仔細あり、道士に對するの慇懃と信仰を以て、一枚、件の靈草を請得て、之を懐にし、病院を辭した。突當りの本郷枳殼寺の通には、早や人通の中に、ちら／＼と灯の見ゆる、黄昏の龍岡町を、目を瞑るが如く、腕を組み、首を低れて歩行いたが、忽ち夢の覺めたやうになつて、彼の、朦朧とした後姿の束髪の婦人を見失つた、大學の門際を、見返りさまに、……すた／＼と急いで行く。

慚う云ふ風に話したら、これで橋が此の記念の多い町を通つた時、耐難い心の内が、粗知れよう。

自分も知つて居る。——殊に病院に於ける國手がじを投げ、病人も覺悟をして引取つた位のもの、到底、快復の望はないから、儂いことでも此上は頼にするより外はない、神佛の力、はた、道士の奇藥。

橋は、當初此の靈草を持つて行つて、直ちに霧島の玄關から訪れて、來意を告げ、病室に通つて、丁ど夜なり、灯を點して影法師を映して見よう。彼ほどの女の世を去るといふについての、其の親身のもの未練は、自分に譲るまい。一面識は無くつても、何、と思つたのであつた。殊に迷つた心から、何か彼の病人とは、幽冥相通する因縁があつて、自分其門に到れば、人ありいで、待兼ねて、言葉を交へない前に、意を通ずる事が出来よう、と氣も漫ろ。

徒士町に行く時分、最う日が暮れた。霧島といふ邸は、人に聞かないで、直に知れた。然るに、此の苦も無く探し當てたほどの立派な門構は、橋が氣臆した一であつた。且つ其上、

門の扉は、鐵の釘隠袴々と固く鎖してあつたのである。

奥の見ゆる、淺間な家は、ものを言ふにも心易いが、城壁を築くこと斯の如きに到つては、些と難かしい。

豆腐を買ひに出る女中も居らず、縁のつなぎやうもなければ、言葉を懸ける機もなかつたけれども、一旦引返して、又其内に出直さうといふ容體ではないから、其のあたりを立去りあへず、霧島の前を、往つたり、來たり。……

誰咎むるともなく、渠は人目を憚つて、成たけ暗い處に身を置いた。露も輝くばかり良い月夜で。

聽て、此の町に人の往來絶えて、裏通を行く聲音が高く聞ゆるやうになつた。ま、よ、思切つて入らう、と最後に潛門に體を押當て、耳を澄ましてゐた時、配達夫が一人、月夜を流る、が如く、衝と來て、呵呀と退る橋の姿が二個に分れたか、と擦違ひ、潛門を押して、驪然と入つた、がらくと、いふすゞの音。

吃驚して飛退く途端に、遙玄關の方で、電信！と呼ぶのを聽いて、身を蹴しつゝ、横町に曲つ



て遁げた。

唯ある薪屋の、戸を鎖した門は暗く、月の光に白い屋根、其より高く積上げた、薪の蔭に身を潜めて、先づ可かつた。

萬一にも門を開けたら、那の通がら／＼といふ音がするのだと、橘は冷汗を流して呼吸をついた。動悸の静まるのを待つて屈んだが、人通もなかつたから、良落着いて、聽て思切つて飯らうとして、傍を見ると、楯棒を件の薪に押着けるやうにして、軒下に曳棄ての荷車一輛。月光に判然と太い輪が見える。其上に、二ツ三ツ炭の缺と、乾びた木の葉とが散ばつて、新しい筵が掛つて居る。

橘は熟と見た。此の炭屋の向に、柳の木が一本ひよろ／＼と立つて、龜裂の入つた硝子戸に、きら／＼と月が射して眩いやう。建附はがた／＼と、軒も傾いた場末の床屋、之も寢静まつて居たのであるが、件の床屋と、其の柳の木を境にして、此の横町の片側に、ぶツしりと立つた一帯の土塀は、先刻から幾度も邸の周圍を徘徊して心得た、霧島の家のである。

之を視めながら、我にもあらずイんだが、袂を探すと早附木があつた、懐には、彼の靈草の紙包。

此處で決心したといふのであるが、餘り思詰めて、考が如何にかして居たのであらう。尤もさ

つきから説つた、其の様子といふものも尋常ではない。

筵を密と、荷車から取外す、とかさ／＼と炭の缺は溢れて落ちる。衣服の襟にも、帯の下にも薬すべを亂しながら、横町を斜に切り、向の土塀に押着けて、片隅を壓へて、くる／＼と開く。塀の腰へ、筵が立懸けられたのである。其の時、安からず、前後を向し向し、懐の包を出して、試に、そつと筵に翳して見た。果して靈草の靈ありや。兩股の車前草は、月の影に筵に映つた。

是だけでも何等か驗あるやうに思ひ取られる。——橘は一心に、此の塀の内の、庭の彼方に、植込の中から見え隠れの青黒い瓦屋根の、彼處には、民が、顔白く、鼻隆く、唇朱く、目を閉ぢて、清らかな額に後毛を亂しながら、無言の人々に瞻られつゝ、從容として死ぬのであると、假定め

て、打念じ、早附木を摺つて、葉にうつすと、道士が鍛へた車前草は、燦と燃える。時に、室の内なる病人が、枕を上げて、美しい、蒼ざめた氣高い顔で、此方に向いて、寢返つた、と胸に浮んで、……近々と筵に寄せる、火尖は敲つた。

指の根に赤く映つて、弗と消えて、此灯が世の中なら無くならうとする時、新筵の中へ、髪を

結つた女の影法師が、歴然と半身に顯はれた。が、あつといふ間に、上へ伸びて、悄然と筵を放れて、大きくなつて、土塀に宿らうとする時、慌しく筵を擱んで、體で押被さるやうにして捲込んだ。橘は氣が遠くなつて、耳の穴を、何かで蓋をされたと思つた。頭に千斤の重量を感ずると



齊しく、氷を浴びたやうに慄然として、恍惚となつたが、其の場合の己が身の如何であるかに気が着くと、一分間も猶豫ならず、踵を返して、拔足に、再び薪屋の前に引返し、前途を透して伺ひながら一散に走り出した。それから素直に踏切を抜けて、お成道へ出ようとする。おい、おい！ 辻に立つたのは巡回の警吏。橘は小使が授けた法に従ひ、何處にか川へ行つて流さう、と思つて、正に其の筈を抱へて居たのである。

待て、こら。

待たんか、と一喝されたから、思はず、お成道の柳の限際へ、件の筈を打棄つたが、目が眩んで、前後も辨へず、筋違へ出て、萬代橋を右に見た時、乗客のない、寒さうな鐵道馬車が、するすると今来た方へ通つた。秋葉ヶ原あたりで轟々といふ汽車の響。見附の人通も、ちらほら、夜はまだ然までに更けては居らない。

漸々我に返つて、體に繩が懸つて居らぬのを確かめたけれども、絲は一筋、背後から、巡回の手に繋がれて居るやうに思はれたさうで。

辻にも、橋にも、心を置いて辛うじて、家に返ると、帯も解かず、書齋の寢床に倒れたが、胸騒がして寝ることが出来ぬ。

一旦固く緊乎とかけた掛金を又外して、何時でも入つて来い、後暗いことはない、と臆て拘引しに来る巡查を待つやうにもして見たけれども、夫も不安心で再び鎖した。

今にも車前草を點した處から、燃上つて、徒士町に火事が始まるであらう。然もなければ、お成道に人殺があつて、棄てた筈が血に染つて、自分は嫌疑を蒙るのであらう。何をした、一體、何の眞似を働いたのだ、虚氣な！

罪にはならぬまでも、人に言はれることではない。次第に痛が高ぶつて、今にも巡查が踏込みさう、本郷へ三點警鐘が聞えさうで耐らないから、橘は自殺をしよう、自殺をしよう、と思ひながら、心神昏々として綿のやうに疲れて眠つた。

翌日になる。昨日のことは宛然夢。自分の體が、彼處から、彼處から、彼處から、月夜に動いて居た、と思つた位である。

其日も、翌日も、恥ぢて戸の外へは出ないで引籠つたが、何事もなく、日が経つに従つて、蘇生した心持。よくも、あんな時、うつけな體に、放火犯、人殺犯の魂が入らずに濟んだ。細い町の兩側から、薪屋と床屋の家が迫つて、挟み潰されなかつた。腕車に引かれなかつた、と身顫をして慎んで居た。

すると、彼の法學生に引張出された。橘が廊下で後姿の遊女に逢ひ、再び段階子で出合つて悚



然としたと言ふのは、即ち、彼が菊坂上と、大學の門とで月夜に見た、其の櫛卷の婦人に少しも違はなかつた所爲なのである。

渠は、不夜城に於ける美人の去就進退を詳にせず、横から跟いて来たか、後から歩いて来たか、但し先へ行つて待つて居たか、よくは解らない。で、語り廊下のも、段階子のも、一ツ、いづれか兩個の中か、はた其時の合方か、彼の病美人に、そつくり其儘であると思つたのであつた。元來、其爲に、渠は自殺をしようとして覚のある、可憐い人の幻は、如何なる時も、腦中を消え去らないのに、一度大釜の鳴る樓に遊んで後は、肖た倅の、戀しさは忘れられぬ。……然れば意味こそ違へ、友達が山下で言つた言葉の坪に嵌つた、が、先に、餘り綺麗な挨拶をしたので、今更一所には我慢にも打出し難い。

幾干か金を懐にして、件の法學生の所へ行つて、御同伴を言ひそ、くれては、其まゝにして、到頭其年過ぐる。

夏の試験に及第して、首尾よく學士の稱を得たが、肺結核の難治であることを思ふと同時に、思ひ切られぬ、例の倅。

秋風が身に染みて、月が冴えるやうになつた。夜の町を歩行くことに、幻は迫るのである。

今は、と家を出たが、どんより曇つた晩、馴れない悪所へ行くのであるから、有繋、良心も咎めるので、星が一ツ見えたら行かうと、雨模様空を仰ぎながら歩くと、益々暗くなるばかり。出直さうと、引返しつ、龍岡町を横に見た。——もう耐らない。

切通上で、下谷の何處のか灯を、先づ星として置いて、……車夫。

へい、と言ふと車を引寄せて、お召なさい。芳原まで、と言つたのを、聞いたのか聞かないのか、御免よ、と威勢が可い。

腕車の上で、一寸芳原だよ。あい御免よ。可いかい。ありやく、などと駈ける。おい、可いのかい。旦那御申戲を。

二度三度、と其から重ねて通つたが、實に愚也。然までに可懐しんで、偕行つて見ると、先年の合方は些とも意中の人の倅に肖て居ない。否、肖た處もなかつたのである。落膽した。其上、行燈に後朝の歌を書いて、渠が交際だと言つて震へ上つた時、あい。と艶麗に笑つた女が、今度は薩張と様子が變り、去年は書生さんでおいでなすつたから可かつたが、もう卒業をなすつたらう。氣晴に入らつしやるんぢや頼母しくはありませんね、なぞといつて構ひつけず。淡々として水の如し。それでも通つた、未練らしいが。何故、肖ないのであらう。



唯一度、送られて出る折で、急足にはたくくと一所に來た、廊下が切れて、向うの廊下へ行く間、土藏の戸前から漆喰叩になつて、板が渡してある處を、翻然と傳ふ時、扉合から射す月に、自分の左に竝んだ、浴衣を着た、しどけない女の姿、お、肖たやうな、と思ふもさそくで、ばかりと、上草履で向へ飛んだ。更に廊下の、明い電燈の光に見れば、髪こそは纏れたれ、色こそ白けれ、露ばかりも肖ては居ないのである。

それでも、最う一度行つた。——又、もしやと思つて行つた。が、更に見出すことが出來ないので、餘りの本意なさ。是ッ切、と十月中旬、數ふれば垂死の美人を、一夜堀の外で看護した、其の三年目、日は覺えぬ、が丁度時節も其頃、單衣ばかりでは冷かに感ずる夜。

例の如く、二階へ上る。此方へ、と燭臺を持つて導いたのは、中庭に面して小座敷で。博多の挟み帯、彼の胸を突出す婆さんが、酌をしつゝ、容子の可いことを饒舌つて居たが、一寸と言つて立際に、蠟燭の心を切り、來てはちらちらと迷はせるんでございますね、おや、可恐しく流れるよ、蠟する／＼……と出て行く。

橘は、獨煮込む蠟燭の音を聞いて居た。が、ふと首を回らして、床の間を見ると、香を焚いて居る一人の支那美人の畫像の軸が懸けてあつた。はじめは何の氣も着かなかつたが、瞳を定むるに従うて、鬢髻として、泛ぶお民の倂、目許、口許、眉つき、些も違はぬ其であつた。固より、

髪なり、衣服なり、敢て我國のものではないが、偶然とはいへ、不思議だと、自から心もあらたまつて、恁る遊里に在ることも忘れ、神聖なる佛像に對する思で、清々しさも感したのである。面を打つ、留木の薰、つツと入つて來た合方を、畫像の抜出たのかと思ふまで、氣を取られて居た位。其の畫が意中の人に肖て居るほど、傍に坐した合方は愈々肖ない。思切つて、之までだ、と思つたから、少し酒を過して、見反勝な座敷ではあつたけれども、此方へ、此方へ、といはるゝまゝ、ふら／＼とするのを扶けられて、やがて一室へ——羽織を脱ぐと横になつた。

歸がけに、と思つたのであるが、しばらく合方が來ないから、橘は起上つて、廊下へ出ると、二階の奥の方で、電燈は此處には點いて居らず、櫺子窓と、欄干の間の、狭い廊下を、透しながら手水に行く。

廁の灯も手に取るやう、一段上つて、表から一續の、廣い板敷へ出ようとする、と向うから、懷手で、すら／＼と來た遊女があつた。

摺違ふ時、橘は身に寒さを感じて、思はず振向いて見送ると、今來た下の廊下の方へ、すつと通る。震ひも着きたい、後姿。撫肩の物淋しう、襟足の細いのに、鶴の翼を首拔の派手な襦袢を、悄々と絡つた、恰も、其鳥の化したる如く、歩行くに連れて、白い羽と、黒い羽は、ゆら／＼と渦いて揺げる風情。



正しくと見て、はツと思ふと、暗い處で見えなくなつた。隙間洩る風は縷々として身を絡ふに似たり。

橘は首を垂れ、袖を搔合はせて、歸つたが、唯見ると、同一やうな部屋が二ツ竝んで、何方かを見紛うたのである。

ばつたり、障子に向つて當惑した。さても天道は人を殺さず、幸一ツの方の前には、革鼻緒の草履が脱いであつた。

合方は未だ来て居ない筈。草履のない方が、的切と、其でも氣迷ふから靜に開けると、入口にすつくり。確に其姿で、肩から上は雪に埋れたやうな鶴の衿襦を着て、色も蒼ざめて立つて居た。一ツ一ツは取立てて言はないでも、晝にも人に違ひはせぬ。

我にもあらず、おや、といつて退つたけれども、其の遊女は、毛一筋も動かさないで、石のやうに立つて居るから、違つた、と聲を懸けて、自分でびつたり閉めたのである。

貴方々々、と次の室で呼ぶのは、合方の聲。來て居たか、と枕許へ坐つて……、隣は何といふ遊女だ。

信女と、合方が答へた。何？ 信女さんの遊女と言ふんですよ。二階の突當の一番隅で、何でございますわ、内で遊女

がたがた亡なりますと、皆お隣へ片づけるんです。人が居る處たもんですか、私が此室へ參るのも生命がけでございますよ。

其上に、此間佛様があつたんですもの。肺病で亡なりました、羽衣といふんですが、大變お金子の懸つた妓なんですつてね、病氣の中は手當をしてくれますけれども、死んだとなると其は貴方、酷いんですよ。お經一ツ讀むんぢやあなし、多度あつた髪の毛も其まゝで、丸裸にして男衆がね、石炭箱のやうなものへ押込んで、お棺が小さいんですから、筋が伸びるといけないツて、釘づけにした上へ、澤庵石を乗せました。そしてね、何うせ、土用を越すんぢやあねえツて、二晩ばかり打棄といたぢやありませんか……否、恁處處に居るものは皆、と故とか、潛然である。橘は早や一時も居耐らぬ。

生憎込合つたもんですから部屋が此處になつて恐くつて、それで遅くなりました、堪忍しておくんない。否、そんな譯ぢやない、と言つたが、引留めて放さぬから、私は少し考へ違ひをして居たのだ。最うこれで來ないんだよと、判然いつて、然様なら。——おのがきぬくなるぞ悲しき。……

旦那、此處等でございますかい、旦那。橘は車夫に呼ばれて眠りが覺めた。而して徒士町の霧島の邸の手前で下りたのである。一體門、



から乗つた腕車は、三島様の邊まで駈けて來ると、濟みませんが呼吸切がして曳かれませんが、少  
時煩らつて居て、今夜はじめて出ましたが我慢にも遣切れません、といふので。

強ふるに及ばず、其の腕車を乗棄てた。が、夜更ではあり、往還の提灯も少いので、別に坂下  
で雇つて、此處まで乗つて來たのは合乗で。此ま、乗つたま、體を持つて行つてくれるのたか  
ら、廓で事のあつた次手に、最一度、戀人の住居の邊を伺つて見よう、晚いから幸人目もある  
まい。而して炭の缺も、木の葉も、藁屑も、早附木の燃さしも、其時の心懸が凡て綺麗に掃除さ  
れたのを確めて、自分も其ツ切、薩張しよう、と思つたのださうで、——腕車を曳出すと、うと  
うとした。

可し、御苦勞だ、と言つて下りる。又良い月夜。尤も筑波の方に、密かな白い雲が綿々として  
累つて居たが、まだ月にかゝらなかつた。

明を便に、橘が、此時は良心強く、過日苦心したと同一に邸の周圍を一廻りした。筵を立懸け  
た塀の色もかはらず、薪屋も床屋も在の儘。

一寸立停まつた時、色も鮮明に又幻が目の前に、顯はれたから、袖を拂つて、決然として踵  
を返す。

曲角に、我を待つともなく、合乗の車が未だ休んで居た。看板の灯も薄りとして、月は益々明

い。車屋。おや、唯今の旦那でございますか、参りませう、貴方、お一人でげすかい、と言つた。  
何故?……姉さんは何うなつたんで、と言ひながら差寄せる。

はじめから一人だよ、連なんぞありやしない、と言ふと、……北叟笑をした。

戲談をおつしやつちや可けません。坂本の通でお供をしました時から、御一所なんで。へい、  
曳出すと看板の灯が消えたやうになります。消えたのかと思ふと、何點いてるんで。又歩行出す  
と、また暗くなります。をかしいな、と振つて見ると矢張ついています。變に陰氣でけたいが悪う  
ごすから、幾度も振向いて見ましたが、旦那、……乗つてたぢやありませんか、上野へ出ると、  
此方も氣が強うごす、それから見返もしないで一呼吸にのしましたかね、一所にお下りなさいま  
したが、櫛巻で、色の抜けるほど白い、病上りのやうな凄い姉さんで。

本當か?

え、威かしちやあ不可ません、とがつたり止つたが、は、は、は、何か、隠して在らつし  
やる、と高笑をして、又駈出した。

橘は顔を蔽ひ、目を塞いだ。丸山の家、間近になつた時、急に大粒な雨が、ばら／＼と來たが、  
母衣を下す隙もなく、一呼吸に家の門につける間に、びつしより浴びたやうになつて、それから、  
久しく瘡といふ病で寝た。其の晩、坂本から合乗を雇つたのは一人ばかりではあるまい。乗せた



名媛記

車夫も、乗つた人も、互に見違へて、婦人と合乗をした一組は別にあつたのであらう。であるけれども、然し、それもこれも、よく那麽時に、魂が、道端の柳にも、屋根瓦にも、車にも、月にも奪はれず體に着いて居た。



「私の故郷の、アメリカの大きな竹藪には、尾の尖に樂器を持った蛇が棲んで、其が通る時にはチリチリといふ音がするんですよ。」

それから、大い毒のあるの、色の美しいの、優しい性質のものもあります。よく人に馴れて、教へると藝を覚えるものもあります。蛇の種類は数へ切れないほどある中に、おもしろいのは其の尾の鳴るのと、最う一種、連続蛇といひまして、五分一寸位づゝに、體を刻んで打棄ると、フツといつて、一切が天窓、フツといつて、又一切が胴に附着いて、そして視て居る内に、頭から尾の尖まで舊の通りの長蟲になつて、草叢に入つて行きますよ。」

恚う言つて話したのは、地方に居た某といふ宣教師の妹君で、學校の初級を預つた、り、かといふ令嬢であつた。一個の少年は、其の學校の廣場に植つた碧桐の幹に背を持たせ、水兵のやうに腕組をしながら、藤色に紅の縁を取つた上着に、白茶色の裳を曳いて、小なごむ靴を穿いた姿を見て、然も樂げに聞惚れた。

髪を引上げて束ねた時より、搔垂れて細い雪のやうな頸にふツくりと結んだ方が、年紀より二ツ三ツ長けて二十三四に見えるけれども、一層氣高くツて可い。今日のり、かの顔を見つゝ、此の外國の蛇の話聞いて居る少年は、自分の師で且つ年上のり、かを目するに、國王に不思議な物語をする宰相の姫君、を以てした。少年は此頃(あらびやんない)とを讀んで、魂を奪はれて居たのであるから。

そして自らひそかに、妹ぎみの如き一人のきゝてを以て任じて居たに違はなからう。

一體此頃學校の二階にあつた寄宿舎では、専ら「雪中梅」が行はれて、基だの、猛だの、名士と豪傑ばかり居たのである。が、這少年は談話室に備へてあつた、郵便報知新聞の、行商りうしあすが、魔法使の藥を間違へて、驢馬になつて薔薇の花を食べる話、また鴻の鳥になつたぼへみやの國王の話などに魅入られて、道を行く馬をも、垣根に咲いた薔薇の花をも、立つて凝視めるやうになつて居たのであるから、太く此のり、かの風采と、尾の鳴る蛇、結びつく蛇の話に動かされた。

熱心な新教の信者で、淑徳を備へて、學問があつて、宗教のために身を犠牲にして、波濤萬里



を越えて、合衆國から家兄とともに日本の然も僻陬の地に來る位、見識も氣象もあつて、其上心優しいり、か、課業を果てて後も、數學や、漢籍や、他の諸先生とともに退かず、二階に上つて、彼方此方寄宿舎の彼の名士豪傑の部屋々々を見舞ふのが例であつた。

然るについで二三日前、り、かは平時の通り寄宿舎を音信れて、五番室の戸を外からことごとく叩くと、響に應じて内へ請じた、六疊の部屋に立向ふと、煙草の煙が朦々と天井を籠めて居た。劇薬の粉を嗅ぐよりも可恐い、其の毒に面を打たれて、り、かは血が上つて、背後へ卒倒しようとしたことがある。

元來基督教組織の學校で、飲酒と喫煙は嚴禁してあつた。校外生の制裁は兎も角も、豫め誓を立てた寄宿舎には、此の禁を犯す者はなからうと信じて居たり、かは、五番室の其の失態を悲しんで、昨日も、一昨日も、病氣だといつて引籠つたのである。

五番室の塾生は、松崎といふ、二十四五の色の白い、きちんと髪を分けた、はんけちにも額にも香水の滴る美男子。

之にり、かが氣があるといふ評判だつた。

大方其は彼の松崎が、其の香水も手巾も靴も白皙なる其の顔、手足とともに、極めて西洋的である處から、割出した風説であらう。

松崎は才子である。譬へばいんぶり氏の會話の諧誦を忘れて、日課の質問に窮したにせよ、人は皆知りません、忘れましたといつて引下るのに、松崎は愁然として、(り、か、濟みません)とばかり差俯向いて、哀を請ふのである。り、かは其様子を見ると、氣の毒さうに、(お温習をしませんでしたか。)

(唯々、否、多分お温習をしなかつたのでありませう、何故なら、私は答が出来ませんから、)といつて益々しをらしい。

り、かは之を聞くと、常に同情を表して、深く過怠を命ぜぬが例であつた。異う様子の可いことを言つてはぐらかすぢやあないか、と流眊にかける者もあつた。毛色の變つた御機嫌の取方だ、と冷かす者もあつた、が、いつれ、罵る者にも、冷かす者にも、り、かが渠を愛することは齊しく認められて居たのであるが。……

殊に前日、體操場のふらこ、に乗つた一人が、はすんで振つた鐵の輪が、折悪く行合はせた松崎の、身を交す暇なく、額が破れて、血の流る、怪我をしたので、療養のため寄宿舎を辭して、暫く自宅に引籠つたことがあつた。

り、かは横鞍を置いた馬に乗つて、革の鞭を擧げながら、急ぎ松崎の宅に怪我を見舞つて、そして唇も、顔の色も褪めるまで血の色を失ひ、繻帯をして寝て居る状態を、正面から見ると忍びな



い、といつて、横顔で取つた一葉の寫眞を送つて、學校でした過失なれば、監督の行届かぬ自分の罪を謝するため、り、かが付添つて看病をすと思つて枕許に置いて欲しいといふ、細やかな心盡し。

横顔の寫眞は鼻高く、目が大きく、髪が房々と、頤細く、氣高く美しく見えて、り、かの寫眞の内でも最も容色の勝れたのである。然らぬだに兎角人の口の端に懸つたのが、其事のあつてからは、又仰々しくなつた。

けれども(あらびやんない)に於ける妹君、即ち此處に面白い蛇の物語を聞いて居る少年は、其の嘗て學校の歸途に他の小兒と喧嘩をして、對手を痛めつけて追遣つたは可いが、自分も砂まぶれになつて擦切つた二の腕を甜めて居る背後に、おなじ歸途なるり、かが立つて、あれほど言つて置くに、何故喧嘩をする、汝等の敵を愛せよ、貴方は忘れました、といつて、涙ぐんだことを知つて居る。

尙過日、松崎とり、かと、少年が之を伴つて郊外を歩行いた時、唯ある田圃道の畝を仕切つて、菊の花が植ゑてあつて、黄菊の輪の太いのを松崎が一枝折つて、り、かの胸に挿さうとすると、(花は難有いけれども、之はあなたの所有ではありません、盗賊ね!)といつて可恐い顔をして見せて、笑つて受取らなかつたことも知つて居るから、人の風説を聞いても、少しも信じなかつた。

又それが若し事實であつたら、僕は、り、かをごそぐり殺して了つて、……追つて來るべき其の悲い運命を見ないやうにすると、今も食堂で氣餒を吐いた。妹君は、食卓に足を踏かけて、腕白な、其ま、硝子窓から廣庭へ飛下りて、其處の雜草の中に輪を仕懸けた、クリツケットの對手をと、槌を取つて响したけれども、いづれも、猛、基の鞞、然る子供らしい遊戯の、仲間入をするものといつては無かつたので、徒らに草の葉を敲きながら、唯見ると、一箇石造の井戸の輪が轉がつて居た。

此は、賄方が新に井戸を掘ると云つて用意をしたのが、經濟上、其ま、沙汰止になつて居たものである。

少年は目を付けて、翻然、其上へ飛上る、爪さきで動かして、くるくるとまはしたが、クリツケットの槌で、體を支へて前へ出るのは然までにはない、背後へ身を引くのが離れ業であつて、少年は幾度も體の中心を失つて仰向けに草の上へ轉んだ。

寄宿舎の窓からは頼杖を支いたのやら、頤を支へたのやら、半身乗出したのやら、四ツ五ツ名士と豪傑の顔が出て、井戸側から落ちる毎に、拍手喝采。

輝く太陽の色に面を染めて、最後にむつくと起きて、又石の上へ飛上つた時、思ひがけずり、かが校舎の石段を下つて來たのであつた。



惟ふに、嬌瞋を發して二日休んだ彼の五番室の、既に此頃は額の疵が癒えて再び寄宿舎へ歸つて居た松崎が、禁を犯して盟を破つた甚に激して、二階に寄らない、歸がけであらう。突然、(貴方おもしろいことをなさいます、)と輕業の前に立塞がつたから、少年は慌しく井戸側を乗棄して、極の悪さうに後退をして、り、かに瞻らる、面晴がましく、日の光の眩さ、碧桐の蔭に入つたのである。

り、かは日曜日の會堂に集る小兒にも、渠等學校の生徒に、日課を教へるのに馴れて、日用の日本語はすらくと綴ることを得たが、何を何うして間違へたか、此のおもしろいといふ言葉の範圍を、極めて廣く扱つた。

をかした人だ、と言ふ處へも、飛んでもない、と言ふ場合にも、不思議な、と言ふべき處でも、怪しからん、といふ事にも、すべて、一のおもしろいなる言を以て當嵌めるのである。

勿論、喧嘩をしてたしなめられた時も、おもしろい事をしては可けませんといふのを聞いたし、今輕業を叱つた時も、恚ういつた、屹と松崎の怪我を聞いて吃驚した時には、大變とあらうのに、まあ、おもしろい!と言つたであらう。

で、爰に少年は、危いといふことから、草叢といふことから、こんな暖な日といふ處から、一種の意味が連續した。おもしろい蛇の話聞いたのであつた。

繰返すまでもない、鴻の鳥になつたばへみやの玉様の話、驢馬になつた男の話に興味を持つて、髪かみの長い老僧らうそうや、目の窪くぼんだ教師けうしや、伽藍がらんの屋根やねや、古い橋はしや、幽邃ゆうすいな川かはや、巖窟がんくつの蛙かへる、棟むねの鳥からす、薔薇ばらの花はなはいふに及およばず、木きにも草くさにも心こころを置いて居る好奇心かうきしんの強い少年せうねんは、此時このとき、り、かの状さまを、九十九夜あらびやんないとの物語ものがたりをする姫ひめのやうに思おもひ取とつて、やがて其それは、國君こくくんの心こころを慰なぐさむるために、不可ふか思議しぎなる福音ふくいんを齎もたらして、天てんより下くだし給たまへる仙媛せんゑんであらう。其そのの美うつくしさも、氣高けだかさも、人ひとには過すぎると思おもつたのである。

恚いかる少年せうねんも、以前いぜん、渠かれが家いえとおなじ町内ちやうないの、唯とある荒物屋あらかものやの、仔細しさいあつて近隣きんりんの人々ひと々に忌いみ憎にくまれて商あきなひがなくなり、寂さびれ果はつてた店前てんぜんに、一日あるいちにち日曜にちようびの朝あさをはじめとして、基督キリストの教會けうかいが開ひらかれた時分じぶんには、其そのの家いえの前まへを通とほることも、快こころよしとしなかつたのに。……

聽やがてり、かが奏かなづるオルガンオルガンの音ねと、讚美歌さんびかの聲こゑを怪あやしんで、恐々こはくさし差視さしいて見るやうになり、立た留どまつて聞くやうになり、立章たちくたじ臥たれて腰こしを掛かけるやうになると、いつの間まにか座敷ざしきに入はいつて、り、かの手てから繪札カアドを貰もらふやうになつた。

鳥とりが人間にんげんの言ことばを語かたつたら、聞きく人ひとはいかに其そのの耳みみを傾かたむけるであらう。聞馴きなれたり、かの、殊ことに髪容かみかたちも服装みなりも、我わが人間界にんげんかいにあるまじき、雲くもに駕がした天女てんによのやうな人ひとの口くちから、おなじ言葉ことばを以もつつてものいはる、一言一句いちごんいっくと雖いへども、能よく胸むねに響ひびいて、心こころを動うごかされ、従したがつて人情にんじやうも、我わにかはら



ず、優しさも、可憐しさも異なることのないのが知れると、敢ていはゆる耶蘇教の信徒といへば、必ず磔にかゝつて死ぬものとは限らないことが解つて、追て、あからさまに假の其の荒物屋の店の、日曜學校へ出入したのである。

然れば、珍らしいものに接して、聲を聞いて、綺麗な繪を得らるゝ、日曜を樂にして居たか。一日齒が痛んで行かなかつた。そして學校の濟む時分、町家風なる父の住居の、二階の窓から齧齒を壓へて、茫然往來を視めて居ると、内儀、娘、魚屋、丁稚の行交ふ中を、今日は何云ふ道を取つたか、り、かは馬に乗つて、大く目の下へ顯はれた。帽子を飾つた眞白な鳥の羽は、颯と向う前の山おろしに戦いで、見るに、ちら／＼する目の前へ、弗と打仰いだ、氣高い顔は、廂の上で、高く少年と面を合はせた。

(お内は此處なの)といふ内も上下に身の揺るゝ、絲のやうな後姿は馬の尾を吹く風に靡いて、町中の櫂の梢にかくれた。

翌日、早速、次の日曜までは待たれないで、り、かの館へ、可憐い顔を見ようと思つて行つた。もとより家へ遊びに来よ、と日曜毎に言はれたのであつたけれども、親の手から苧環の絲を身につけて、寶劍でも提げて入らなければ、心細く、様子の知れぬ西洋館へ、一人行くのは良氣性がしたために、其日まで猶豫つたくらるであつたが、山國の城跡の大手を其まゝに構へて、森の中

に巍然として聳えた三層樓、即ちうりえむ家の彼處の一室に、り、かありと思ひながら、我が亞細亞人種を隔てたやうな、晝間も、厳しく鎖し固めた門を開ける術も知らず、行戻りして、やがて、裏手へ廻ると、藪の中に畝り畝り路と竝んだ板塀があつて、淋しいから人通はない。

表門からは森に隠れて、僅かに其外壁ばかり仰がる、が、其處からは却つて窓も見え、萌黄の窓掛も見えて、そして窓の前の欄干も見えたので、藪をうしろに立つて居ると、寂寞として人の氣勢もない。大廈の窓へ、天から降つたる如く、衝と、藤色の姿があらはれたが、件の欄干の内なる高樓の廊下と覺しき處へ、身を投出したやうに立つた。

遙に響く流の音、其の大河の景色をや打眺むる？ しかし少年は、心咎がしたので、驕然と身を躲して忍んだが、這はいかに、背に打掛けた板塀は恰も戸で、不意にばかりと口を開けたか、ら、吃驚して飛退いた目の前へ、藤色の姿、板塀の黒い處へ色も映るやうに鮮麗にあらはれて、おゝ！—それから館で日を暮して歸つた。

で、足も繁くなる、言葉も覚え、字も習つた。少年は詰り恚りしたため、朋友には疎せられ、教師には憎まれて、己が市立の學校には籍を置き兼ねたために、件の教會の手で開かれた學校に轉じたのであつた。

然れば椅子にかゝり、卓子に向つて、親しくり、かの教を請くるやうになつて、愛の念は益々



深くなり増り、おのが身に取つて、此上に又もののないやうな思がして、果は、相對する時は、恐るゝとはなしに、頭を低るゝやうにもなつた。

下

「り、かさん、尾の尖の鳴る蛇は日本にも居ようと思ふんです。」

「うりえむ家の令嬢は、片手をふつくりした其の胸にあてて、打傾き、

「否、そんなものは私の故郷にだつて居りはしませんよ。」

「何故、それでも此間藪の中を通つて言つたでせう。」

「あの、然うね、學校の庭で言ひましたつけ。其はね、つい私が思違ひをしたんです。いつか佛蘭西の田舎で一百姓家の爺さんが、博物館へ獻じて、勳章を貰はうと思つて、十五年か、つて蛇の種類を、丁ど三千幾種といふのを集めて、最う些と思つて、空櫃の中へ封じ籠めて置いた、其の箱が壊れて、ありつたけの蛇が這つて出たので、毒蛇に咬まれて人死があつたといつて、罪に行はれたことがありましたね。」

「えゝ。」

「其中にだつて、そんなおもしろいのはありませんでした。譬ひ居ましてもね、南亞米利加の熱

帯の林の中で、人を食べる土人だつて棲むことの出来ないやうな、地獄よりもつと恐ろしい處に居るんでせう。お國になんぞ居るものですか。」と語るも憚るやうな調子である。

少年は恍惚した夢を見るやうに目を睜つて、

「僕は、あの、其でも屹と居るんだらうと思ふんです、本當です。」

「まあ、一體何處に。」

「藪の中に、其も直ぐ此裏なんです。ね、先生が僕を内へ入れて遊ばして下すつた、彼の板扉の向うの竹藪なんです。えゝ、昔何だつていひます。矢張りシタンといつた時分、禁制を犯した若い女があつて、上へ知れました。色々拷問をしても白状しなかつたつていひます。それだもんだから、役人が一條幾錢づゝといふ觸を出すと、其こそ今のお話のやうに方々から幾千となく獻じたでせう。其と一所に其の女を大瓶に入れて埋んだのが彼の藪ですつて。僕は何にもそんなことは知らないで居たんですが、此間お話を聞いて、おもしろくつてならないもんですから、山にでも、谷にでも、そんなものが居やしまいかと思ひ、一昨日の晩方、又あの裏木戸から入らうと思つて、何か考へながら少時立つてますとね、藪がざわ／＼して、そして雀が澤山ちう／＼ツて轉つて居たでせう。」

西日は射して暖いし、何だか嬉しいやうで、びつと聞いて居たんです。さうすると、一ツ止み、



二ツ止み、段々静になつて行くと思ふと、何うしたんだか、チリ、ン、チリ、ンてツて、藪の中  
で鳴出したんです。

あ！……雀の聲が段々鈴の音に化けて来たよ、とおもしろかつた内に、フト彼の尾の鳴るの  
に考へついたので。り、かさん、其から垣根も何にもないんですから突然入つて探したけれども：  
見當りはしなかつたのです。

歸つてから人に聞いて見ますとね、その昔の其でせう。山かゞしだの、何だの、いろんなのが  
居て、今でも國ぢや、一番蛇の多い處だつて言つたぢやありませんか。

占めたと思つて、今朝から探してるんですけど、未だ何にも居やしない。ですが、屹度居る  
ことは居ます、掴まへたら見せませう。」

聞いて居る内に、り、かは眞蒼になつたがわな、きながら少年を瞻める目に、はら／＼と落涙  
して、それほど私を信する者が、どんなに眞心を以て頼むやうに勸めても、未だ洗禮を受けよう  
とはせぬ。そして其の蛇を探すのも、猶凡てに於て、知らず／＼悪魔に近くのである。私は貴方  
の喜ぶ顔を見たさに、ついつつかり、おもしろいことを聞かせた、といつて、片手で顔を蔽ひな  
がら、その胸に十字を記した。

## 弓取町人



「もし、佐野屋の旦那。」

「何うした、關取。」

「關取なんて言ひツこなし。あれ、だから歩行振まで、のさりくと氣取るぢやありませんか、可恐しい。」

會津若松の城下を、八月十二日の月夜に西の方を指して三人連、佐野屋の旦那と呼ばれたのは邊の小間物屋の主人で、質素な中形の浴衣に博多の帯、白麻の襦袢を着て居る。關取は名を東山の大家、小作を取つて居る田地持の次男で、小力があつて、宮角力の土着かず、今日の大關に合ふ作太郎といふ壯漢。白黒段々染の浴衣を筒袖にして、ぶんぐりした身に絡ひ、縮緬の扱帯を前結にしてゆさりく、故と太い聲でものをいふ。いま一人は白襦袢、紺飛白紺足袋で、麥藁の帽を戴いた、市役所の月給取で、いづれも九重樓といふ遊女屋の裏の空地にある大弓場金的の定連

である。

此の月給取、小此木が眞先で、

「何うです些と急がうぢやありませんか、外へ行くんぢやありませんからね、晩くなるとお城の中は不氣味でさ。」

佐野屋は背後から笑を含んで、

「何、先生、それといや關取が居まさ、其處は安心ですよ。」

「はい、私が附いて居りや、旦那方に怪我はさせませぬ。」と生ぬるく引張つて、けだるさうなものいひを遣る。

小此木は苦い顔して、

「佐野屋さん。」

「へい。」

「貴方が又何もやけに、關取なんておつしやることはありませんや、其でなくつてさへ、作の野郎、氣取りたがつて、うづ／＼してる處へ、水をお向けなさるもんだから、何うです彼の聲は。」  
「そりや不承してお遣んなさい。おなじ甚句だつて藝者のと角力のと丸で以て音色が違ひます、破太鼓のやうな聲を出す處が角力取にやあ貫目さね。いくらお耳障でも到底清元や二上のや



うな、意氣な音が出るもんぢやありやしませんから、職業に免じて其處は開流してお遣んなさいまし。」

「やあ、役場の先生、こりや唯今旦那のおつしやる通りでござんす、お聞辛かるが御免くだあれ、其代にいざとなりや。」

關は往來で仕切の身構。柏手を丁と打つて、

「狐でも狸でもお茶の子でござんすわい。」

小此木は興の覺めた風をして、

「不可、もう我輩ものいはずだ、情無い。」といつて急足になる。

「や、小半町、皆黙然で歩行いたが、忽ち思ひ出したやうに一齊に吹出した。」

「は、は、は、おい、作さん、何しろ大丈夫かね、君は力はあるだらうが、化物は何も逆におんぶをして急所を狙ふと極つてやしないぜ。其に武藝の達人かして、可恐しく弓が上手だつたといふぢやあないか、飛道具で遣られた日にやあ、如何に君だつて一堪もありやしまい。」と小此木は氣遣ふ様子、佐野屋は事もなげに、

「其處へかけちやあ鍛へてありませ。何、小此木さん、若湊のヨイシヨコラでも、うむと張つて撥返さうといふ胸だ、生得の一枚肋、胸板は伸金のやうですから、化物の外矢なんざ突通る氣遣

なしさ、ねえ關取。」

と又しても人の悪い。

二

作太郎關は之を聞くと有爲顔に丁と胸を叩いて、又力足を踏張つた。

「これだ、はあ、之だ、矢でも鐵砲でも持つて來い、案ずることはござんせんわい。」

丁度士町に掛つて人通がなく、誰も見る者がなかつたけれども、關取が此の容子を見たらば噴飯せずには居られまい。

然るに一行三人の殿、いざとならば矢表に立塞がらうといふ關取の背後を少し放れて、一切を見つ、聞きつ、片頬笑もしないで居たが、澄して跟けて居る一人の婦人がある。

佐野屋は見向きもしないで居たが、關取が今の矢でも鐵砲でも持つて來いで、胸をどんが、餘り仰々しかつたから、何心なく振返ると不圖其姿が目に留まつた。

慙う月明に透かすと、件の婦人は、背後へ影法師を曳いて、一行と齊しく東山の月に向つて歩を移すので、白銀のやうな艶々しき薄煙のために、少しばかりだけれども、間を隔てられて判然とは見定められず、茫然と白く、くつきりと黒く、浴衣に羽織でも襲ねて居ようと思はれる、す



らりとした風。

佐野屋は之を、丁度關取の肩越に頤を上げるやうにして見つけたが、何氣なく、又歩き出した。

「小此木さん。」

「え。」

「申戲は止して、淋しうがすな、未だ宵の口なんでせうね。」

「此頃ですから最う其でも十時にやあ成りましたらう。一體、用のある處ぢやあないんで、夜になつて此處等歩く者はありませんや。」

「然やうさ、考へて見たつて、私どもは土地見なんだけれども、月明にお城の道筋を通つたことなんざありませんからね。謂つて見りや物好きさ。」と又一寸と背を見ると、婦人の姿は近寄らず、敢て遠退もせぬ。

「で、何ですか、其の金的へ顯れたといふのが、宇賀神堂の中の何の神様にか面影がそつくりだつたといふが本當なんで？」

宇賀神堂は飯盛山の頂にある、二間四面の阿彌陀堂で、永徳年間、今より五百二十餘年前の建築であるが、近きころ、傍の榮螺堂から、彼の白虎隊が、劍を掲げ、戈を横へて、匕首を按じ、或は小手を翳し、或は足を躓てなどした、いづれも黒髪を亂して、白の鬚卷、裁着袴、武者草鞋

の、身輕に甲斐々々しく武裝した、おなじやうな白面朱唇の美少年の、衣の色まで彩色した彫像の數十九を、此處に移して安置した其である。

何人か此處に其の神の俤が肖たかといふのを、佐野屋は聞きもあへず、

「そりや確です。喃、關取。」

關取は相變らず、人困らせの難澁な聲をして、

「は、い、私も見ましたで、疑はこんせんがい。」

小此木は之を聞いて長歎した。

「あ、助からない。」

「もし、場所柄ですから、氣障なことをいひツこなし。」と佐野屋の擔ぐにはいはれがある、背後の婦人。

「一寸。」といつて、小首を傾けながら間近に見ようとして後へ退つた。

關取は然りとも知らず、

「は、あ、徐々おん前達でこんすかい。」と、のほ、んで前へ廻る。

佐野屋は立留つて、ト透かしたが、丁度女の顔のあたりは、黒板塀の陰になつて、胸から裾へかけて唯これ、すつきりと水が垂りさう。



婦人の姿は放れず、去らず、今も相變らず見え隠れであつた。

「おい。」といつて、佐野屋は又入交つて關取の前へ出ながら、

「小此木さん。」

「え、。」

「何時でせうな。」

「はあ、矢張り十時頃でございませうよ。」

「然うですか。」とばかりで何か調子まで沈んで來た。

「十時が一時でも可うござんす、東山が居りますで。」

佐野屋は慌てたやうなものいひで、

「關取、文句を言はないで一才背後を見な。」

「何でござんすぞい。」

「可いさ、ござんすでもござんすでも構はないから、關取、振返つて見ないか。否さ、お前、人間なら一寸背後を見られるかい。」

「背後がどないでござんす。」

「何大したことでもないがね、小此木さん、一寸」といつて、佐野屋は小刻に縋るが如く、前へ行く男に引添ふと、關取は、今ものありげに言はれた背後を振向かうとして立停つながら、俄に怖氣がついて首の骨が固くなつたので、怪訝な顔を眞正面に据ゑながら、口ほどにもない、ひよこひよここと走寄つて、

「何だね、旦那え？」

「様あ、到頭本音を吹いた。」と小此木は打棄るやうにいつたが、恚る中にも極めて眞面目である。

「關取、何でも可いから、後生だから、まあ振向いて見るさ。お頼だ。」

と促す佐野屋の傍に立つて、關取は右左を向したが、背後へは首が廻らず、きよろしくして、

「何うしたんだね、何がだよ、旦那、をかしいな。」

「をかしいか無いよ。ふん、憚りながら、これ、ものをかしいやうな事なら、心配はしないけれども、何うだね、見る氣はなしか。何、生命に別條はないだらうが、」

「何だつて、旦那。」

「餘り心持の可いものぢやあないよ。小此木さん、變に恚う魔がさしたやうですが、何なら今夜



は見合せませうかね。」

と佐野屋は大方ならず怯えた様子、小此木もまごごして、

「其も然うですが、だつて何でせう、一件は其の跟いて來るといふんぢやありませんか。引返す途端に鬼になつて、ばあ、なんざ下さらないね。私もぞくぞくして、顔がもうこれより背後へは向かないんで、貴方又下らないことを云出したもんだから、」

「否、全くだから仕方がありません。私は矢張振向くのは少時御免だ。關取、」

「はい。」とまじくして、何か急に鹿爪らしくなつた。

「お前何うだね、矢でも鐵砲でもぢやあないか。おい、東山がついてるんだぜ。」

「へ、旦那、串戯をいつちやあ不可ません、そんな事を聞くが最後、先方ぢや私ばかりを目壺に取りまさあ。」などといふさへ、怪しいものが聞かうかと、密々聲で、三人とも月下に影を小さくして疎んだが、やがて小此木が立直つて、

「男だ、此處まで來たものを一番お城まで遣つけませう。一體お話の様子ぢや我々は神慮に合つて、其處でお姿が、顯れたといつたやうな譯なんですから、途中で怯氣が出るやうぢや、お見限を蒙らうも知れない。とまあ云つたやうなもので、ふとすると、其うしろの一件で度胸のほどをお探りなさるのかも知れませんか。ですから、兎も角も行くことにしようぢやありませんか。」

「御尤もで、」と言葉まで慇懃な、佐野屋はい、年紀をしながら、意見をされて畏つたと云ふ形である。

四

さて三人は、いよいよ若松城に向つて進むことになつた。早や此處からは遠くもない、唯一點の灯もなく、月明で星さへ見えぬ前途の空に、一帯地平線上に白氣を籠めて、すく／＼と目に遮る黒い柱は、これ即ち外廓の松の樹立である。月の隈は唯其ばかり、顔を見合す人々の瞳も見えて眞晝のやう。

「傘あ！」と關取が呟いた。いづれも理に沈んで默然の處、佐野屋は吃驚して、

「何だ。」

「傘だ。」

「傘が何うしたと……又不思議なことを言出すぢや無いか。つまゝ染めた、何のことだ。」

「これさ。」

「え、傘あ。」



「あれ！ 背後の方から變になるぜ。」

と寂しい聲をする。小此木は苦笑して、

「唄の出損ねなんですか、野郎、震へてるから調子が出ないんですよ。關取おい、しつかりしな

いか！」

「傘！」

「そら来た、(手に持ち……佐野屋の旦那、一番景氣をつけませう。」

「なるほど、其で落着いた……(皆さん然らば)とかね、」

「やれこの、のんのこさいく、は、は、は、は、」と小此木は元氣づく、關取も勇をなして、

「然らばお先へ、やれこの、参りますぞえ。」

三人が、

「のんのこさいく。」

慥く一行が夜道を侵して七日町から出て来たのは、次に説く如き仔細があつたのである。

一體、此の三人に限らず去年の夏あたりから開業した九重樓の裏の大弓場金的は、尙武の氣の壯なる土地の人氣に合つて、目覺しく繁昌する。中にも此の佐野屋といふのは、金子が廻つて世話焼の上に大の横好で、毎夜詰切の上華主。近頃同好の人々を語りつて、武運長久、弓術の上達

を祈るため、堅帽子で引く連中出合ひで、白木の弓に大鳥の羽の四ツ矢を添へて、之を一國の粹として、他に誇れる、十九の神將、彼の白虎隊の彫像を安置した宇賀神堂に謹上再拜と奉つた。其が神慮に合つたやうに各々が思ひなしてか、一入に觸が出た。然るに、此度舊藩主某侯の息女、竹姫といつて御年二十にならせらるゝ、豫て心ざま雄々しく、絲竹の調よりも、却つて國家の軍事に耳を傾け給ふ由、學校の運動會には、婦人財囊を寄せられるので、牛打つ童まで知つたのが、疾より然る近衛の將軍と縁組が定まつて、愈今年天長の佳節、白菊を活けた電燈の目映い館で式を擧げることになると、御名殘旁々一度故郷を御見物といふ觸で、一昨日から此の若松に來て逗留あり、有志團體が思ひくゝの趣向を凝して、壯に歡迎する中に、金的の定連も祝意を表して、幕を張り、水を打ち、軒には鬼灯提灯、庭には篝火、射場に氷水の硝子杯を取寄せながら、射割だ、金的だと取替へ引替へ前へ寄つた、落ちた、背後だ、引摺つた、南無三寶幕を射た、イヨ當りなぞと、笑ひ動揺いて鼻息の荒い天狗連、別けて此の三日、殊に今宵は、寄つて集つて射たわく。

五

三萬三千三百三十三さるほどに少しも中らず、ほつとして連中一呼吸を吐いて居る處へ、ぶら



りと入つて来た一箇年若き人物があつた。眉目俊秀、中肉中脊、質素な單衣に緋の紋着羽織、麻襦袢、白足袋で、品の可いきり、とした風。

此の邊につひぞ見掛けた事の無い人柄であつたが、片肌脱、又は大肌脱、中にはいきり立つてやけに向う顛巻をしたのなどが、瘦せた小角力が並居る形で、團扇と、扇子と、氷の硝子杯と錫の匙と手の上げ下げに入亂れた定連へ、靜に目禮して四分五厘といふ弓を擇び、押手に取つて矢筒を引寄せたから、何を外矢め、今に弦の中から尺五を覗いて、耳を引拂ふのが落だらうと、目と目に冷笑を帯びて流眇にかけて居たのである。

來客は射前も見事に、はじめは正面の尺五の的へ十と射あてて一筋もそらさず、矢筒を取交へると大前の射割を狙つた。いづれも屹と瞳を据ゑると、上下を挟んで二矢を外したから、然もあらむと定連が顔を見合せて北叟笑をする。

途端に弗と射た、矢響とともに射割は燬と碎けて散つた。續いて其次、又其次、尺五の的を真中に挟んで、前後に四枚あつたのが、弦鳴に應じて、菱形の板は恰も雪の消ゆるが如く、カチリ、颯と碎けて、木屑も残らず、あづちばかりが黒くなつた。

來客は其ま、射がけを脱いで指置いて、帳場へ勘定を置くと、後を振向きもしないでふいと出たが、大弓場へ入る路地の角、九重樓の土藏と合の角に成つて居る、蛇の目鯨の看板を横切つて、

七日町の通へ出たと思ふと見えなくなつた。

先刻から呆氣に取られて居た連中が、俄にわやくと動搖ははじめ、何だ、誰だらう、何處の者だと、皆が口々。待ちねえ、といふが疾いか、駈出しの勘次といふ、ポンプの筒先が身輕に躍出した。

や、暫く其噂の止まない處へ、呼吸を切つて駈けて歸つたのを、取巻いて、何うしたと聞くと、不思議だ！ はての、途中で消えて了つたかい。いんえ。ぢや、些少は妬けたのか、何をいやあがる、恚う馬鹿にしちやあいけねえ、彼あ唯者でねえぞ。何故だといつて、すん／＼お城の中へ入つて行つた、といつたので……

何お城へ入つた。彼の城趾へ、今時分をかしいな、と皆小首を傾けたが、他國の者が來て見物に行つたと極めて了へば其丈のことを、何うして眞晝間日のあたる時でも、一人ぢや草刈に入らない處だ。何處に陥穴があらうも知れぬ、可恐い草原へ夜踏込むのは容易でないと、一人が怪む、かと又然ういへば何處かで見たやうな立派な顔立だつた。然うだ、宇賀神堂の白虎隊の中に誰やらそっくりりなのがある。違えねえ、成程、己も見た、私も見た。惟ふに此間奉納した連中の弓矢を感應あつて、中にも弓術に長けたが、此際姿を顯した者であらう。歸道は飯盛山でなかつたのが讀めないけれども、一體城のために一命を捧げた人々であるから、魂魄は其處に留まつて居る



ものと見えるといふ事に極めたので、奉納を發起した佐野屋は一方ならず面目を施して、此ま、では残多い、然ほど靈驗あらたかに在さば、城へ入つて最う一度と、半は乗地の愉快づく、大人氣ないといふ者やら、おつくふがるものやら、中には全く、不氣味で二の足の輩もあつた。そこで關取と二人。出がけに來合せた小此木は、大のものすきだから、おいそれで、到頭三人で來たのである。

六

「小此木さん、此から先ですよ。」

「大分何うも」とばかりで、城の大手門の趾の、外濠を左に控へた土塀の石垣の前に立停つた。既に白氣の中を貫いた松の木の本二本は潜つて來たので、薄は肩に擦合ふばかり、三人の身體は草の葉に隠れて、三ツの首は天窓黒く、其の薄の穂と竝んで据つたまゝ、動かなくなつたのである。

「中は眞暗ぢやありませんか。」と、小此木は不氣味さうに及腰で差覗く。佐野屋は空を仰いで見ながら、

「森がありますからね、此塀の上のたつて何百年経つてるか知れませんか。」

「へい、彼方から見た分には、何の事はない、杉箆がひよいひよと立つてる位なもんですな。」

「時に何うしませう、小此木さん、一體何時でせう。」

小此木は聞くと情なさうに、

「何うも君の其時間をお問ひなさる音色といふものは容易でない。何となく私あ夫を聞く度に引入れられさうになりますよ、もう遣切れない。」と溜息をする。

「え、成程いかさま其處もありますな。」と佐野屋もとつちて悄げ返つた。

關取は謂ふまでもないが、言句も出でず、月は松の木の間から、小さな形を遠く見せて、森として風もなく市中を縦横に貫き流れる猪苗代の湖から引いた用水の音が遙に響いて凄じい。

恚る時、さら／＼といふものゝ音、三人は露が薄に上るのだと思つた。

然るに關取の直ぐ背後へすつくり立つたのは婦人である。

はツと思ふ途端に、臆病ものべた／＼と早腰を抜かした。凡そ豫ていひ合せてする事ども、恚うは行くまい一所に躡んで居窘まつた。關取の如きは血迷つたか、

「傘あ、」とあるか無きかの細い聲をして震へて居る。三人の前をすつと横切つたが、悚然とすると通過して、後姿になつた、顔ばかり振向けて屹と見る、月は半面を掠めて片頬蒼白く、鼻筋の通つたのが、星眼を開いて、



「皆お歸り、此處は來る處ぢやあない……」ときつぱり。

其ま、月を浴びて水の廻るが如く、ゆらくと動いて向うへ歩を移すと思ふと、石垣に着いて  
大手の暗い中へ聲音をさして鮮麗に入つたのが、はつきり見えた。

同時に、呼吸を凝して居た關取が、わーッ！と云ふと跳上つて突飛ばされたやうに、ぱた／＼  
と舊來た道へ逃出した。之と手も足も結へ附けてあつた如く、小此木と佐野屋が肩を組んで一目  
散。

白羽箭



月下の的	姫神	榮螺の殻	竹子姫
	簪の質	悪權太	謹上再拜
	狐格子	怨恨	草の灯
	涙橋	古城	松毬

竹子姫

「お、吃驚した、まあ。」

「や、こりや、是は何うも、と突當つたのが身を開いて、對手の女に二ツ三ツ續け様にお辭儀をしたのは、浴衣だけれども角帯で商人風の分別盛、濫に狼狽へて、往來の者に打附りなどすべき人體か、人混雜でもあることか。會津若松の町端れ、名にし負ふ鶴の城の大手の趾が程近く、宵だが四邊に人もない、葉月の末の月夜である、而已ならず、當夜は全市に催しあり、場末だけれども、祭禮の時に齊しい、軒提灯さへ點してあるのに、怪しからざる周章やう。」

「何うも、飛んだ粗相をいたしましたして、申譯もありません、何處ぞお痛めなさりませんか。」  
 「可うございませよ、否、ついあの唐突で驚きましたもんですから、大きな聲をして、何處も何ともございません。」



おとなし扮装の容色佳、二十ばかりなのが内端に云つた。

此の騒ぎに其の連なる娘二人、關の戸を鎖されたやうに同時に傍に立留まつた。いづれも同一年紀頃の、一人は二ツばかり少からう、位も品も打上つて、房々とある髪を高く、浮世繪の元祿島田を櫛巻に崩したやうな束髪で、其の艶やかな緑の中にも、雪の如き手の指にも、晃々として輝く球あり、銀河あからさまに流れれば、水かと紛ふ地の上に、白き光に包まれて、月の中なる立姿。羅の膚も後れ毛も、唇も裳もそよ／＼と、雲に駕したる風情である。知る是、鶴の城若松の城主、舊藩侯何某伯の息女竹子姫。附添つたのは侍女であつた。姫に引添うて立つたのが、傍を離れて、突當られた朋輩の身近に寄り、只管疎忽を佐びて居る町人に、

「もし、あなた、何にお驚きなさいましたの。」

「へい、」と又小腰を屈めて、仰いで其の侍女の顔を見たが、目も据らず、きよと／＼する。

前の娘が口を添へ、

「大層お急ぎのやうではございませんか。何うぞお構ひなく、何ともいたしはしませんから、」と云ひかけて、一寸襟を扱いたが、両手の寂しいのに心付いて、内向いて足許を。落した團扇が仄白く砂描の繪に似たり。

「まあ、私、仰山な。」と袂を取つて、腕を清く伸して拾ふ、高島田が、男の帯のあたりへ下つたので、慌てて屈み、

「はッ私がお取り……。や、これは早や、何うも恐縮で。否、何、貴女様、道を急ぎました次第では無いのでござりまして。」

一寸、あの、

前なるが、拾つた團扇で口を蔽ひ、退いて黙つたにも關らず、後の小肥に肥つたのは、帯の幅廣く前へ出た。

「私は何か吃驚なすつて、其で駈出しておいでのやうに存じますが、」

「へい／＼、」と揉手をし、對手が饒舌つて呉れるだけ、ものの云ひ好きさうに口軽く、

「お察し通り、いや、案の定、怯られましたな、驚きましたの何のと申して、」

膝に両手を下げたまゝ、半身を後に捻ぢ、又見返つた、須磨明石、薄靄のかゝつた鶴の城と、月の光の竹姫とを、角振分けて左瞻右瞻、蝸牛は一竦みで、

「いやも、驚きましたの、何のと申して。」



「あなたお城の方から駈出しておいでやございませんか。辻斬か追剝にでもお逢ひなすつたやうな御様子でしたわ。」

お定といふ肥つた方、思ふ處あるらしく、仔細を聞きつゝ、是も透すやうに大手の松。松は城の濠端に、低く飛ぶ鶉に似て見えるのである。

町人は苦笑ひ、

「辻斬處ぢやございません。然やうなものなら、何の恚う慌てるには及びませんで、地體私一人で参つたではないでございます。」

「飛んで入らつしたたのはお三方のやうでしたね。」

「御意でござりまする。三人、然も宮相撲の關取が一人。はて、彼奴等」と、やうく腰を上げ、腋の下の汗を懐から直に手拭をまはして拭いて、前後を昫すと、遙か彼方に、凸凹の石を見るやう、土塀に附着いて蹲める影あり。

「は、は、彼に見えます。もう一人、や、又彼に居りますわ。」

姫がイんだ七八間後の方、軒の下に背を見せて、白の兵兒帯を長く、紺足袋、浴衣がけ、腕まくりで、纒三尺ばかりな處を、ぶらりく、行つたり、來たり。

「助役さん、おい、役場の先生。」

此方に向くと、まともに月、此際、大にでれるから、知らぬ顔の半兵衛で、聞えぬ耳の丁助也。「私ばかり、何うもこれは、……向ひ直つて大聲に、

「お、い、關取。いやも、頼母しからぬ、全體關取などは、最初一人で引受けるなんのと云つて置いて、いざと成ると、まあ、何といふ……、くるりと廻つて、

「助役先生！」

突當られた當人のお君といふのが笑止がり、

「まあ、可うございますよ。」

「可い段ではござりません。夜分御女中方に打附りなんぞいたして、いゝ年紀を仕りましてな。でござりまするが、此で私が未だ一番落着いて居りましたので、關取の怯かされやうと來ました日には、其こそ貴女様方に突當る處は通越して筒抜けに向うへ飛んだでござります。役場の先生と來ちゃ、腰が脱けて、地を這つたでござりまするで、お體には觸らずに濟みました。唯、私かもう面目次第もござりません。」と頻に練言を云ふのである。

「さあ、皆」と一聲、胸を斜に、身を横に、指環に、簪に、黄金鎖に、月の光を颯と一浴び、姫は前途に立直る。



「姫様、」とお君が留めた。

お定會釋して、

「少々、何でございますから、一寸お待ち遊ばしませう。あの、お前さん、お城の方で、何にお驚きなすつたのよ。」

「いやもう、何？ 處ちやございませぬ。其のな、今一足で御門へ入らうといたします、石垣の曲り角で、背後から出ましてな。」

「え、」と、お君は口に袴と團扇を當てた。

「關取が眞中に居りました、其のな、三人が並びました中を通り抜けますまでは普通の女でございしました。」

大の男が三人でさへ、誰ぢや、彼ぢや、瀬踏の押附合だに、女が何と日が暮れて、と思ふ間もなかつたでござります。

ずつと前方へ行き抜けて、草の中に立ちましたつけ、屹と振り返つて私どもをおつと見ましてな、

「又もや不氣味さうに背後を見たが、

「え、げら〜と笑ひました。」

いや其聲の異變な、凄いと申したら、何とも早や、幅が何のくらのござりましたか、體を引包んで緊めつけるやうでな、耳へふんと来て天窓へぐわん、

と町人頭を引込ませ、胸を反しながら腦天へ手をびたりと當てる。

三

「何が何やら、唯もう夢中で駈出して參つたでござります。」

一目見ても推量の出来る、竹姫の風采に、言はずとも其と悟つたから、侍女にもものいふのだけれども、恰も、はッ恐れながら、凡て申上げ奉る調子であつた。仔細を聞くや否や、ぎよつとして、二人は顔を見合せた、お定が、

「まあ、何でございます、あなた、其の女といふのは、」

「然れば、解せませぬてい。」

と大眞面目。

「皆さん。お三人とも御覽なすつたんですか。」

「見ましてございませうとも。お、い、」と再び前後を呼ぶ。

「可うございますよ。」



「矢張何處のか、女房さんなんですか、」とお君は寄添つて細い聲で、「でござりませうなあ、」とばかり間の抜けること夥しい。

お君は町人の其の顔を、差覗くやうにして、

「何處のおかみさんでございませうねえ。」

「ございませうかな。何處かのおかみさんでございませうかな？」

「然うですな。」

言が途絶えると、ポーンと鐘。

お定も薄氣味が悪さうに、

「何うしたと言ふんでせう。」

「何でござりますよ。別に八百屋のかみさんと申すわけではありません、質屋の御新造でもござりますまいに因つて、いづれな、變なものでござりますかな。」

「おばけですか。」とお君は、團扇に風が觸つて、わな／＼。

「一寸々そんな人に會つた者が有るのでせうか。」

「別にな、誰かと申して見たと言ふもないでござりますが、一體よくお濠へ落ちましては人が死にますので、中には覺悟をした投身も多くござりますが、何と云ふ事なしに、お宮參詣の婦人が

貴女、三枚襲の紋着で、濠端を通りますと、土手の草が裾を引きましたやうに、する／＼と落ちて、唯お濠の水の上へ横になりましただけ。

眞晝間、人通りはござりませなんだが、多勢件が附いて居りましたで、あつといふと直に引き上げました。沈む間さへございませぬ。紅も流れず、白粉も綺麗なまゝで、最う彼の世へ參つたことがござります。

一時は、此の大手下を豆腐屋が通りかゝりますと、石垣の中から、草刈が一人、波に追はれたやうに通げ出して來まして、躍上るやうに飛んで落ちて亡くなりました。年々人の損じますのが、十人下なことはござりませぬので、此頃ぢや、もう草も生え次第、晝だつて誰も入るものは無いでござります。

「厭ですなえ。」

「厭ねえ。」

「はい。」

「行かうよ、さあ、出かけようね。」と竹姫は聞かぬ態、心にかゝることは無い様で、敢てものもし給はず。

其の御袖に引附けられ、二人は左右へ摺寄つた、が、お定は踏留るが如くにしつゝ、



「一寸、一寸、そんな恐い處へ、あなた方、構はないで出掛けたんですか。」

「それは、もし慙うでござります。え、今度、伯爵家お姫様が、」

氣を兼ねたか、口籠つて、

「はい。はじめて當會津へ御入國遊ばしましたに就いて、あなた様方も御存じの通り、市中残らず、提灯を點けまする、旗を出しまする、花火は揚げまする、催事やら、造物やら、十年以來の賑でござりまするが、私どもも又唯ほんの心ばかり。」

### 謹上再拜

#### 四

「手前佐野屋喜平と申しまする、御城下の小商賣でござりまして、懇に仕りまする者どもと相談をいたしましたるが、何や彼と申さうより、豫て寄合うて修行いたしましたる弓術の會を一ツ、盛に催しまして、蔭ながら姫様御入國をお祝ひ申上げませう、と大町の龜遊軒と申すので三日間な。いやもう、嗚呼がましうござりますが、其の繁昌なこと。武は盛なお國柄、弓矢の道は唯今以て廢りません。舊藩士の方々は別といたし、唯我々平の町人百姓だけでも、四五十人は集りまして、

一昨日から押通し、手前手が矢數一千も仕りましたが、いやはや、其の平生運動がてら、尺的を、ほんと射抜きますやうなわけには参りません。あづちが蜂の巢に成

りまして、射割の板は曲みもしませんで、吹出しさうな顔をして居ります。あぐねましてな、倒れるやら、寝るやら、大概ぐつたりと、筋が弛んでしまひました。丁ど晩

方でござりますが、戸外に立つた見物の中から、二十四五の瘦方な、脊のすらりとした、色の淺黒い、眉の濃い、目に美しい光のある、小瀟洒した書生體の人物が、麥藁帽子を取りながら入つて見えて、誰方も失禮ですが、一本と云つて、客弓のな、三分五厘重籐といふのをピーン。

矢筒を引寄せて、片肌脱ぎに身構へました、射前の見事さ。けれども何、飛入の外矢、何程の事があらうと見て居りますと、やがて番へて、キリ／＼と引絞りましたが、そりやこそ砂が立つと思ふと、何うでござりませう、カチリと音がして、射割が、ぱ／＼と消えましたわ。

やんやと申す内に、立続けに五枚割りまして、悠々と膚を入れて、あつけに取られました、帳場へ挨拶をいたしますと、

佐野屋は胸を引合せ、

「慙う其の衣紋を直しまして、凜々しい好い男子でござります、帽子も被らず、抱へながらフィ、と出て行くでござります、扱こそ。」



何とか云ふ槍の先生は、夜中に裏庭で二間柄をりう／＼と扱いて居ると、穂尖へ女の生首が喰  
附きましたとか申す事、ものは氣で魔がさします、尋常ごとではあるまい、何處で消えるか跟け  
て見い。

合點だと申しまして、町消防夫のおさきばしり、駈出しの勘次といふ筒先が飛んで行きました  
つけ。やがて目の色を赤くして駈けて歸り、大變々々、途中から帽子を深くして、靜々歸るのを、  
見隠れについて行くと、お城の中へ入つて、石垣のかけにかくれる、日が暮れた、と大息を吐く  
でござります。

そりやこそ御維新の時分鬼と呼ばれた會津の大將の、若い倅そツくりだつたと云ふ老人もござ  
いますれば、彼に居ります、役場の助役などは、宇賀神堂の白虎隊の木像、何番めかに、寸分違  
はぬのが有ると申します。

又つい先頃、連中が、祈願を籠めまして、白木の弓に白羽の矢を野郎構の摩利支天尊  
天に奉納を仕りました。居ります、何につけても弓矢神の御感應、追かけて拜み申せと、  
直に參るつもりにはいとし、なれども、右の人とりが附いたお城でござりますで、第一手前  
二の足でござります。然うすると、何うでござります。四斗樽が手を出したやうな、ヤ、奇代な手附をして、此方を

招いて居ります、あれ、何うでござります、やれ、やれ、やれ、やれ、

「吻々々。」 姫は、關取の影法師を見て微笑み給へり。侍女たちはそれ處か。

五

「奴、大町の米屋の信州者、小力がござります。矢張龜遊軒の連中でござりましてな、胸を突  
出して、どんと來い、何でも此處で應へて見せる。私が附いて居れば、根こそげ城が飛ついても恐  
いことはごんせぬえ、などと申します處から、物好きな助役と三人、たうとう出掛けましてござり  
ますが、途中で灯が点きました、此處を通りました時分、もう月夜になつたでござります、はい。  
いよくお城の石垣の中へ踏込まうといたしますと、前申しました通り、瀬踏を譲り合つて居  
ります中に、右の、すうと顯れて、すらりと立つて、げら／＼でござりませう。いやもう、お話  
し申すさへ寒氣がいたしまする。」 語り果てると、ついで出すべき言も無げに、月の影とともに  
白け返つて黙然と成る。

唐突にはツくしよい。

「ほい」と妙な顔をして、むぐ／＼とやつて、落着いた口に手をあてて、  
「はツくしよい。」



けろりとして、佐野屋喜平。

「え、而して貴女様方は、これから何方へかお納涼でござりますかな。」

お定が折を得たりと云ふ見得で、

「納涼に入らつしやらうとおつしやるんですかね、姫様、」と密とお顔を見て大いに諫めむと欲する處あるものの如し。

姫は耳にも入れ給はず、霞の風に靡くが如く、はら／＼と五足六足、佐野屋の身近に、其の近優りする姿を寄せ、頷くやうに頭を下げて、

「然やうなら、難有う。」

「はーッ。」

恐入つて佐野屋、斑兀の彼方此方、一兀百兩の分別と、自ら稱する、通計五百兩の天窓惜氣もなう、爪尖を手で握らんばかり、魂が腰に据わつて、帯の結目が、ぴんと撥ねる。

「おいでな。」と潔よく、言放つが如くに遊ばし、おくれ毛を、吹かせながら、内端に輕き雪駄の音。

はや五六間露の上に、羅淡く進み給へば、それとお定。

後れてお君が、團扇の柄を固く取つて、追ひ續いて、お定に摺りつき、小さな聲で、

「一寸、矢張、何うしてもお城へおいで遊ばすの。」

「は、ですからね。」

お定は少し急き調子、

「姫様、姫様。」

下界の天女は靄の中から鶴ヶ城の大手道、見通の廣場をすん／＼。恰も艶ある雲を渡つて、次第に近く、城の松の梢に上ると怪まる。一步が一町も後るやうに、侍女はあせつて、喘ぎながら追附いたが、はやくも草の露棲に溢れて、濠は渾沌として一帯石垣を浸して暗い。

「何よ？ 大きな聲をして、人が出て見るわ。」

呼ぶのを聞流して竹姫君、はじめて立停つて制し給へり。

「人ツ子一人居りはいたしません。姫様、お内家を出ます時から、私どもが申し上げましてござい

ますが、お危うございますから、お見合せ遊ばしませんか、ねえ、お君さん。」

「然うですともね、誰も参りません處へ、夜分お出で遊ばして、どんな間違がございませんとも限りません。不意に突當られましたばかりでも、私はまあ、どんなに吃驚いたしましたございませう。」

見返れば遙か真直に隔つて、此折から助役と云ふのも、關取も、佐野屋と一に成つたと見え、



ちら／＼月の影燈籠、黒き人影動きつゝ、同一處を立去らず、姫を憂慮ふ氣勢である。

六

お定それと心付き、

「まつたくでございますよ。お君さんだつて、宿を出ます時は、こんなお月夜に、どう間違ひましたつて、人に突當られようとは思ひがけもいたしません。

それでございますから、ひよつとした事で、又どんな間違が無いとも申されませんし、あれが町中でございますから吃驚しただけで、濟みましたやうなもの、もしか姫様。恐しい噂のございます、お城で御覽なさいまし、目をまはさないでは濟みませんではございせんか。ねえ、お君さん。」

「はあ、然うですとも。」と云ふ中も震へて居る。

「それに三太夫様なり、誰方か、男の方がお供でもいたして居りますれば、未だしもでございますが、」

未だ言ひも終らぬに、

「あゝ、お前たちを連れて行かうと言ひはしないよ、安心おしな。」

と姫は莞爾。

お定目を圓くして、

「ですけれども、」

「ねえ、お定さん、」

「否、いゝえ、頼んだつて連れて行きやしませんよ、直ね、」  
姫は愛々しく打傾き、

「直私歸つて来るから、二人して此處に待つておいで。そんな臆病な者と一所に入ると、風が吹いても倒れさうよ。まあ、お君、お前震へておいでだね、確乎おしよ、何だねえ、小兒見たやうな。」

「私は、私は宜しいのでございます。姫様が、」

「何ともありやしないわ。ね、お定も可いかい、直歸るから、お君、お前、其の團扇をお貸しよ。」

「はい、」

箭羽白

「蟲が集ると煩いから。」

姫はお君の手から參らせた團扇の柄を、口に銜へてうつむいて、脰を曲げて後毛を搔上げ給ふ。



東京なる御館の庭を漫歩きの、池をめぐつて築山にかゝらせ給ふと敢て違はぬ氣色を見て、お定是はと、あきらめながら推返して、

「姫様、それに、あの、姫様は東京でお生れ遊ばし、今年お十八で、はじめて此方へおいでなさいましたのでございますから、些ともお城の中の御様子を御存じではございますまい。井戸やら、釘やら、あの、焼跡へだつて、うっかり入るものぢやないと申しますのに、夜分ではございますし、」

「月夜ぢやないか。」と、澄して松ヶ枝を御覽する。

「ですが、お城趾でございませぬもの、空井戸やら、抜穴やら、錆びましても刀の折れたのなんか、どんな處に落ちて居りませんとも限りませぬ。」

「私ね、繪圖面でよく拜見して、本丸の處、二の丸の處、お濠のやうすも、お炊場のことも、井戸のある場所だの、お天守のあつた所、誰が何處で討死をなすつたと云ふ事もね、あの何とかいふ奥女中が、可哀さうに身體を洗つたま、見えなくなつたといふね、」

二人又ぎよつとする。

「湯殿のあつた處まで、皆知つて居ますよ、此の團扇でかうやつて、」  
薄は右へ葉、左へ穂。

「草を分けて行くんだよ。」と直に蓮歩を移さるゝ。

「あれ、姫様。」

「お君さん、こんな時に、秋山さんのお嬢さんが居て下さると可いんですね、あの方だと、どうかしてお止め申し上げるだけけれど。」

「眞實ね。」と染々云つた。

「全くよ、今夜は音樂會があつて行つて在らつしやるんだもの、市長さんなんかお衣さんのヴァイオリンを聞きにおいでなすつたと云ふのに、姫様も行らつしやれば可いぢやあないかね、おや、どうしよう、づん／＼おいで遊ばすよ、あれ、お君さん何うしようね。」

### 草の灯

七

箭羽白

湯川の瀬の音、松の聲、摩利支天の森の下を、石燈籠に竝んで二人、梢洩る月に影を投げて、  
風に樹の葉の揺るゝとともに、ぶら／＼歩行きの野良調子。  
「やあこれ、主や大分長い事拜んで居たが何を願うただよ。」



「言はいでも知れたことんし、大願成就だ。」

「金持に成りたいかの。」

「まゝ、そんなもんぢや。だがの多十、」

「やあ、」

「金子は欲しいけど、私何も金持さ成りたくはねえことんし。」  
多十なるもの頷いて、

「知れた、知れた。はあ主が大願ぢや、東山の女が事だつぺや。」

「づんと、胸ぢや。」と前はだけの胸を叩いて見せて、肩にかけた手拭の端をなぶる。在方の息子

風、腰に一挺の尺八を管高にさして居る。

岩代國のお百姓、かや〜と打笑ひ、

「措けぢや、彼は新妓で全盛ぢや。角を握つて暴牛をおさへればとツても、主等が手に合ふこと  
では無いの。其にの、お互に、在所の名が頼母しくないことよの。野郎がまへと云ふでねえか。

なあ、これ、野郎がまへと云へば、野郎さおかまひと云ふことぢや、女ッ兒は寄つかねえと、天  
道様おつしやりつけた。それよりは、やあ、三吉。」

「何だのし。」

「手近な處で、出来べい相談があるに氣はねえか。」

「主が相談は何時も出来ぬことに極つて居るわし、大方又何だつぺい、西瓜のたねを銀貨にする  
ちう事だつぺい、主、じやうだんものだあ。」

「おツと言はぬ事、犬の兒だ、」

と暗い中を潜つて出て、

「こりや、境内を出れば、もう、其の内へ入るも同一ぢや、其處な茶店のお房ッ兒よ。」

「それ見さい。」

「は、は、これ、見さい、さいて呉りよ。」と多十、居合腰になつて、肩を立て、體を斜めに指  
を撥ねて、三間柄を下段の殺勢、無手で鳥刺の眞似をして、熱と見込む。

餌刺棹なら尖の届きさうな間近な處、此の御堂は場末の町から湯川に添ひ、野郎構を通つて、  
温泉の勝區東山に行く、途中一町ばかり引込んで、浅いが森の中に在り。左右は田圃で、北の方  
遠く飯盛山の裾に展けた、折から月の、中空に、黒雲を捲上げて、鱗の色銀の如き一條の龍の蟠る  
は、城の搦手なる樹立の中に高く残つた石垣の名残である。西の崑を後に控へて、露も星も見え  
透いた葎簀圍、灯影薄の穂に映り、葉は翠に、根は黒く、破れた岐阜提灯のやうな小屋は、あは  
れな娘の掛茶屋であつた。



多十やツと氣合を入れ、

「はて、わけなしの、忝し、寢鳥を刺いて取るやうなもんぢやが、なあ、三吉、主が云ふ通り出来ぬ相談、西瓜の種でしよことがないかい。」

「駄目なことんし。」

「それにしても好い容色ぢや、これはあ、主の前だが、東山の新妓さが鬪斗をしても追つかねえだよ。」

「如才も無ア癖に何だとえ。越後もので無えだで、角兵衛はすぬとこと。」

「吐かす！」と黄な口を開けて笑ひ、多十腰を伸して、ついと立つたが、わあーと、しっこしの無い驚の聲がぼやけて、思はず背後へ一足退く。

足許の土から湧いて出たやうに、土とすれく、ちよろくくと白きものあり。

「何だつぺいや。」

三吉腰なる尺八を抜いて、追取刀、うつむいて透して見て、

「犬ころ、ころ、ころ、犬の兒だんし。」

八

「見さい、あれ向うの松の樹の根ツこの處さ、いかい事ころくして、眞桑瓜が轉がつたやうでねえか。」

多十も及腰に瞻つて、

「はあ、矢張犬ころだア、はてな、此の節の不景氣で、皆持つて來て棄てるすらあ。」

「人間の棄てられたのも居る處ぢやで、犬ころを放すにも、丁ど可かつぺいことんし。」

と少いに悟つたことを云ふ。

「惜い別嬪だに、内密でお房ツ子の店さ休まうで無アか。男知らずに、もう今年は二十を越したつべ。對手欲しかつぺいことは、主とかはりはあんめえと思ふだがね。」

「言はつしやることよ。」

「その上、今年の春は一人のおふくろを亡くなしたで、嘸心細く寂しいことだつべ、そりや此の、」

と多十薄を握つて、手の露を額に押當て、

「觸らばこぼる、風情なりけりと言はあ。主唄の文句で知つて居べい。處で主さ尺八の吹ける藝人といふもんだで、むかうから袖を引くことよ。其代にゆで玉子を二ツ取つて、ラムネを飲んで、主が其の拂をするだぞ。」



「御造作でござりますだ。」

「は、は、駄目べい言はねえで、内證で遊ぶべいよ、誰も來はせぬ、心配は無アと思ふ。」

「措けちや、措けちや、」

「三吉些と歩を早うし、」

「お房ツ子が許さ、腰をかけて、ひよつとか知れべいなら、會津中に附合人の無くなる事さ、主知つて居べい。それにはあ疾うにから、ならずもの權太めが、内々手に入れて居るちうだぞ。」

何方も人外だ、似合だつべいよ、なア多十。」

「然ればよ、お房ツ子は知んねえが、野郎が方さ血眼で附き絡ふと云ふだ、床の間に活けようなら、金屏風の座敷で視められる綺麗な枝でも、掃だめに捨て置きや、蛆や蠅も一所だアさ。どのやうに嫌うても、他にかまひ人がねえ事なら、終には口説き倒されべい。」

と次第に聲低く、やがて口を噤んだが、掛茶屋の前である。

「そりや掃溜ぢや。」

「鼻を撮むべい。」

「然うはせぬことんし、罪になるだ、」

とこそ、件の松の根に近う、店頭を向うに避けて、通りがかりに、多十婆婆氣で捨世辭を

いふ。

「今晚は。」

「や、黙らつせえ。」と傍から制したが、はやくも娘の耳に入つた。

お房は中形の浴衣に、なえた黒繻子と唐縮緬の腹合せの帯、前垂の淺黄の紐、これだけ新しいのを低くめてすなほ艶のある黒髪を、繕はぬ銀杏返し、燈火を少し離れて、道を行くもの目に背いて、くの字に端近く床几に掛けたが、黄楊の櫛も人柄で、茶店の姐さんと言はうより、少き女房が浮身を窺した水仕奉公の趣あり。紅と青とに織ぎ足した、交りの襷を上から釣して、土間にくると轉がった、眞白な小犬の、天窓で土を控ねてじやれる手を、内向いて、あやして居たが、多十の聲に半身で此方に向き、

「お掛けやすいな。」と柔に優しくいつた。多十思はず小鼻の皺を弛くのばし、ニヤリとして、

「はあ、休めといふだかね。」

「お休みなさいましな。」

「そんりや、休めだ、やあ、三吉。」

「行くべい、行くべい、」と三吉すねたやうな身振なり。

「待ちなさろ、まあ、可えといふに。」



多十は低聲の届くやうに、伸上つてお房を見た。

九

「姉、己はあ、何もお前さ、恚うといつて、別の仔細もねえだけんど、世間體があるでや、連の者も店さ休むことは厭だちうげに、今度來て寄りますべい。」

面と向つて恚るかけかまひのない差合を、お房は豫て覺悟をするまでに、斷念めて居るのであつた。

「次に來ておくれやすえ。」と寂しい顔で莞爾する。

薄の中の女郎花、曲らぬ姿の捨て難さ。多十其のまゝには立去り兼ねたか、三吉に袂を引かれながら、踏留まつて、眞向に手を擴げた奴唄。

「なう姉え、茶一ツくれさつせえ、舌を濡らして行きますべい。やあ、お造作だが、此處へ持つて來てくんなさろ。」

「あい」と靜に襟を差置き、小犬がちよつかいに出した小さな前足を、上から手鞠を突くやうに押へたが、土瓶から波々と、松の根際へ出前の番茶。些と大ぶりの茶碗に注いで、盆に乗せ、帯に挟んだ手拭の端を、まさぐりながら、藁草履でしとくと、灯を離れると月影に、透通るまで

色白な、孤の顔が照らされた。

「澤山おかはりをしなさいましよ。」としとやかに差出すのを、宙で大づかみに取らうとした、近頃の残暑のため、干破れたやうな多十の手が、茶碗に蔽被されると、殆ど同時に、

「え、措けツちやあ、汚れるといふに。」と三吉が横ざまに拂つた掌、辻つてお房の二の腕を礎と打つ。痛さに眉を蹙めたが、盆は手を放れて、茶碗はバツタリ。

「あれ」と留めようとした指尖を、其まゝお房は土に支いて蹲つた。

「よう」と吃驚、多十は斜違に飛退つて、松の枝に片手をかけ、足にかぶさつた茶を、ひかゞみにぐいと摺りつけて、

「はッ魂消た、何をする。」

「私等、我等はア御國さのために兵隊になるだアぞ。こんなものを飲むと汚れるだ。」

「ついと立はだかつて力んだが、月に隈なく、明かに三ツに破れた、茶碗を見ると、三吉も逡巡の袂を口に立ちも上らず、ものも言はず、お房の涙ぐんだいぢらしさに、遺瀨がなく大惰氣で、

「フム」といつたまゝ茫然と立つたが、四邊を見廻し、じり／＼遁足、

「お城のお化ぢや、そりや出た！」と呼はりさま、身を翻して街道の方へ、ばた／＼と駈け出す後から、



「三吉やい、主ア、主ア。」

多十も續いて一目散。

彼方からも此方からも、ちよろ／＼と二匹三匹、慰め顔な月の影、綺麗な斑あり、白あり、黒あり、尾を掉つて、くう／＼／＼。

膝に両手をかけた一頭を、お房は袖でしつかり抱く。

爾時二人が見えなくなつた、堂から正面の路の中へ、衝と立出でた仇姿。こゝに人ありと見たらしく、蹙音軽くつか／＼と間近く寄つた。根上りの圓髷小形に品よく、白襟で、質素な越後上布、唐繻子の黒の丸帯で、裾短にきり／＼として、灰汁も色氣も抜けたる風采、眉を拂つて鐵漿を含んだ、臉の腫ぼつたい、目の涼しい、鼻筋の通つた、丸顔ながら引締つて何處にか品のある中肉中脊、古風の顔の造であるから、年紀のほど定ならず。急いで來て立留まると、ふと風が止んだので、水色縮緬の扱帯の下に、ぐつとさし込んだ、女扇を、覺悟の懐劍抜かうとする時、人の氣勢に身を起したお房と顔を合せたのである。

十

草葉に繁く袖に浴ぐ、目に一杯の露ながら、お房は懐しげに摺寄つて、

「おかみさん。」

「お、お房さん。」

「まあ、おゆつくりやしたなア、と待ちかまへて居た様子である。

「町は賑だね、まるでお祭のやうな騒だもんだから、つい小兒見たやうに、ぶら／＼彼處此處見歩いて、田舎ものぢやないか。あ、其で遅くなつたんです。大層待たせたね。何ね、こんなに長く成るなら歸りには寄らない分に言つて行けば可かつたと思つたよ。」

「どれほど遅うても可う來ておくれやしたこと。」

「よく、未だ店をして居たねえ、而して待遠くつて、戸外へ出て居たのかい。」

悄然した風情を見て、直にソレと、破れた茶碗に目を着けて、

「まあ、お前涙ぐんで。又何か言はれたんでせう。然うだらう。」

「今來ようとする、突然に二人、村の者が此方から飛んで來て、打突りさうにして駈出して行つたもの。何だね、いつもいふ通り、亭主にしようとも、兄にしようとも思はない者に、何をいはれたつて構ふことはないぢやないか、お房さん。」



「しかし亂暴をされちや打棄つて置かれぬね。其の茶碗は何うしたの、こんな處まで持出して、松の樹で缺いたんですか。」

「あの若い衆が通りやしてな、今晚は、と聲を掛けなはつたから、休んでおいでやすというたらなア。」

「然うすると、」

「傍へ行って腰をかけたら身體が汚れる因つて、茶を此處へくれ、言やはるで、持つて出ると、一人の方が取つて吞まうしやはつた處を、汚れる言うて、もう一人が、私の手を叩きやしたで、」と、おつと堪へて涙をはらく。

女房黙つて聞いて居たが、腫を寄せて街道の方を視め、

「お房さん、まあ入つて掛けようぢやないか、種々話もある。え、お前、そんなものは打棄つてお置き。」

「でも、こなひだ、おかみはんが買うておくれやして、五ツ揃うて居るのやし。」

「可いよ、打棄つてお置きよ。あ、よつとしよ。ほ、ほ、もう年を取ると、一々此の掛聲だよ、厭だねえ、」

尋常に腰をかけ、女房襟を寛げながら、

「お、涼しい、何時もお前ん許は寒いくらるだよ、もう蟲が鳴くだらう。」  
「鈴蟲が鳴きますぜ。」

「可いことね。あら、御覽、またお友達が殖えたぢやないか。まあ、ころくやつて、白や、くうと鳴く。」

「そんなに巫山戯ると踏まれるよ。可愛いねえ、幾つ居るの。」  
「五ツになりましたわな。」

いそぐ膝をついて鐵瓶の下を覗く。

「お房さんお構ひでない。然う、五ツなんて居たのかね、それぢや一つ茶碗が破れたつて何でもないよ。」

女房は帯の間から、御殿持の煙草入、思ふ處あるらしく、目を瞑つて、稍仰向き、胸の邊で、手さぐりに筒を外す、床几にかけた毛氈も、煙管の銀に花やかである。

其處へ差寄せた煙草盆で、無言で點けると手許に引き、持返して軽く一ツ、トンと火皿の灰を落す、廂をはらくと露の音。

女房は差覗いて、松の梢に颯々として、流る、如き銀河を見た。  
「秋ぢやないかね。」



日暮陰風吹鐵衣  
孤軍轉鬪陷重圍

「お房さん。」

「嘘おかみさん、お草臥れ、此方へお上りやしてお休みやすな、とお房は古毛氈の端を引張る。女房は心閑に一服を味ひながら、松風に耳を傾けると、吟詩の聲が近いて、

虜中白骨行應朽

樓上紅粧尙思歸

「お聴き、誰か来るやうだね。」

「良いお月夜だす因つて、書生さんが、ぶら／＼歩かしやはるのだつせ、今に來やはりますやろ、おかみはん、あんな唄お好きだすの？」

「何ね、好も嫌もないけれど……」

いひかけて打案じ、

「お房さん、書生さんでも何でも可い、此處を通つたら聲をおかけよ。何時のやうに寄らないでも大事な、一體どんな事をいふんだか、私が一つ隠れて居て聞いて見るから、」

「お止しやす、お聞やしたらお氣に障りますせ。私もう何も思やしやせんもの。」

「まあ、お前おかまひでない。否ね、何うせ分つて居る事だけれど、わざ／＼路傍へ呼出して、盆ごと打敲いて茶碗を壊すなんて、憎いことをされちや私が黙つて居られない、あのね、一寸、」

「何え。」

「其處の戸は明いて居るか、いと目で知らして、うつむいて吸殻を軽く拂いた。

葦簾の横に附着いて、譬へば古びた繪馬堂の如き、此の掛茶屋の母屋がある、月下に暗く戸を鎖して、店の燈は其處まで届かず、喪服で包んだ家の如きは、長く煩らつたお房の母、世を去つて幾時経ないのであつた。

煙草入を早く了ひ、すつと立ち、

「お房さん團扇を一本、蚊が居ようね、あ、可し、扇がありました。」と靜に胸をおさへて云つた。

「蚤が居まつせいな、おかみはん、私の事なら打棄つて置いておくれやす、お氣の毒でなりやせ



んえ。」

「可いよ、そしてね、何かいつたら、構はず言ひかへしてお遣り、背後に母さんが附いて居ると思つて、氣丈夫に、分つたかい。」

再び耳を傾けたが、

「来るよ、と云つて、薄の蔭、白い穂にならんだ人の、黒髪も顔も隠れる。

間もなく日和下駄を踏んで来る音、露にしつとりとした地に、近々と早や此處へ。

お房は柱の竹に片手をかけ、袖を取つて、姿を半ば露して、便りなげに待つて居た。松の下行く男の影。

それと見て内端に呼ぶ。

「お掛けやす、お掛けやすいな。」

其の人首を低れ腕を拱き、茲に茶屋ありと知らずに居たらう、呼ばれてはじめて心付いた趣で、立停まると、振り返り、左右を見て、つか／＼と歩を轉じ、燈を慕つて來ようとする、路の中で前のめり、

「や、と手を擴げて、ぢつと見て、呟く如く語るが如く、

「犬の兒だ、犬の兒だ。」

「休んでおいでやす。」

「涼しいな、

と云ひながら、麥葉帽を脱いで持ち、猶豫ふ色なくづつと入つた。

休むと汚れるとさへいふ店に、近頃異數な學生客、濃い飛白に扱き帯して、素足に日和下駄。色の淺黒い鼻筋の通つた、眉の濃い、品の可い、脊のすらりと高いのが、眼に星の光あり。

十二

客は床几の眞只中、正面に遮るものない稻田の空に、仄なる石垣の名残を望んで、

「彼處に見えるのは、あれは若松の城だらうか。」と秀でた眉を擡めたが、穩ならぬ色があつた。お房は何の氣もつかず、

「はあ、お城たすえ。」

「然うか、

とばかり黙つて了ふ。

「あの、お茶一ツおあがりやす。」

「……………」



繼穂なささうに

「もしな」と云つて、捧げ出した澁茶一碗、又た、き落されようか、弾飛されでもしようかと、さつきの今で、お房はおどく。

それでも返事をしなかつた。客は目が覺めたやうに、顔を上げて、まともに見たので面を背ける、お房の袖にも小犬の背にも、はらくと松の影、流るゝばかりの露を留めず、簀の子の天井を洩る月は、濡れ色の艶やかな女の髪に染むのである。

客はあはれにしをらしく、はじめて知つて茶碗を受けたが、口はつけず差置いて、  
「酒はあるかね、姉さん。」

「は、御酒ですか。」

「む、酒だ。」

お房は取附の棚に五六本、貼紙は正宗とした罎が、マツチの箱と並んだのを指して、

「彼で可うすならお飲りやす、おいしうおすか何うだすやろ、」たよりなさうに云ふのであつた。棚を見込むと田の風の吹通しで、埃は溜つても居ないらしいが、松の葉越しの月が射すだけ、日の経つたのは知れるのであつた。

「可からう、早速一杯。何、姉さん、猪口が見當らなけりや茶碗で構はん、出しておくれ、澁け

りや冷で遣つけよう、飲口が宜かつたら罎をして頂くとする、どれ。む、結構に行ける、面倒だが突込んで貰はうか、其ね、口についた封じ紙をよく剥してくれ給へ、然うだ、湯氣でべろりと糊がはがれると、難儀だからな。」

「何うだすえ、熱いのが可うおすか。」

と罎をつけた鐵瓶の肌を、やさしい手で両方から壓へる仕種を見て、馴れないのを知つたか、氣の毒さうに、

「いや、可い時分に僕が出さう、手を伸ばせば譯なしだ、可し、可し。」

お房は優しい目のふちに皺を寄せて、眩らしく客を見上げ、

「ようしておくれやす、私不束だすな、お氣の毒や、」

「いや、宜しい、扱懲う段取が出来た處で、何か肴はあるまいか。」

「何も旨いものはおさいやせんけれど、鶏卵の湯煎にしたの、何うだすやろ、」

「茹鶏卵か。」

「然うだつせ、地鶏卵で新しいのだすえ。」

「妙々、其を五ツ六ツ、出しておくれ、鹽はあるか、占たな。」

盆を手許に引寄せた、客は足を舉げて床几に落着き、罎を取つて自ら注ぐと、下にも置かず、



ぐつと干した。

「上出来、而して又なかく名酒だ。姉さん、最う店を仕舞ふ處だつたらうに飛んだ邪魔をした。」

「何うせな、寝やしても寂しいのです、何時までもお休みやおくれやすな。」

十三

客は旨さうに舌打して、

「難有い、不思議な處でありついた、こんな處で飲まうとは思はなかつた。姉さん、僕はね、土地のものぢやない、今も町を通つて来たんだが、大分賑で一寸一口遣るやうな家は、二階の欄干も物干も溢れるほどな景氣だらう。中にや、三味線太鼓の音のするのがある、旅鳥が一羽ぢや些と氣が怯けて入られない。入つた處で、氣がさして駄目だし、他國の者とても旅籠へ歸つて此の月に雨戸を閉めて飲んで不味し、路々大鬱ぎだつたのに、よく、まあ、こんな人通のない閑靜な處で飲ませてくれる。大に謝すね、然も酒が可い、かはりをつけておくれ。」

倒に雫を切つた、見事に一本。  
餘り大量ではないと見えて、もう顔の色も、ものいふ調子も變つたのである。

お房も嬉しさうにいそくしながら、

「お世辭だせうけれど喜んでおくれやして、私もな……」

「何、君も悪い心持はしないといふのか。」

「お嬉しうおつせいなア。」

ハタと膝を打つて、

「厚意謝するに言なし。む、いや、此の鶏卵も又至極結構だ。」

「もつと、お食りなはるものがあると可いのやけど、あの、何うだすいな、夏大根の刻んで漬けたのがおざいやつせ。」

「大阪漬だな、貰はう、貰はうとも、お誂だ、」と大に乗る。

「そんならな、もし一寸行つて取つて參じます、待つておくれやす。」

「いや、御足勞には及ばない、其處にあるンならばだが、取りに行く、だつてお前、」

「直、其の母屋だつせ、わけありやしやせん。」

と前垂の端を取つて、お房は薄の前を通つた、あとから小犬がちよろ／＼とついて行く。  
「待つて、待つて、一人ぢや寂しいや、こら白。」と云ひかけたが、どちらも忽ち見えなくなると、松葉がバラ／＼と溢れて落ちる。渠はぶる／＼と身震ひして、上げ胡坐の脚を土間に揃へ、胸を反



して眉を擧めて、鶴の城の渺として、月に百年の歴史を描けるを見るや、心迫ることあるかの如く、ばたくと忙しい足踏。

其處へ草履の音すたく、

「遅かつたすやろなあ。」

「これは憚り。丁ど二度目のお爛もついた、姉さん、其處が母屋なのか。」

「然うだす、犬小屋だつせ、とあきらめたやうに慾も望も忘れた風采。」

「暗いぢやないか、誰も人は居らんのかね。」

「え、」

「父様や、母様は。」

「おかあさんは先達て亡くなりやした、お父さん私知らんのだす。」

「ぢや、御亭主？」

「厭だつせ、と身を細く、兩の袂をぐいと絞る。怪訝な顔して、

「それでは一人か。」

「はあ、一人だす。」

「夜も、」

「何時やかて、一人だつせいな、ほ、ほ、」

客は又仰いで飲み、

「笑ひ事ぢやない、こんな處に年中一人で居て何うする。」と目を輝かして云つたが、何を思ひ出したか、今更果敢ない店の彼方此方を向して、突然聲を上げて、

「ラムネの饅が！ 冷してあるな。」

十四

「姉さん、飲むよ、大いに飲むが構はんか。」と猪口を持つた手を腕まくりで、客は目を睜つていつた。

お房はたゞおとなしく、

「ラムネ食ののだすかいな。」

「は、あ、ラムネ、いや、ラムネを飲まうといふ理窟ぢやない。些と外に仔細のある事だ、此の仔細といふのが、又なか／＼不思議に面白い、何うだ話して聞せようかね。」

「聞かしておくれやすな、私ほんとに寂しいのだす。」と客の床几を少し放れて、お房は前垂に袂を折りかさねて小犬のつむりを壓へながら、前髪のふツくりした、瓜核顔をなつかしさに振仰



ぐ。  
「寂しいか。あゝ、寂しからう、ラムネの話も寂しいや。」と何を思出したか。ガツくりとうなじを垂れた。

「何だすえ、ラムネはんって人さんのお名だすの。」

「人の名か。」

聲を沈めて胸で笑ひ、

「人の名だ。時に姉さんの名は何といふね。」

「私の、……」

「うむ。」

「ほ、ほ、私名なんかないのだッせえな、田舎ものだす。」

これを聞くと目を瞑つて、

「ラムネも同一やうなことを云つたつけ。都をば霞とともにいでしかど、秋風ぞ吹く白河の關。

富士も浅間も鄙の名所だ。私は松島でございます、手前那須野が原でございますと、自分から名

告らないでも、知つてる者は知つて居る。なあ、姉さん、僕が一つお前の名を當てて見ようか。」

「當ててお見やす、それだすがなあ、あなた此處に小犬が居りますよつて、白やなんか言やはつ

ては厭だつせ。」

「警句一番したね、こりや愉快、」

と會心の笑を洩したが、唇を切るが如く、杯を衝と横に引いたり。

「心配するな、ラムネは人の名といつたけれど、出まかせに白とはいはん、謹んで中てよう。」

「そしたら私も、あなたのお名をあてまつせ。」

「面白いな、しかし野郎の名は難しい、難しいといへば女の名だつて一度であてるのは容易でな

い、何うだ、旨くあたつたらお前、僕の女房になるか。」

「え、其の代りにあなたを中てやしたら、旦那はんになつておくれやす。」

「可し、僕の名も亦酒から思ひついて、糟などは不可いよ。」

「滅相な何のまあ。」

「それでは中てよう、」とちつと又お房の顔を覗めたのである。

はッと赧らめて打背け、

「堪忍しておくれやす。」

つくぐくと打守り、

「益々肖て居る。」



「ラムネはんにだすかいな。」と思ひ切つて云つたるやうに、お房は遺瀨なく俯向いた。

「何うだ、お前の名はお房……、」

「は、」

「お房さんといやしないか、」

「……………」

「然うだらう。違つたか。厭なものを無理に女房にしようとは云はないから、中つたら中つたと  
いひ給へ、何うだ。」

「まあ、とうつかり顔を上げ、女は驚いたやうに胸を反して、下についた手に力を入れると、小  
犬は袖の下でクツと鳴いた。

「中つたか。」

「何うして御存じます。」と目を圓くした驚き顔、うつとりとなるばかり、いはむ方なき、艶麗さ。  
愕然とした趣で、思はず猪口にかけた手が震へた。

口の裡で、

「こりや足許が海にならうも知れない。」

十五

「今度は、姉さん、何、お房さんが中てるんだ。さあ、」

お房はつい居て、衣紋を直し、更まつた形になり、

「それでは言ひまつせ、一時待つておくれやす、」と、土間を探ぐると、五ツ六ツ、又三ツ四ツ、  
其處にも二ツ彼處にも一ツ、自然に零れたか、取溜めたか、松球の數ある中から、お房は一ツ  
拾ひ取つて、撮んで耳を寄せて、月ある方に、雪のやうな顔を傾けて、ちつと聞く思入をして無  
言。

「や、」

と叫んだ、けた、ましい客の聲に、お房は振向き、

「何だすいな、」

「そりや何だ、何だね、其は、」

耳のあたりに捧げ持つて、

「これですか。」

「榮螺の殻ぢやあるまいな、」



いふことの餘に唐突であつたのに、客も自分で氣がついたか、  
 「然うだ。山の中の國だつけ」と殆ど無意識に呟くのであつた。

お房は串戯と聞いて取り、

「榮螺ッて貝の事だすか。」

「貝だ、貝だ、相模の海の名物だが、其の松毬を何うする、未だ焚火をするには早からう。」

「此な、犬の子が皆嬉しがつて手玉を取ります因つて、拾うて置いとくのだつせいな。」

「だつて、耳に當てて何か聞くやうな事をするではないか。」

「あのな、此の邊は、森として居ます因つて、夏でも颯々と松の風が吹きますのが、心に染み込んで居るはけに、此な松毬を恠うしてな、」

お房は眞顔で打傾き、

「耳につけておいつとして居ますとな、松風が聞えまつせ。其にな、もし、夜さりなんぞ寂しう  
 てなりません時、一心にな、これを耳にあてて居りますと、亡はりやしたお母さんの聲がして、  
 遠くの方の、百里も千里もある處から、あの、何かいつてくれやはるやうな氣がしまつせいな、」  
 ほろりとして聲を曇らし、

「それやはけ、今な、あなたの、名を聞いて見ませうと思ひまして。」

然も思入つた狀して、頷き、

「然うか、いや。そりや聞えよう。去年海端では榮螺の殻を耳にあてて、浪の音が聞えるといつ  
 た人があつた。成ほど、松毬には風の音が響くだらう。どれ、僕にも一ツ貸し給へ、」と床几を放  
 れて、すり落ちるやうに土間へ片膝。

「あれおめしものがよこれやす、」と帯に挟んだのを、引出して拂ふとて、はらりと開く朝顔染。

「構やせんよ、」と退けようとして、端と端を、心々に、故とならず放しもせず。

娘ははなじろみて月の隔てに袖屏風して左の耳。男は別なるを手探りに露の小笠の草枕、右の  
 耳にあてて目を瞑ると、身動きに酔が出て、潑と全身の血が湧いた。動悸激しく胸を打つて、漂  
 ふ船に乗る思、稲葉の白く風に動くを、打寄する月の浪かと覺えて、あはれ玉の緒もゆるぐかと、  
 心ゆくばかり恍惚する、耳許に娘の聲、松毬の中に響いて、

「新三郎さん、」と確に其の人。

我に返ると、目の前にお房が微笑み、

「あたりましただすやろな。」

「え！」

「新三郎さんといやるお名で、あの松坂さん、屹とだつせいなあ。」



松坂新三郎——客は衝と立上つた。

十六

又挫乎と床几に腰、はッとはすむ息繼に、注置の酒のさめたのを茶碗から雫も残さず。じりじりと膝を向けて、

「新三郎だ、いかにも松坂だが驚いたな。お前何うして知つて居た。不思議にも何も、殆ど言語道斷ぢやないか。」と詰寄らないばかりの劍幕。

お房は澄して、

「知つて居たのではないのです、お約束の通あてたのだつせ。」

「姓名ともに。當る譯がないぢやないか。」

「貴客やかて私の名を丁とあててだつせ。」

理の當然に一言もなく口を噤んだ新三郎は、しばらくして苦笑。

「可い加減に調子を合せたのだらう、眞個の名が、お房さんと云ふのぢやなくつても、其處はお世辭だ、はいといや其までといふものさ。」

「あら、私嘘を……、ほんたうに房だつせ、あなたこそ可い加減なことおつしやるのやないのだ

すか。」

「正銘いつはりなし、本當だから尙驚く。理窟は措いて、大抵女の名は女なりに極つて居るが、男と來た日にや、權兵衛太郎兵衛から藤原の朝臣鎌足まであるんだから、まぐれあたりにも當らうやうは無い筈だ。」と半ば獨言のやうにいつて、とろりとした目で、くるくると四邊を眊し、穩ならぬ面色で、

「まあ、可いや、何でもかまはないから、姉さん本當のことをいつてくれ。一體何だ、僕は今何うして居る。と恚う膝に手を置いて、床几に腰をかけて居るんだらう。」

「ほ、ほ、ほ、」

「申戲ぢやない、笑ひ事處かい、容易ならぬ次第だ。僕は死んでるのか生きてるのか。確に酒を飲んで居ると考へるが、まさか、夢ぢやあるまいな。」

「まあ、あんた、何うしやはつたえ。」

「待て、今お前がものを言つたな、確に。それから、先刻お前の名を當てた、あとで僕の名をすつかりいつたな、事實々々、正に事實だが、こりや何處だ、岩代國若松だらう、福島縣會津郡」

お房は素直に、



「はあ、」

「正に相模の國の杜戸ぢやない、さら〜鳴つてるが、風の音か。」

「もう秋の風だつせ。」

「海ぢやあるまいな、背後は、と捻向いて、葦簾越に差覗き、」

「なるほど、土手が薄原で、うしろの畠は唐蜀か。」と又見直して視めたが、其處に人ありとは心付かず、葉がくれに潜んだのは、母屋にかくれて耳を欵ても、板戸が隔たるので飽足らず、密に忍び出でて身を寄せた。お房が女房さんと呼ぶ女。薄に縫つて露も溢さず、静り返つて居るのである。

「其處でと……、」

考へ、

「此の先に川がある、何といふ。」

「湯川といふのだす。」

「湯川、可し、果して田越の川に不非。」

調子をかへて、

「橋があつたな、」

「涙橋のことだすか。」

「涙橋か、些と氣になるが、しかし、これも湘南の景ではない、奥の御堂も杜戸の明神ではないだらう。果して此處を會津として、これが夢でも現でもないとする、さあ、逾解らない、不思議も亦極まるぞ。」

「何たすえ、相模だの杜戸だのといやはして、あゝ、何たすな、其の先刻のラムネはんの事だすか。」

「全く其のラムネだ、乃至又榮螺の事です。」

新三郎は少しく落着いた様子である。

### 榮螺の殻

#### 十七

「聞給へ、月こそ違ふけれども去年の今日だ。相州葉山の海濱、杜戸の濱といふ處で、丁度此の店と同一やうな葦簾張に休んだ事がある。ラムネも榮螺も其の店にあつたんだ。だがね、其處等のは、休茶屋といふのぢやない、衣類を脱いで潮浴に海に入る、海水浴の先づ支度小屋といった



ものだ。」

白砂の美しい波打際に八九軒、たゞ、葦簾で間を仕切つたのが一列に並んだが、七月も未だはじめつ方、殊に其の年は雨勝で、塵の都を通る、ほどの陽気ではなかつたので、下櫻山、逗子の海、鳴鶴ヶ濱、養神亭、日影の茶屋から葉山をかけて、避暑の客も數ふるばかり。女波男波に扱手を切るのは、別荘方の坊ちやんより、土地の小兒が多い位。況して通がかりに衣類を脱いで、貸手拭に猿股で、さつと一浴の如きは皆無なので、數多い其の葦簾張に、客を呼ぶものの姿もなかつた。

中に一棟、左右から、四ツつ、數へて真中あたりの葦簾の蔭に、夕陽の春く沖を視めて、葉山に月は白いけれども、軒に夕顔の花もなく、黄昏の風情あはれに、女一人、悄然一人で居るのを見て、新三郎は、其の時、近きあたりの知る人の別荘に逗留中、晚餐の小饗しく、猪口を過した酔心地、もてなされに事が足つて、早附木などは忘れて出たので、月の出汐の波の色、此處で一服と思ふ煙草の火も欲しければ、喉も渴いた折であつた。

「直ぐにラムネをいふと、其の娘がかぶりを振つて、これはお止しなさいまし、今まで一杯に西日がさして、此の小桶の水は湯のやうでございました。冷して置きます中のラムネなどは、沸いたりさめたりしたのですからお身體に障りませう。店を出します時、村の衆が貼片がはりだとい

つて祝つてくれましたから、砂地に出して置きますが、賣物ではない、といつて、何の通りがかりのまぐれ客。際物でお鳥目さへ取つて了へば、あとで行倒れになつたつて構はないものを、殊に又盛場の人氣の悪い中で、深切に茶を沸してくる。其もね、砂の上へちか置で、七輪があるばかり。螢火ほど残つた中へ、消炭を拾ひ込んで、腰の折れた團扇は、前に使へと出したあとだから、かけがひの無い蒲鋒小屋、姉さんは浴衣の袖で煽いだではないか。

早く飲ましてくれる氣で、然うやつて氣はあせつても、心は落着いた女と見えて、僕が煙草を飲まうとすると、杉箸の尖の燻つたので、燠を扱んで出したんだが、固より火鉢なんぞ無いのだから、其處でそら先刻から、大層評判になつた其の榮螺だ。」

新三郎は飲込ませるやうに笑を含み、

「ね、又何につかふのか知れないけれど、此處に松毬のあるやうに、其處ぢや榮螺の殼澤山。やがて緑の苔が生えて、紅蟹が棲みさうな、竹の柱の土臺にしたのが、怪しからずゴツ／＼して、恙う昨夕あたりは潮が來てかぶつたかと思ふくらゐ、尖々に露を含んで、涼しくかさなり合つて居たんだね、其の中から一ツ取つて、娘が今の燠を入れて、床几の上へ寄越してくれた。唯恥しさうに見えたつけが、何の極りの悪いことがあるものか。

玉を敷いたやうな美しい白濱を、葦簾越。葉山の月が、音のするやうに眞丸く間近に出た。波



はあつても夕風の空。風は唯、片一方の杜戸明神の眞暗な松からばかり吹いて来るやうな、何ともいはれない心持の好い時だ。榮螺の殻の煙草盆は、人の別荘に客で居て、綺麗に灰ならしをかけた、落雁に紅をつけた體の火入から、密と吸ひつけて、おかはりといふ手附をしつゝ、灰吹の蓋をあけながら、紅革の厚蒲團、結構ぢやあるけれども、眞四角に坐り込んで、えへんなんと、咳を咽喉へ引込ませるとは雲泥の相違。

あゝ、雨露さへ凌げたら、此處で世帯をしても一生は暮される——姉さん、酔つぱらつて云ふのぢやないが、仔細がなければ、僕は養子にでもなる氣になつた。」と満を引くこと如例。

十八

「するとね、土瓶の下を働いて居る女は、房々とある髪を、繕はない櫛巻で、海邊の女だから、お前さんのやうに色は白くなかつたが、襟許もすつきり。些大柄だが、仇氣ない、うまれつきを其ま、野育ちとは見たが、實にしをらしい、引かけ帯がすり下つて、背中の伸びたのもすらくと姿よく、褪せた淺黄の下じめが美しかつた。

はい、お茶が入りました、と茶碗になみ〜と注いでくれたが、いづれ海水浴の連中が、赤裸裸で出入つて、手盛でがぶ〜遣ると見える、先づあの湯屋の上り場といつたやうな店だから、茶

盆に及ばず、砂地へ蹲んだなり手で寄越す容子なんざ、十年連添つた女房ぐらゐ、微塵も色氣がない中に、口ぢやいはれない風情があつた。譬へて言や、紋着羽織で畏つて、床の間の牡丹を拜見するのと、山路に行暮れて、薄と一所に寝るやうなもんだらう。

お手盆で換へて頂く、番茶の其の旨い事。

出花なり、酔覺なり、飲むほどに干すほどにだ。やがて土瓶が軽く成る、澤山御馳走をあがりましたねと、古風な氣取氣のない處が、柔く深切に聞えたので、又今更染々と顔を見ると、眉の凛々しい、鼻筋の通つた、目の涼しい、但臉の肉が落ちて、うるみがあつて冴えないが、下ぶくれで瘦せても居ない、目に立つのは唇の、宛然紅をさしたやうな、活々として居た事で、もし其の色が沈んで居たら、恐らく、髪をおろさない尼法師とも見えたらしい、寂しい女、それだけに尙何となくあはれで、こんな者でも力に成つてやりたい氣がした。

しかし效々しい働振、水をささうとして、腕まくりで柄杓を取つたが、桶に汲込んであるのを、土瓶にうつす時、眞白に澄んだのに、きら〜月がさすから、これは、海邊には珍しい、好ささうな水だ、といふと、亡つた親仁はこればかりが自慢でございました。唯今では餘所のお別荘のお庭の井戸になつて居りますけれども、擔で頂きに参りますと、先に居たものならば、とおつしやつて、汲まして下さいますと、何心なく云つたやうだけれども、聞くものの身に取つちや、い



かにも氣の毒に考へられて、酷く身に染みたもんだから、然うか、といった切、何を思ふといふ事も無しに、黙つて了ふと、女が糞穢がなかつたと見えて、其時だ。

又一ツ榮螺を拾つて、今度は菓子盆にでも使ふ氣か、微塵棒一ツ見當らないが、と思つたが、然うぢやない。

姉さん、先刻、お前が行つたやうに、其の榮螺を耳にあてて、ちつと遠くのを聞くやうに、恍惚して、やゝしばらく……だから、不思議に思つて尋ねたんだね。

然うすると、はじめは浪の音がすると云つた。氣を静めて、何にも餘所の事を氣にかけないで、一心に耳に當て、居ると、底の底の方に、何ともいはれない好い音が響いて、千萬無量の、しかし騒がしくない、寂しい美しい聲が籠つて、龍宮の御殿で、魚がひそく話をして居るのが聞えるツて、本當に確と信じて居るらしい、嬰兒のやうな無邪氣な顔。

無邪氣な心は、濁がないので、まるで、神か佛かと思ふやうな、尊いものだから、唯、あはれな深切な、優しい女と見て居るために、別に、譬へやうのない品のある處が見えて來て、些と行過ぎた考へぢやあるけれども、成程龍宮のひそく話が、榮螺の貝から聞えるも道理。四邊の景色も景色なり、此の月が隠れたら、姿も一所に、海の靄で、消え失る、ものの精ぢやあるまい、かと思つたくらる。

其のくらるなら、先方で承知をさへしてくれたり、せめて擔で汲むといふ、其の水桶をかついでなりと、一生を送る覺悟をして、二度と又例の落雁で煙草を飲むやうな、馬鹿なことをしなけりや可いものを、

新三郎は足踏をして、我と我身をじれつたさう、

「其處が凡夫だ。」と肩を揺つた。

## 十九

「其榮螺を耳に當てた姿と、其の仔細を話した様子のをらしさに、僕は自分を忘れてね、更めて何かいはうとした。何か言はうとしたつて、更まつて些と變だがね、酔つちや居るし、人は居ず、海邊にや、唯其の小屋に二人なんだから、まさか唐突にもいから、名を聞いた。何といふ名だつて其の女の名を聞いたんだ。」

新三郎は自分で當時の事をいふ如く、今も我を忘れて語つたが、急に我身に返つた風情で、目を睜つて、ものを見るやうにして黙つた。

時に其處とも分かず、あたりの草の中に、あはれに床しく、露が結んだ鈴の絲が、葉に擲つて揺ぐかと、微妙な聲が幽に聞えた。



「やあ、松蟲が鳴いて居る。」

お房も我に返つた状で、思あひげに其方を見返り、

「佳い聲で鳴きまつせえなあ、あれ、お聞きやす、遠くでも聞えますやろ、毎晩な、私唯一人して此を聞きましては、泣いたり笑つたりしまつせいな。今夜はあなたが来ておくれやして、おもしろいお話をしてくれやはる因つて、今まで氣も附かずに居ましたの、もつとお酒つけますせいな、遊んでおいでやして、あとを聞しておくれやす。歸りやはると、又蟲の聲ばかりだつせ、寂しうおすけにな。」と、便なげに打見た目に、涙含まぬばかりであつた。

頭を掉つて、

「いや、未だ其の他に松毬があるぢやないか。それ、おつかさんの聲が聞えるといふ。其に上を越したものはないではないか。」と酔つた人のいふとは聞えず、達觀の僧の、識、徳ともに秀でたるが、女人を悟すが如くに云つた。

お房も甘える状にいやくして、仇氣なく、

「否な、何にも思やしませんで。一心におつかさんの事思ふ時は然うだすけれど、さきへな、蟲の聲を聞きまして、あゝ寂しやと思つたら最後だつせ。どないしたつて、矢張蟲の聲はか聞えやせんもの。」

新三郎は、やりちがへて兩の腕で胸を抱いて、

「不可ん、何故然う泣かせるやうな事をいふんだ、女の兒のいふことな、涙ぐむのは、大日本帝國御先祖から御法度だ。」

呵々と高く笑ひ、眦を切つてしばたき、

「しかし道理だ。迷つた事よりほか聞えまい。先刻、お前がするやうに松毬を取つて耳にあてた時は、海と山こそ違ふけれど、相模と岩代と百里を隔て、恚うも肖た事があるものかと思つた所爲か、しばらくは夢を見たやう、酔つてるためもあらうけれど、足許もゆらくして松吹く風も波に聞えた。四邊が眞暗になつて、自分の居まはりばかり月で明う、大な光の輪で包まれた氣がする中に、向うむきの女の其の、淺黄の扱帯の色まで見えて、ぞつとする時、自分の名を呼ばれたので、はつと思ふと、振返つたのはお前の顔だつた。

それにつけても、榮螺の底に、龍宮の聲が聞えるといつた、其の時の人に恥入るわけだ。いかにも心に迷さへ無かつたら、自分がしても貝の中に、波の底の響がしたらうものを、些と外に思つて居た事もあつたもんだから、其の方へ氣を取られて、直に其の葦簾張を出て了つたがね。

僕の耳に響いたのは、龍宮の聲ぢやなくつて、ヴァイオリンといふ西洋の樂の調だ。直傍の、杜戸明神の裏の、月の良い巖の上で、然るお嬢さんが弾いて居た。即ち僕が客に成つ



て居た、別荘の主人の娘にあたる。今度、此國へ見えた、姫様といふのも、場所は離れて居るが、同一相模の海の、鎌倉長谷といふ處の別荘から泊りがけに遊びに来て居た。別荘の主人は、以前、矢張會津の家來であつたんだね。

「さあ、其のヴァイオリンの音に聞き惚れて、ふら／＼と葦簾張を出て了つたために、龍宮の聲は聞かすじまひ。」

二十

「何うだ、姉さん、まあ、お前は何方が好いと思ふか。なまなか其の西洋の樂を奏でる人が、奇代の上手だつただけに、僕、當分、いや長いこと、丁度今月で滿一年。」

「正にヴァイオリンの音に迷つて居た。其がために又と得難い、龍宮の音信を聞かうとも思はなかつたが、あゝ。」

深く歎息して、松坂は床几に掛けたる其まゝ、居すまひを正して打望む。路傍の松黒く、枝が亂れて、鶴ヶ城は霧の中に包まれて見え、空の薄曇に雲が動いて、過去つた幻の路を辿りつ、語る中、水の透通るばかり明瞭だつた四邊のもの色は、朦朧となつたのである。

忍ぶには便可し、薄にさら／＼と氣勢があつたが、蟲の音は處を移さず、思ふに様子を伺ふも

の、身じろぎをしたのであらう。

しばらくして、

「まるで夢を見るやうだ。」と、獨打棄つたやうにいつたが、氣をかへ、

「然ういふわけだ。榮螺もラムネも、これで皆分つたらう。其處でお前さんだが、度々いふやうだけれど、脊恰好、容子といひ、聲といひ、唯些と小造で、年紀がニツばかり若いかと思ふだけ、店だつて又失敬だが、假小屋同然。まあ、こんなに肖たものがあらうかと思つて居た處だつたから、つい名をあてるのに、お房さんかといつた、房といふのは、其時の娘の名だから。」

「まあ。」と息をひくやうにして、下から上へ袂をお手玉、細く忙しく動かしながら、

「本當だすかいな。」

「嘘かも知れんが、當つたとするんだ、それが、お前は又何うして僕の名を當てたらう。」

と直に應じたが伏目になり、帯の横を軽くたいて、

「あのな、松毬に聞いたのだつせ。」

「實際は。」

「然うするとな、お母さんが教へたのだす。」



「ぢや、先刻約束をしたつげが、其の母様に聞いて見たら、何と、お前は女房になれようか。」

「……」

「僕の女房だ、即ち松坂の細君だ。」と、新三郎は陶然として大に酔った、前のめりにふらふらと頭を垂れて、確と両手で膝を壓へる。

「可うございますともね、私もお媒妁をいたしませうね。」

と、朗にいふと、松蟲の鳴く音を留め、薄を分けたのは以前の女。

お房より新三郎の驚き、振向いて、醉眼をとろりと睜ると、葦簾越なり、草の中だが、曇った空に燈明く、目も眉も衣の色も、すらりと鮮麗な立姿。

「呀、清瀧の女房ぢやないか。」

清瀧は樓の名で、東山の温泉宿、松坂の旅館であつた。

「ほ、ほ、大芝居。松坂さん、今夜は妙な處で、此で二度お目にかゝりますね。」

悪権太

清瀧の女房軽く頷いて、あでやかに莞爾し、

「御免なさいよ。」とつツと出る。

途端に磔と身を伏せたは、猪が轉んだやうな、毛むくじやらの荒漢。

但其の身の軽い事、社の路の薄原から一段低い畠のへり、五側ばかり植込の、繁つた唐黍の畑

の中へ、土に生えた奴の兩脚、根こそぎに薙ぎたるばかり、もろに膝を折敷いて、風より高き音

は立てず。足を踏張り、尻を立て、握拳で泥を掴んで、身體にびりびりと筋を張つた、髪赤く蓬

に伸びて、膚に鱗のあるばかり、窪める眼、扁き鼻、唇を剥き反した——口や牡丹を吐かむとす。

腰切の古單衣に、繩の帯、脚絆ばきで、素跣足で、手拭を咽喉にわがねた、年紀二十有七八歳、

獸ならば老人株、人間ならば血氣の壯者。葦を透して葉を通して、あからさまなる葭簾の中、

ちぎれ〜に亂れかゝつた青簾越に覗くが如く、燈の色に露の添ふのも、男女の姿に影のさすの

も、あからさまに、つい間近。

清瀧の女房の、松坂には見せじと忍んだ、後姿も、此の方には指を伸ばして届きさうな處だか

ら、唐蜀黍の軸を小楯に爽に調子高な酔った聲、女房、といふまで聞いて、眉毛の毛蟲打蠢き、

蛇の舌閃いて、目の色の變つた折から、不意に清瀧の女房が、聲をかけて露れたので、見られ



ちやならぬと、土に匍つた。

傳へ聞く其の昔、肥後の御曹子爲朝に、獸の皮をひさいたる山男に似た古今の怪物、人か、あらず、獸か、あらず、惟ふに是、渡天の僧の法衣の袖に宿り來て、我が敷島の、山奇に、水の怪なるあたりへ、撫子ならぬこぼれ種、葎の中に生ひ出でて、あはれ民草の數には洩れず、親なく、妻なく、子なく、家なく、着物もない、が、籍を、岩代國會津郡若松なる野郎構の中に置き、身を摩利支天尊の、御堂の縁の下に置いて、權太郎、渾名を岩越名代の嶮、飯豊山の岩から岩、枝から枝を傳ふに發して、飯豊猿といふ、あぶれもの、禽獸とともに人も知つて、あたりへ寄らぬ獵夫である。

即是、お房を魅入つた色男で、も、んがあと天窓から鹽をつけて嚙るかはりに、やいの、といふ次第であるから、思ふべし。爰に焦慮の心中。

其血湧き、肉動く、殺氣を籠めて、月が空に面を蔽ふと、銀河を斜に一刷毛颯と、末濃に野末に廣くなつた、眞白き雲の其の端から、ひらりと下立つたやうな、美しいものの姿が、同一畑中の、唐蜀黍の繁の外へ。

水髪のつらくと、鬢輕きみだれ銀杏、簪の玉星に蒼く、露草一輪折りかざして、夜目に夕顔のほの見ゆる、玉の顔、雪の膚、羅を透く鶴の色、すらりと瘦せて、風采描ける天女に肖たり。

白絹の襟に朱鷺色の無地の長襦袢、秋の曙、茜淡く眠れる如き薄鼠の絹に、白抜きの秋の七草、絲薄の穂は柔く、ふつくりとある胸をつ、んで、一本帯の垣根に亂れ、裳は婀娜たる女郎花、松蟲の影を宿し、桔梗の花袖に開いて、月の移るかと露に濡れたり。

片手に輝く錦の小包。上前の片褌を、密と片手で取りながら、湯川の岸から素直に、畦に通つた一筋道、枝豆蒼く植ゑたる中を、社に志す人か、薄に蟲を聞く人か、葦簾越の灯に路を尋ねて寄る人か、静々と近いたが、これも松坂の高聲に、不圖歩を留めて、やがて些と足を早うした。姿を見て、急いで、つか／＼と寄らうとする、目の前に大蝦蟇の、四つに這つた權太の形に、軽く退いて、敢て騒がず、右手の扇を颯と開くと、白地に墨繪の雁がねなり、半面に霧をかけて、見て、見直しに亘んだのは、秋山衣子、新三郎がお房に語つた、ヴァイオリンの名手といふのは、此の美人の事である。

怨恨

「私は何でございますよ、今日は嬰兒になりましてね、お城の姫様が十八で、はじめての御入國



だといつて、大層賑な催があると聞きましたもんですから、町へ見物に出て参りましたのでございませうが、松坂さん、人込の中でも何でも潜つて、見世ものの赤い看板だつて見る覺悟だつたものですからね、行きがけに此のお房さん許へ、蝙蝠傘なんか預けましてね、大層な意氣込で出掛けましたけれど、まさか小兒衆ばかり立つて居る、辻の手品も覗いては居られませんか、あの大名古屋の龜遊軒の射割を貴方。

人立の中で見物をして、貴方のお手際を拜見したんでございます。

それから、貴方は、ぶん／＼何處かへ出て行らつしやるから、お後へつきまして、丁度可いお連だとは存じましたけれど、未だ昨今でございましてね、御縁があつてお宿を申しつかりましたばかり、そんなにお馴染でもございせんのに、お呼かけ申すも如何かと在りましたし、餘り露骨で失禮ではございませうけれど、ひよつとかして、旅の御鬱散に、廓へでもお出で遊ばすのぢやないか、もし然うだと御一所は御迷惑と存じましてね。ですが、私も別に何處へといつて當はありませう、最う其方此方、お房さんの許まで歸らうかと思ひまして、道順でございませうもんですから、うか／＼お跟き申して参ります中に、貴方は傍見も遊ばさないで、段々寂しい方へお運びで、到頭お城の中へお入り遊ばすのが、廣い大手先で、遠くから見えるぢやありませんか。ぢや、何、おともをしてお連になつても大事なと思つて、あとから参りますと、まあ纜の間

でございしましたのに、あの可憐い草の生え。夜分の事なり、お姿を見はぐりまして、一番高い處の、鹽藏の穴のふちで、姫様と貴客と三人、妙な工合で、睨みツこで、又ばら／＼にお別れ申しました、まあ、何だつてまた、夜分、あんな處へおいでなすつたのでございませう。清瀧の女房は唯一ツある狭い床几に、新三郎と膝を組違へに、靜に煙草を燻らしながら、世馴れたものの言ひやうである。

最初媒妁をと唐突に云はれたのにこそ、酔つた上にも返答に支へたが、斯の間に對しては、新三郎は敢て猶豫ふには當らなかつた。

「いや、鶴の城の一件ですか、ありや驚いたです。實に弱つたのなんのツて、全く意外だつた。しかし一人で遣つて来たのは、女房さん、貴女は豪い。」

「はあ、私は土地の者で、よく様子を知つて居りますし、其に此の國ぢや、つい近ごろ、あんなに澤山忠義な方が、石になるまで、無念に凝つて討死をなすつた場所ですから、落ちて居ます瓦のかけらまでも、魂があるやうに言つておいでなさいませうけれど、私は別にそんなに尊いとも恐いとも思ひませう。」

「益々豪い。私なんざ土地ッ兒でもない癖に、非常に城の光景には恐入つた、唯一言もなく降参をして了解つたです。失望落膽、恐らく男兒兜を脱いで軍門に降つたくらる、腑甲斐ない、腰の抜



けた、ぐうたらな、馬鹿々々しいことはないですな。で盛に飲みます、けれども敢て酔はんです。」

「お房さん、大分召上つたの。」

「四本ばかりですえ。」

「ざつと七合だね、それにしちや。何ですな、貴客、もつとお發しなさいまし。お房さん、お酌をおしな。何だつてあんなお城なんぞに降参をなすつたの。」

「あんな城！」

新三郎目を敬て、

「あんな城？ こりや怪しからん、僕をして降参せしめたほどの城を、何と、あんなとは怪しからん。」

「おや、大層御最員を遊ばしますね。それぢや貴方は降参でなくつて、お城の方へ裏切をなさいましたか。それでは此のお房さんは、お嫁に上げられはしませんよ。」

二十三

「はてな、するとお前さん方は、城に怨でもある人かね。」

「松坂さん、怨のあるのは私で、お房さんは、お城に憎まれて居る方です、どつちも禁物なんで

ございます。」

不審な一言、

「何うしてですか。」

「両親とも殺されましたのでございすもの。」

「殺された？」

「はい、あの御維新の時、官軍が瀧澤峠を越しまして、皆様で籠城を遊ばす時でございす。私の両親とも、水の出花と申したやうな、若い同士で、然も貴方、私がお腹に居りまして、母が臨月でございしましたが、敵が亂入と申しますので、拔身を提げながら父が母の手を引きまして、一先づ北邊へ落さうと出掛けます途中、ばらばらお城へ駆込みます、藩の方に合ひますと、下郎何處へ行くと聲をかけたものがあつたさうです。わけを話して、しばらくお見免を願ひたいと、父が申しますのを、いや此の會津藩には、敵を目の前に置いて、夫婦で道行をするものは無い筈だ、卑怯！ といひさま貴方、拔討に斬つたさうでございす。母が倒れましたのを、毎朝八百ものを賣りに参ります、野郎がまへの百姓が、此の騒ぎに荷を打棄つて負つて逃げてくれまして。私を其處で生みますと、それなり母はなくなりましたさうでございす、怨ぢやありませんか。足輕だつたと申します、二人扶持や三人扶持で、生命まで差上げて可いものですか。何ぞ



「あゝ、樓上紅粧尙思還、尤だ、死ねない！」  
と幾度も頷いたのである。

新三郎は目を睜つて、  
「あゝ、樓上紅粧尙思還、尤だ、死ねない！」  
と幾度も頷いたのである。

といふと忠義々々つて、鼠が聲がはりをしやしますまいし、お房さんの母様は又、親御や姉さんが自殺をなすつた中に、死ぬのは厭だつて、泣いておいでなすつたもんだから、其の姉さんの姑にあたる、朝ツから忠義々々といひつゝけて、武士の道の、梓弓だのと、歌なんぞ遣りました變な婆がね、おのれ、武士の道をわきまへぬか、介錯をしてやらうと、歌なんぞ遣りました變の方の長州のお士が一人飛込んで參つて、是非は知らず、若い娘が、取亂してアレ〜いふのを、三途河の婆のやうな切髪が、長刀で追つかけるもんですから、突然押へつけると、ちえツ！残念ですツさ。」

清瀧の女房は物語りながら、淺笑したが、薄く蒼く唇から氣を吐いたは、含んだ煙草の殘の煙。

「何うでせう。ちえツ残念、子息の一生の心得違ひ、下賤の女を妻にしたれば、大事の場合に歌を詠めず、自殺もならず、介錯に隙取つて、死後れ、汚らはしや、敵のために手籠になるか、と大粒な涙を流したもんですから、其のお士が貴方ね。」

そんな中にも苦笑をして、血迷うたか、婆、手前幾歳になる、皺だらけの面を見ろ、いや、手籠にされるの、辱を蒙るのと、咽喉を突いたり、舌を嚙んだり、第一己達がついて居る、官軍を馬鹿にした譯だ。時々兵糧にやさしつかへても、同一日本人ぢやないか、誰も女にかつゝぢや居

ない。可哀さうに、といった傍には、すなほな髪の長いのを、疊に敷いて若い奥さんが、血塗になつて居ました。それは何です、此のね、お房さんの母さんの姉さんで、其の姉さんが片附いた後に、實家が死絶えたものですから、姉さんの縁附いたさきへ、世話になつて居たんださうですが、姑は大變な嫉妬やきで苛め抜いたツて話ですよ。

ですから、其時なんども、武士の妻はこんな時だ。さあ、死ね、やれ死ね、ツて懐劍を出して押つけて、え、腑甲斐ない、腰の抜けた、卑怯ぢや、死にやうを知らぬな、下司め、私が教へてやらうと、また婆さんの装束が大袈裟でさ。死におくれたのが残念なくらるなら、さつさと舌でも噛めば可いのに、白無垢の三枚襲かなんかで、嫁の膝を片膝でおさへつけ、たぶさを摺んで、仰向けにして、自分も抜いた九寸五分を、咽喉佛の處へ密とあてて、恚うせい、恚うせいッちや、五分、一寸づゝ、ぐいゝ、とせりあげて、目を白黒させながら、其の摺んだたぶさを摺るんですツさ。」



「お房さんのお母さんが、目の前に姉が修羅道の責害に逢ふのを見て、おどろしなから、留めようとして傍へ寄ると、其の懐剣を逆手に取つて、婆め、切尖を伸ばすから、寄るにや寄られず、縫らうとすりや、足を上げて、何かメ直した白羽二重の蹴出しなんぞ踏開いて、威丈高になつて、さあ〜云つちや、」

女房はぐツと仰向き、眞白な咽喉へきらりと、煙管の吸口が細かつた。

「自分で仕方をしちや、せり立てるもんですから、若い姉さんは、もう眞蒼になつて、目が眩んで、突伏した拍子に、婆の手が鬚を壓ると、雪の様な襟脚から、だら〜と染んで、下の畳がどつと鮮血になつたさうです。」

「おかみはん、私もう。」

「お房さん恐かないよ。……御覽なさい、ぢや、直ぐあとで婆が自害をするかと思ふと、何うして、今度はお房さんのお母さんに、また何ですわ、忠義が何とかで、お國のためが何うとか、何が何とかから自害をしろつて、通げて歩行くのを長刀で追つかけた一件でせう。それから何だつたさうですよ、其の長州のお士が、姑婆を蹴倒して置いて、女中、さあ一所に

來な、何處か近在に知合があつたら、其處まで送つて行つてやらう、帯なんぞ何うでも可い、髪も其まゝで、疾く、と出しなに鴨居にかけておいた槍を取つて連立つて、送り届けて下すつたのが矢張此さきの野郎がまへのお寺です。

後に其のお侍は、左の手に瘡を負ひまして、其時、官軍で假病院に使つて居りました、同一お寺へ見えましたもんですから、お房さんのお母さんには、早く申すと命の親。

其處でこそ、命がけで看病をしてあげました。不思議な縁で、夫婦になつて、此のお娘が出來たんでございませうがね。

婆さんは氣が違つて、戦争の濟んだあとを、方々、取亂して駈け歩行いちや、忠義々々と口癖のやうに饒舌り廻つて、お城を拜んで大道で土下座をしたり、棒ちぎれを持つて橋の上で水車のやうに振廻す。其の中にや嫁姉妹の事を、いや、淫婦だの、毒婦だの、敵の間諜だの、裏切だの、と悪口雑言。

後で聞いて私なぞが考へますれば、若奥さんの思だらうと存じますけれど、人氣の立つた時分ですら、武家方、町人、百姓まで、氣が違ふほど忠義な婆さん、活きながら武士の道の精靈だなんて大騒ぎ。

此娘の父上でございます……ね、長州のお侍も、もう身體が不自由なり、長々の浪人で、國に



は妻子もない身だからと、若松で世帯をお持ちなすつて、御夫婦で、其お狂人どのをねえ、まあ謂はば、姉さんの敵ぢやありませんか、それでも深切に引取つて、お世話をなすつたんださうですよ。

然うすると、例の大道へ出て、人立の中で、お城の方へ土下座をしたり、長刀の一手を御覽に入れたいのだから耐りません、跣足で駆け出して仕やうがないものですから、少し窮屈な思をさせる、じれ込んで、梁へぶら下つたぢやありませんか。

やあ、淫婦の、毒婦の、裏切の、間諜の、非望人夫婦して、忠義の精靈にぶらんこ往生を爲せたくわつて、土下座と水車にヤンヤ〜囃し立てた連中が、まあ何うでせう、人でなし、畜生とまで言觸して、飯盛山、鶴の城の、お國の恥だなんて云ふでせう。

ぢや、其の人達が、それほどに大事がる婆さんなら、自分が世話をすりや可いけれど、暴れ廻る人間は銅像にも出来ませんし、いくら忠義の精靈だつて尿糞を垂れ散らして汚いではありませんか。水一杯飲ませようともしない癖に、口に税は立たぬと思つて、可い加減にするが可いんです。了局にや尾に鰭が添つたもんですから、段々に評判が傳はつて、未だ此の娘のお父さんが活きておいでの時分から、附合ふ者もなく、それこそ口を利くものはなかつたのでございますが――お房さん、今年で七年になりますね。」

二十五

「六年あとに父上さんが亡りましてから、男親がないと、さあ、馬鹿にして、それまでは、唯向うから口を利かず、外で逢や遠くで指をする、傍へ行きや、そつぱうを向いて了ぶぐらるだつたのが、貴客、面と向つて、汚れるの何のと、云ふやうになりました。

若い方や、學校へ出て、これから軍人にでも成らう人などは、尙の事。お國のために命を捧げようといふ者があんな不屈の奴等、傍へでも寄つたら、そこから血が腐るなんて酷い事をいつて、其の癖何なんでございますよ、今時の人で、委しい様子は知らず、唯汚れるとだけ聞いたのなごは、悪い病の筋でもあるか、血統違ひの者でもあるやうに思つて居るのも澤山ございます。御覽なさい、先刻も先刻です、店の前をひやかして、入ると汚れるからつて、向の松の樹の下まで、塗盆で何うでせう、お茶を持出させて置いて、たゝき落して茶碗を割つたぢやありませんか、此の娘ばかりぢやない、可哀相に犬の兒までが、うろ〜してさ、可憎しいツたらないんですよ。」

新三郎は深く思入つた風情で聞く。お房は顔に犇と袖。女房は語を續け、



「あの人達に謂はせたら、私も矢張非望人の子でございます。松坂さん、ですから、お城に怨が有るぢやありませんか、お房さんはお城に憎まれて居るのぢやありませんか、ねえ。」

新三郎は胸に疊んで聞いて居たのを、一時に、

「いや、解つた、解りましたとも。無法極まる、凡て無理の絶頂といふお言だが、無理はない。如何も僕には解つたです。不埒至極だ、そんなもんです。鶴の城に絶えない燐火は、忠魂の光だとばかり思ふと大に違ふ、露となつても消え失せない、怨の涙もあるんですな。お説の通り、兩便や食物の厄介がないと思つて、無暗に忠義倒しにして、人の命を、勝手に自分達の廣告にするんです、己が身の飾にするんです。竈を拜むものは、内の女房で、招猫を祭るものは賣女の徒だ。嗚呼忠臣、楠子墓、忠義は黙つて行ふべし、不斷饒舌るべきものではない、既に飯盛山の少年隊の如きも然うだ。えらいえらいと譽め倒しにして、何爲其の親に別れ、姉に別れた、心の中を汲でやらないだらう。もし一人でも、討死をするのを拒んだものがあつたら、人は必ず、卑怯と言ひ、未練と唱へ、烈しいのは逆賊といはう。何の、會津が亡びたつて、土も水も減るのぢやなし、日本の國が小さくもなるのぢやない、唯、若い同士の初産の兒は、死んだあとでは見られぬではないか、なあ、おかみさん。國に殉ぜし自殺なんかさせられた日にや、戀しい良人の前途を見届けることは出来ないぢやないか、なあ、おかみさん。」

いか。女房を連れて遁げたのも無理はない。自殺を拒んだのも道理だ。しかし、唯一途に忠義と心かはやつて、君のため國のために、夢中で討死をした人達は、なほ氣の毒だ。何爲なら、これは、戀も欲も知らない嬰兒の、呼吸の根を留めたやうなもんだから。」

二十六

新三郎は悵然として、

「いかにも城は怨むべしだ、僕も大に怨む、馬鹿に癩に障る、無法に憎い。」  
清瀧の女房大に勇み、

「それぢや矢張、貴方も私どもの仲間ですね。まあ、嬉しいねえ、何うぞね、私も蔭で聞きましたら、貴方まるツ切御酒の上とも思はれませんが、あの此の娘を見て遣つて下さいな。」  
「もしな、おかみはん、」と慌しく遮つた。

「可いよ、人から退け物にされて、まあ、こんな可哀さうな娘はありませんよ。否、世間は廣し、會津ばかりに日は照らないとは存じて居りますが、餘所へ出すのは口惜しい、矢張此の土地で、ソレ見たかと、立派なお婿さんを持たして遣りたいのでございます。此の娘も、お母さんの亡つたあとを、直ぐ野にするのは可厭だといつて、我慢して居りますし、



私も悔しうございますから、誰も足踏をしないことは承知の上で、故と、こんな人寄せの茶店を出さして置くんですよ。」

新三郎横手を打ち、

「其處だ、其處ですな、人生意氣に感ず。おかみさん、僕は、僕は今鶴ヶ城を怨むべしと云つたですな、けれども、僕をして、當時此の處にあらしめば、譬へ一合三人扶持を頂かずと雖も、敵の片足も城の土は踏ませたくない。命を擲つて戦ひます、即意氣だ。」

今お前さんが、人の襟許に附かないで、此の、人の嫌ふ娘を、子の如く世話をするのが意氣で、此の娘が又、母のあとを去らぬといふのも意氣で、故と茶店をさせるも意氣だ。お前さんが、もし其時、今の年紀で、而して一國の城が落ちる場合に出會したら、恐らく、一番に討死をする人なり、自殺もする人だ。乃ち其の人の口から城を怨みだといふから、敢て咎めない、僕はいかにも道理だといふ。

而して、僕も大に怨むと言つた。言つたが、僕の此の名城を怨むのは、お前さんの怨み方と大に違ふ、違つて然も愚なるものだ。

お前さんは、意氣で怨む、眞實で怨む、情で怨む、間違つては居るけれども、人を動かす、一婦怒れば三年早す……、壯で可い。思切つて怨め、七生までも怨め、勇士も敢て潔とする。

僕の怨方と來た日にや、意氣地なしの骨頂、のろまの素天邊、愚癡で怨む、卑怯で怨む、女々しく怨む、お話になつたもんぢやない。三尺の童子も尙恥辱とする次第なんだ。

一體僕は、此の會津に何をしに來たと思ひます、偏に鶴ヶ城を見ようために來たのだね、又、何のために、此の城趾を見るのかと云ふに、

松坂新三郎、予は青年の詩人也。

と酔に乗じて言はうとしたが、心付いて、口を噤んだ。

「先づ畫師ならば、繪にする處、城の景色を描く處、僕のは商賣……といふのも變だが、畫師ぢやないのだ。齊く其の文字で城を寫すんで、歌にしてこれを謡ふんです——これを謡ふんです、は、は、は、は、は、は、」

擲つ如く高く笑ひ、

「藝數のない門附の言種のやうだが、是を謡ふんです。其の事を、御承知でもあらう、會津の門閥家の、秋山といふ、退役の陸軍少將に頼まれて、わざ／＼東京から出向いたのだね。何故といふと、藩侯奥平伯爵家の令嬢、そら今度、此地に見えた、先刻城の中で、お前さんと三人出會した、那の竹子姫といふのが、此の暮に、矢張陸軍の現職に居る、然る侯爵の少佐の許へ縁組をするに就いて、其の式場で、持參の土産、舊領地、鶴ヶ城の歌を唄つて、これを秋山の娘が、ヴァ



イオリン——西洋の樂に合せて、彈かうといふのだ。

其處で、婿方から來た結納の中に、其の方の又舊藩の風景を、今東京で、飛ぶ鳥を落す、名高い畫師に描かした、一雙の屏風を贈つたから、此方も確乎頼むよと、秋山の爺さんが、念を推して寄越したんです。

外國との戦争も、算盤で出来る今時分。維新の節は奥羽の中堅、蒲生氏郷以來世に聞えちや居るけれど、何のザジズゼゾの國の城一ツ、と若氣のいたり。いや、こんな奴は年を取つたつて、お若輩さ」と横ざまに額の汗を拭ひ、

「其處で保養旁、東山の、おかみさんの許へ逗留をして、暢氣に寝轉んで居ると、一足後れて來た竹姫の同勢が、町方へ繰込んで、秋山の舊の邸へ御輿が据る。わっしよい〜とお祭禮騒ぎ、公會堂では其の秋山の娘の音樂の會がはじまる。火花が晝間ツからボン〜〜飴へ響くから、こりや午睡をしても居られまいと、其處で出掛けた。

道草に、龜遊軒といふのかね、あの射割が残らず命中といふので、自分ながら、勇氣凛々。城に差懸ると日が暮れたね、だが良い月夜だつたでせう。

月も良し、時も良し、さあ來い。矢でも鐵砲でも持つて來い。自分が此處に來たからには、薄も唯の薄にあらず、瓦も唯の瓦ぢやない、苔蒸す石垣にも句を刻んで、末世に傳はるものにしよ

うと。

我身ながらも頼母しかつた。

### 古城

#### 二十七

時に氣清く、月涼しく、松の梢に吹く風も、颯と我が袖に音信るれば、直に微妙の調を起し、葉末に繁き夜の露も、分け行く扇にはら〜と散れば、忽ち五彩の球と成り、葎の下に埋もれた瓦も、一度我眼に映すれば金鉞形の兜である。萩の草摺、薄の旗、満天の星、燦として、鎬を削るばかりの風情、古城の詩、呵して一氣にして成るべき也と、新三郎も意氣天を衝いて昂然として、あはれ此の城、掌に在り。開けば章となり、閉づれば句となり、唱ふれば韻、謳へば律、袖と草と風と月と劍と露と、鏘々として相觸れて、其の響皆金玉と、獨自ら許したのは、唯纒に、大手の趾なる、崩れた石垣の間を潛つて、左に外濠の一方をのみ見た時の感であつた。

「眞先に驚いたのは急に眞暗になつた事だ。大手先から遠く見た處では、唯姿の好い松が二三本、低い石垣の繞つたのなんぞ、いかにもお手輕な。悪くすると、月夜に見る大川端の何處のか、妾



宅の跡ぐらゐに見えたのが、何うだらう。急に然う暗くなつたもんだから、雲でも出たかと空を見ると、繁つた枝の裏に月は鏡のやうにかゝつて、其で光を透さないほどな森ぢやないか。

右にも左にも前にも後にも、蟲々と、五抱十抱の大木、何の事はない見上げるやうな、黒草絨の勇士豪傑に取巻れた氣がして、大に膽を挫かれたね。

木の香が身に染むと、草は深し、露が骨まで透つて、寒くなつて、急いで、潛り抜けると、直にまた明くなつた。

城の外で見たのとは、松の繁で漉しただけに、月の色も變つて凄い。

振返ると、森は又尋常の樹立になつて、森慘として、其の下を越した時は、幹と幹で十重二十重に取圍んだ下闇の濃がさ、凡十町と思つたのが、別に然までもなく、はなれぬに、ばらばら立つて居るばかり。

月の影も根まで射して、細いが、下には葎の中を、踏分けた路もある。而して寂して、今來た邊で蟲は靜に鳴いてるな。木精でもあるか、それとも、梢に五位驚の巢でも造つた下を、運悪く通つて、怯かされたのであらうと思つた。

それから森を出ると、廣場だつたね。夏草もすつと短く、内證か知らん、處々に、瓜だの、茄子だのが作つてある。歩行くと尖つた角のある石、瓦の缺などが、蔓つた蔓草の中につつし

て、水溜が方々にあつて、些とも人の歩行いた跡がない、さあ、氣になるのは空井戸だ。

やさしくいつても、籠城の時分、官軍から打込んだ、大砲の彈丸が、黒煙を車でまはすやうな形になつて、轟と落込んだあとだけでさへ、二三丈窪んだといふのだから、容易いわけのもではないのだ。何處に、何十尋といふ深いのが、草に埋れて居ようも知れない、と思ふと、蔓が爪尖にかゝるにも足が竦んで、うっかりは進めぬ。其も見通しなら可いけれど、右からも左からも、可恐しい牙を喰違へたやうに、大石を組合せた、石垣が突出して居て、折曲る度に、からりと、其處らの様子が異つて、こはれぬの堂があるかと思ふと、根こそぎに樹の倒れた處がある。明くなるかと思ふと、暗くなる、吹く風も同一冷さぢやないやうな、それでも身體は汗になつた。例の埋井戸、抜穴、甕の類が可恐しいのだから、足にじり、力を入れて、まさか這ふといふわけには行かず、成るがたけ、手に觸るものさへあれば、枝なり、石なり、力にして、縋り縋り一廓を一里と積つて、ものの五六里も足を引摺つた。確、七ツめを入つた角だと思ふ。何心なく前へ出ようとして、フト土の色の變つたのに心付いて、密と見ると、凹になつて、どんよりして、草の中に水があるやうだつたから、根強い薄につかまつて、伸上るやうにして覗いて見たんだ。



新三郎は一息つき、

「今思ひ出しても悚然とする、而して顔を前へ出して、覗くやうにして、見れば見るほど、其の水の色はやうなのが、唯一個所窪んだだけではない、段々向へ擴がつて、然も愈下へ低くなるやうだから、これはと思つて礫を拾つた。

密と向へのせるやうにして、抛ると、つぶと沈んだやうだつたが、しばらくして、ズンと響いて、銜を返して、どぶん、大洪水！」

ハツと思ふと、思はず、膝ががっくりとなつた。蹠と退いて、大盤石を眞平面、壘を合せたやうな石垣の石の、苔の滑なるにひつたりと背を凭せたのであつた。

來る時は、ひたすら路の心づかひにのみ、氣を取られて、一の廓、二の廓、唯假初に爪先上りとばかり覺えたが、思はざりき、疾、濠の深き事、足許に無慮、一千尺。

瞳を凝せば、倒に望遠鏡面の海の月を、夜の山の頂から瞰下すが如くである。路は盡きたかと茫然としてイむと、石垣に添うて一條、八重葎の根を幽に、恰も蠶の靡いたやうなのが、蜒りながら、長く高く通じて居た。

人の通ふと見定めて、心強く、警へば、主の棲んで色の暗碧なる、可恐しき淵を遠かる思ひして、汗ばみながらすたくと上る。徑は一曲り、二曲り、三曲り、四曲り、天に黄金を鏤めたる、

星の中なる七曜星、宛然行く人の胸を繞つて、糸もて手足を操る如く、ぐるりと土堤を七曲り。一點の北斗鎮座の處、其處が丁度行留で、四邊は板の如き野となつた。

時に、山あり、俄然として目前に近く、天の一方を塞いで顯れ、水あり、油然と湧いて、湖の如く、渺として碧を湛へ、森あり、雲の如く生じて、暗夜に異らす三方を遮り終りぬ。

惟ふに人の爰に來るとともに、其の濠來り、其の森出で、山迫り、星近づいて、天に神將、樹に怪禽、土には阿修羅、水には龍王、劍を抜き、矢を番へ、牙を鳴し、鱗を立てて、犇々と鎧ひ固めた、實に、令百由旬内無諸哀艱の靈地や是。

さては本丸のあとかと思ふ。心一たび轉すれば、奇なるかな、天の川靜に流れて、山の姿、枝の振、水には鴛鴦の眠ると見るまで、松に四疊半の響あり、樹立の外には遠花火、夜商人の聲がして、池の面、月の前、水淺黄の空を流れて、すらくと螢が一ツ。

其の光斜に上へ糸を曳いて消えた處に、一座、見上ぐるばかりの臺が見える。新三郎は其處こそ、此の城の絶頂と思つたので、いでくと心を勵まし、北斗の星に面を向け、衝と進んで、手探りに草を撫でると、石で疊んだ段が知れた。

五段六段、段を攀づるに従つて眞直になつて、やがて胸を衝いて身の反るばかりに急だから、兎角に及ばず、兩手を緊乎と草に縋ると、腕を卷いたは葛や否や、裏葉颯と白く亂れて、露のば



らばらと降る中を、空さまに燦と輝いて、眞蒼に飛んで亂る、螢、幾百といふ數を知らず。途端に危く、眞倒に、手を放して落ちようとしたが、辛うじて身を支へて、新三郎は生れて以來、はじめて不知火の海の底を潜るが如く、雲の懸橋を渡るが如く、青龍の背に乗るかと思えて、半ば夢心地に身を攀ちて、纜に足を踏固めると、冷たい火の粉の降るやうだった、螢は一ツ消え、二ツ消えて、續いて一團に倒に下へ落して眞暗な中へ、颯と入ると、穴の半が明く見えたが、驚破地軸を貫いて井戸ありと見る／＼内、上から一なだれに蔓つた同一葛の葉の、葉うら、葉うら、葉うらに隠れ、葉うらに隠れて、纜に三ツ四ツ消えもやらで、其處ぞ底深しと知るべをなすのみ。

二十九

新三郎は城の主の、我を捕らむための奔かと戦いたか、非ず。俗にいふ、猪苗代の湖の畔、湊村戸の口に通ずる抜穴か、非ず。これ蓋し三百年來鹽を貯へた穴藏で、籠城の折から其の底を穿つて取出したが、水晶の如くに凝結したのを鶴の脚で突砕いて、辛うじて使用したと傳ふるのである。

此の穴のある處、天守の趾で、城中の絶頂であるから、一望、曠豁、森颯と退き、山衝と展き、

濠は目の下にかくれて、新三郎は一人、雲の中、天守の上に、刻める石像に似て突立つた。大手から望み見て、土塀六尺、屏風に過ぎず、躍らば越えなんとはいへる者、正に此處に於て可慚死矣。

山續き、峰連り、頂聳えて、近く層なり、遠く望み、城の周圍凡五十里、天然の城壁たゞに二重ならず、三重ならず、金星あり、盤梯の峰は其處か。水星あり、猪苗代の湖は彼處か、近く越後の飯豊山、遙に日光口、宇都谷峠、見果てぬ／＼の雲形も城の模様にも異らず。

「ねえ、おかみさん、今夜これで二度曇つた。丁度先刻、穴藏の縁で、お前さんに遇つた時も、白い旗のやうな雲が、銀河と二條ならんで、一條づつと開いて、茫乎月を隠して居たらう。

もう氣が遠くなつたやうに、餘り大きな城の景色に、見負けた僕には、晝だか夜だか解らなかつた。

唯其、熊ヶ谷をはなれるとすぐに蕨、奥州の入口からずしりと大きな重いもの坐つたやうな、其ばかりか、梟は鳴く、朽木は光る、見晴の田圃にも、那處此處、灯か、それとも鬼火か、血か骨かと思ふと、又野にも山にも、敵の旗が群つて居るやうな氣持がする。」

其處に立つは我ならず、正に一個史中の人傑、結束して此處に上つて、山野を壓した敵に望み、



白旗を振れば晝となり、黒旗を動せば夜が来るやうに思ふと同時に、  
迎もいかん、とても僕のやうな者が、此の城を文字にうつして、ヴァイオリンの音に合せるな  
どとは思ひも寄らん。謡つて人に聞せる處が、助けてくれを呼んだつて、聞えやしまいと失望し  
た。

いかに、自分を知らねばつて、ぬツと押し入つて、然も夜、天守まで登り詰めた、酒亞々々さ  
が可恐しい、と恐入つて氣可愧しく、穴へ入りたいやうな氣がして、しばらくあの鹽藏のふちに、  
腕組をして俯向いて居た。

串戯ぢやない、全く、其の、弱い螢の光にも引入られさうになつて成らないから、待て、こ  
んな意氣地なしは死ぬも可いが、

新三郎は唇を噛んでいつた。

「忠臣義士が討死のあとだ。臆病ものが交つちや、嘸迷惑なことだらう、と、やう／＼顔を上げ  
て、見ると何うです。」

我が影ならぬ女の姿、朦朧として二ツの幻、雲に漂へる趣あり。

思はず、衝と眞直に立つと、一人は左へ、一人は右へ、今一人は其の右へ、おされ／＼にぐる  
ぐると、巴の如く穴藏のふちを、一まはりづゝ、正に二度、いづれも顔の色眞蒼で。

三人、皆石になつて立つた、一呼吸で、ばた／＼と齊く倒れようとした時、凜として清しい聲  
で、

（此處へ来たは誰だえ。）といつた、（此處へ来たのは誰だえ。）といつた、凜とした清しい聲で、此  
家へ来たのは誰だえ。）といつた。いつたのは竹姫であつた。

二人はハツといつて土に手をついた。いづれも魔所だと知つて居たから、互に臆氣に顔を見な  
がら、不思議の邂逅に言は交さず、無言のまゝ、物別れに、前後して城を辭した。中に就いて最も  
餘裕のあつたのは竹姫で、こゝに坐して鬼神にも齋眉かれ給ふべき、女性であるから。

三十

「言語道斷、女の子に叱られて、ハツといふやうな野郎が、これ、豆腐だつて、旨く切れよう道  
理がない、沉やだね。」

何あとで考へると件の姫公も、可恐しい紛れにあんな事をいつたのだらうけれど、何うしたの  
か、あの時は、何故此處へ来た、と一言いはれて、實際思はず天窓が下つた。

其がといふと、今いつたやうに、兜……ぢやない、此の麥藁の安帽子を、向うへ投げて降参し  
て、酷く打てて居たもんだから、はッ、はッてんだ、三太夫、」



自ら嘲けるが如くに、

「頼に障るぢやありませんか、僕、我知らず土下座をしたね。」

姫公が又驚かしやあがつて、全く其の時は、僕を叱咤すべく、天守のあとへ天降つた、女神のやうに見えたんです。

名代のお轉婆で、人さへ留めなきや馬に乗つて、猪狩にも出かねないんだから、大方、人の寄附かない城へ、つか／＼入つて来たんだらう。

だつて豈夫、其の人だとは思はなかつた。勿論顔は見た、顔は確に姫公の顔と見た。そりやいつも一所に饒舌つたり、秋山の娘と一所に、三人で、氣障だね、江戸の市中を小可愧くもなく、馬車に乗つて歩行いた事なんぞあるんだから。第一、そんな心がけたから、城を見て恐入るのだ。ね、此處だ、聞給へ、先刻、お房さんに話したのを、お前さんも聞いたでせう。そら、榮螺の

殻の一件よ。

青天井も同様な、濱の葦簾張に世帯を持つて、女房のくれる貝殻から、龍宮のひそ／＼話を聞くことが出来るやうなら、何の會津の小城一ツ、手に唾して取るべしだ、驚くことは些ともない。

古城の歌我に於て何かあらんと、新三郎は慨然として、

「然るに、其をです。其の榮螺の殻は打棄つて、杜戸明神の巖端で、別荘の令嬢が彈するヴァイオリンの音に駆けつけて、いやはや、同一巖に腰をかけて、ウン成程などと、隨喜渴仰を遊ばすやうな料簡方だつたもんだから、姫公の馬車に合乗を名譽と思ふやうな事になる、其の合乗を名譽と心得る始末だから、おかみさん、僕今姫君を稱して姫公といった、いつたが、今夜がはじめだ。現在、先刻までは奥平伯爵の姫君と思つて居たね、姫様といったですよ。」

何うです、其姫様が御婚禮のひろめの席で、唱ふ歌を、仰せ畏んでこしらへるのを、天晴名譽と心得るやうだから、いざとなると、松風の音にも腰が抜ける、呐喊の聲と聞えしは松風なりけり世の中はだ。然も何と、口約束をした汝が媽が西洋だらうが、何だらうが、絲に合せてチンなど、御入來のお客様のお聞きに達しようといふんぢやないか。

何ともどうも、媽のろの隊長、二本棒の繼梯子だ。男子天窓に油をつけて、満座の中で、汝が媽の絲に乗せる歌をつくらうなどとあきらめたら、首く／＼の他に何が出来、大きな咳だつて出やしない。況や古城の歌をやだね。

切めて、切めて、龍宮の聲を聞くことのならぬ耳でも、城へ入る前に此處へ来て、お房さんの松毬から、風の音を聞いて置いたら、慥にだらしなくはなるまいもの！  
悔、悔しいが仕方がない。一敗地に塗れて、又再舉を計る勇氣なしだ。しかし何につけても、



姫様や秋山の娘は邪魔だ、二度と又顔を断じて見ない。で、此のま、おかみさん、東山へ一所に歸つて、翌日は東京へ出奔だ。かけおちです。敗軍の將は共に兵を談ずべからずだけれど、姉さん、君のお酌を頼む。いかにも松毬が氣に入つた。蘇かへつたやうな松風の音だね。大きいもので波々と一ツいかう、敢て玉手を勞する、呀、構はず、罎を倒に持ち給へ。」

姫神

三十一

「あれ、松坂さん、何方へ。否、此のま、お歸り遊ばしては、此の娘が可哀相でございます、お媒灼人なんですもの、黙つちや居られませんか、お開きなら私の方がいたしませう。」と軽く留めて打微笑む、女房の袖の端を、お房は下に居て、引いて、慌しく、

「もしな、おかみはん。」

新三郎は左右を見遣り、

「いや、何處へも行かない、何處へも行かないが、こんな話を、面と向つて遣られちや、僕だつ

て大いに照れる。あとでよく姉さんの氣も聞いてくれ給へ、僕は心の變らないのを、神明に誓つて来る。」

かたゞ、靜に其の胸を鎮めようと思つたので、森の中を透して尋ねた。

「お堂は誰を祭つたんだね。」

「摩利支天様ですよ。」

思はず、

「荒神だ、酔つて居ちや失禮か。」

「否、此處の摩利支天様は、優しい、天女の御像で、殿方の弓矢、劍術、女の針仕事まで、一切、藝事をお授けの御願だと申しますよ。」

「南無、藝術の、はッ。」

頭を下げようとして、其まゝ、よろゝと前へ、新三郎は廂を出た。

「謹んで隨縁し奉らう、おかみさん、直ぐ歸る。」

「行つて入らつしやい。」

「お早く戻つておくれやす。」

虜中白骨行應朽



樓上紅粧尙思歸

「キーツ、」

きり／＼と齒を噛む音、飯豊猿の悪權太、五尺の鐵砲の肩を入かへ、銃口を今、御堂の路へ獨  
出た、新三郎にじり／＼と向けた。

背後でばかりと扇を疊んだ、秋山の令嬢衣子は、靜に提げて居た、錦の袋、ヴァイオリンの小  
さな包を、急に袖の下に高く抱へたのである。

當時樂壇に美名を馳せて、斯道の工匠といはる、人、今日故郷の公會堂に、小學校の生徒の  
唱歌、教會連の讚美歌をませた、女教師のオルガンなど、十數番の番組の其の眞打を厭な顔もせ  
ず勤めた歸途。

裏の畠でボチが鳴いたり、向うの山へ狸が飛んだり、エン、ヤラヤアと腕車を推したり、耶蘇  
が罪を清めたり、雑巾かけたりする對手の、奏樂者お衣さんは、氣の毒で見て居られぬと、臨席  
しなかつた竹姫の、鶴の城の抜け駈なんぞ、衣子は夢にも知らないのであるから、其の姫のため  
に城の歌作らむと、先んじて會津下りをした、人も知り、互に許した新三郎。扱て姫いよ／＼入  
國して、全市鼎の湧くが如く、菩提所の坊さんまで、輪袈裟で伺候する中へ、先生顔出しもしな  
いで、姫は心にかけないまでもと、氣を揉んで居た處。

音樂會も早く濟んで、幸ひ姫が一所でなし、折もよし、月もよし、歸りがけに東山、清瀧まで  
は程近しと、衣子は田舎の燕尾服、羽織袴がすらりと出て、宅まで送らうといふのを斷り、あれ  
御家老様のお娘御、江戸さ一番の藝者を拜めとどいやどいや、停車場のやうに寄り來る中を、颯  
と腕車で駈けぬけさせ、灯しかさねた軒提灯の、セツが三ツ三ツが一ツ、いつか背に遠花火、星  
はら／＼と町はづれ、湯川の岸を東山へ、涙橋近うなる、畑の彼方に月の森あり。

傳へ聞く野郎構の摩利支天は、姫神にておはします、文藝守護の御誓、手習するにも、文讀む  
にも、襪さきの針を持つにも、幼き時から信仰して、甘えるばかりに願ひし御堂。

人は知らじ今夜の奏樂、當代の學者、學生、紳士、貴夫人萬衆が拍手の中に、上野、神田の大  
會に、奏づる時の比にあらず、我ながら自ら許す、心清しき出來榮も、靈の前に跪きて、鰐口の  
鈴の緒に縋ると、おなじ思ひのしたればならん。

あら尊や。十年の苦學ありとはいへ、ボーゲン（ヴァイオリンを奏づる弓）の持方一ツ習ひ得  
しさへ、皆姫神の御利益。

薔薇の雪の薫る時、電燈の花の輝く時、女王の如く迎へられて、自ら學べりと思ひつゝ、己が



姿を水鏡、うつす高峰の月や忘れし。

忘るゝとしもなければども、年久しうして故郷に来て、取紛れたりとはいへ、未だ御堂にも参ら  
ずと、湯川の瀬の音、松の風。森の影空に澄み、烟に星の露を眺めて、衣子は悚然と寒くなるま  
で、尊く畏く勿體なく、あはれ懐しくも床しくなりて、心漫に腕車を下りた。

其時、深張をつけて下りたが、川風颯と裳を吹いて、袂涼しく肌冷く、其朱鷺色の長襦袢も、  
秋の草の細の一重も、唯肩にかけて朝霧を身に絡うた心持の清々しく、駒下駄も浮いて軽きに、  
土筆鼓草に馴れたる路なり。舊より畑中の薄を分けても腕車が通るのではないのだし、御堂へ参  
つて裏路から、東山もつい近し。待たせて置くに及ばずと、供の車夫を歸さうとして、顧ると、  
畏つて母衣を撥ねたが、譜本を包んだ風呂敷包を、腰掛の中へ入れようとして、焦茶の天鵝絨  
の高臺を外す時、膝の上に乗せて居て、今下りるとして差置いた、ヴァイオリンを、蹴込へ心なく  
下したのを見て、自分も人も踏む處と、衣子は不圖氣になつた。

其のまゝ、腕車に預けて歸すが、心無いやうに思つたので、取替へて涼傘を。  
ヴァイオリンは衣子が自分に。それから御堂に詣づる路、幼馴染の畑を縦に、枝豆の葉影を拾  
うて、羅に染む夏の月、遠音に村の若者が、妻を呼ぶ尺八のをかき音も、姫神の御前に導く、  
草刈る童の笛かとはばかり。

衣子はいそゝと蓮歩を運んで、ばつさり行當つた唐黍の自然生。

潜つて土手へ上らうと、見るや向うの薄の中に、行燈に青き馬追の宿るやう、一軒、月に葦簾  
の茶屋。草の茂にあからさまであつた。

時に男の高調子、束の間も忘れぬ聲、後姿も正に其の人。

清瀧樓の晝寝が覺めて、月の湯川を辿りしが、さるにても微妙きかな、御堂に参るは我がため  
のみか、雪にも花にも手を携へて、おなじ園生に遊ぶ人の、冥福をともしに祈るにこそ。しばらく  
逢はぬ戀人なり。衣子は飛立つ心を鎮めて、軽く不意を打つて驚かさむ、搦手からか、大手から  
かと、四邊を眊すと不思議の怪物。

飯豊猿の權太である。

つまも籠れる葦簾の中へ、敵意を挟むに相違がないから、衣子は、忍びやかに、様子を見て居  
た。然るに清瀧の女房が、過去りし物語と、新三郎が鶴の城の述懐とは、彼一句、是一語、極め  
て濃かなるものであつたが、時間は半時に満たなかつた。時々男の爽なる聲、衣子には意を傳  
へず、きれんに聞ゆるばかり。唯酔へる事のみ明に知れて、これを其の人の瑾に瑕と、柳眉を  
寄せるばかりであつたが、しかし、其の間に權太郎が爲せる舉動は、あまたたび衣子の見る目を  
驚かしたのである。



他なし唐黍の莖を、向齒に嚙り切つて、密と手で倒まにしたのである。衣子ははじめ、土を嘗めるのかと、傍目も觸らず視める間、泥に片頬を埋みながら、犬が干物の骨をしやぶるが如く、がりくと喰ひはじめ、やがて根を放すと、横にして、膝を立て、両手で握つて、穂の下へかぶりついた。が、頭を掉つて喰切つて、残さず葉を撈ると、づんごにした青い軸、手に長きこと約五尺。

べたりと匍匐ひ、兩膝を再び折敷き、胸にあてて、眞直にして、尖つた先を、衝と件の葦簾を的に差向けた。お房の姿の動く時、新三郎のものいふ時、清瀧の女房と、いづれを打たんと三人の一人、迷ふか銃口をまはしながら、眼を光らし髪を動かし、足を踏ばり、身もだえして、手許の頬、息を白く、消すまじと、吹いて、フツ！ フツ！

飯豊山の獵夫は、瞋恚嫉妬の炎を吐いて、つらき女か、憎き男か、とりもち顔の女房か、唐黍の鐵砲に吐く呼吸の火繩をかけて、唯一發と狙ふ身構。詩吟一聲、新三郎が床几を放れて路を出た時、肩を揺かへ、瞳を轉じて、驚破！

衣子を見る目も危く、堪りかねて、トン、と足踏をして、つと出た。悪權太驚いてヌツクと立つたが、縁の下に犬と寝るから其の女主人の家主様、摩利支天の御像見るやう、艶麗に氣高い、姿を一目、あとしざりをして、白眼、唐黍の銃を投げると齊く、踵

を返して背後影、猿より疾く見えすなんぬ。

簪の質

三十三

「あなた、さ、お薬、あとで冷水を召食れ、さあ。あなた。」

水香を片手に、片手には、露の小粒の薬を据ゑて、衣子は、新三郎の然も痛苦に堪へないやうな、眼を塞いだ顔を覗き、

「まあ、苦しうだこと。松坂さん、あなた大層酔つたのね、一口召食れ、清心丹ですよ、合薬ですよ。」

五三の桐の定紋を、金蒔繪の蠟色塗の香箱は、薬を振出したまゝ、しまはないで、襪襦錦の御守殿持の紙入と一所に、浅黄の紹繻珍蝶々を白抜なるを、心なしの太鼓にきり、としめた、帯の間に挟んで居る。新三郎の口に寄せた薬の色は、薄曇りの月に、指環の寶石は、本堂の狐格子の藏の中から一條さし出づる燈明の灯に映じて、共に燦然として輝くのであつた。

新三郎は階の上の眞正面、觀音開きの片扉に、ぐツたりと背を凭せ、敷居に腰、兩手を膝頭に



組んで、砂だらけの廻廊に脚を立てながら、仰いで、眉を顰めて、幾分の冷さを得んと欲するやう、後腦を板戸に擦りつけて、切なさうに口を利かず。

彼はお房の葦簾張を辭して、森の下を一文字に突進して此處へ來ると、はつと勢よく禮拜をするや否や、はじめから恚る體裁であつた。

衣子は悪權太を見送つて、横に薄原を抜けると直ぐ後について來たのであつたが、二三度聲をかけても返事せぬ、新三郎の様子を見て、薬をと思ふ、水がなし、手水鉢は木の葉の下づみ、心づいたのは葦簾の茶店で。

それから御堂を伏拜んで、男の傍へ、ヴァイオリンを差かけると、扇を帯に、俯向いて深くさしたが、急いで引返して駈出した、おとなしやかでも、學校育ち、恚うなると、やがて、水香ともう一ツ、薬罐を借りて戻つた、疾い事。

新三郎は其の間に、一度眼を開いたが、下蔭を彼方に走る秋草の姿を窺はんとはせず、懶げに、じろり傍なるヴァイオリンを一目見て、又眠る、酔に蒼ざめた顔の色は、一層慘憺たるものとなつて、無量の懊惱を露して居たのであつた。

「あなた、あなた苦しいの、又いつものやうに吐いちや不可せんよ。身體を痛めますから、我慢しておあがんなさい。さあ、」

身體を男の横にして、

「飲まして上げませうか、一寸、いつか貴下、矢張酔つて苦しがつた時、姫様から紫雪を頂いて、夢中で姫様に背中を叩かしてさ。そら、あとで耳盥を見て大テレに照れちやつて、この薬は紫の雪ですな、お手づからでなくつては頂戴出來ない、天上の靈藥、恩賜の紫雪だつていつた事があつてね。」

そんな窮屈なんぢありません、私のは一寸、君に奉る御藥よ、胡蝶と申す女でなくツちや厭ですか。」

警句一番して莞爾すると、薬は吸ひ込まれたやうに美しい掌から手も動かさず男の口。ガリ／＼と邪険に嚙んで、唇に近かつた水香からがぶりと一杯。

咽喉に支へたか、がぶ／＼と飲んで、ごくりと通つた。

新三郎は我知らず、水香を取るに先んじて、衣子の手首を壓へたので、織き腕は力なく揺れて、水は膝へざぶりとかゝつた。

故とたしなめるやうに、

「亂暴ねえ、御覽なさいな。」

といひながら左の袖を上へ上げて、軽く振動かすと脇あけから、ちぎれたやうな襦袢がこぼれ



る。

「おや、手巾を落したよ」と、直にかけた男の膝、朱鷺色の霞を隔てて、衣子は密と手を取つたが、水に濡れたかヒヤリとした。

「冷いことね。」

三十四

襦袢の袖の溢れたまゝ、はらりと媚かしい、年紀も二ツ三ツ少やいで、衝と廻廊を彼方へ去つた、欄干の横木十字の角へすらりと立つて、乗出すやうにして、高く月に水呑を透かして、斜にして、くるりとまはして見た。

底にまだ残つて居たから、猶豫はず、ぐつと干して、不圖、

「水杯ね、」

と思はずの振で笑つて言つたが、心付いて、

「おゝ。厭な。」

背後ざまに其水呑を蔽すと、亂れた袖に引かゝつて、袂に入らうとするのを、はづして、帯の結目に伏せた。振返つて、斜に見ると、新三郎も又目を開いて視ながら、得もいはれない顔をし

て居るので、衣子はあらたまつて極りの悪さう。黙つて、しばらくして、優しく睨む真似をして、酔の覺めたらしいのを嬉しさうに、

「酔つてます、詩人。」

「酔……」

聲は異様なものであつた、頃刻くひしばつて無言であつたためか、嚙しめた齒に、かすれく。

「酔、酔、酔はないで、令、令嬢、お、水を最う一杯。」

「上げませうか。」

衣子はいそゝ傍に寄つた。竝んで、水差を取りながら、

「氣がついて？ あなたまるで夢中だつたわね、先刻私が来た時なんか、傍へ寄つても顔も分らないくらゐなんですもの。お薬を上げませうと思つても水がないもんですから彼處の茶屋へ行つて借りて来たんですよ。知らない顔ですから、いきなり道具を借りるのをかしく思はれると悪いから、簪を抵當に置いて来たの。否ね、其には及ばないで貸してくれさうだつたんですけれど、また世帯を持つてね、お金子に困る時、何かの、あの稽古だと思つてね。」

一たび其口を開かば、正に城をも傾くべきが、簪を質に器を借る、松に羽衣を脱ぎかけた、三保の浦の風流あり。抜いたのは、桔梗の花形に、寶石の星を聯ねた、金脚なるものであつた。



「經營慘憺でせう、だつて苦勞をさせるんだもの、貴方、相濟まない譯ね。」と莞爾。新三郎は黙然たり。

「でもお酒だから可いんだけど、これがもし本當の病氣だつたら、何うでせう、」

「……………」

「眞實よ。」と老實にいつて、はじめてほつと小さな吐息。

幽に目を開き、

「眞實？ 何が眞實ですか。」と屹といつたが、要領を得ないこと。

「眞實つて……、え、眞實つて……然うぢやありませんか。あなた眞蒼になつて苦しうで、見て居るものが辛くつてよ、病氣でこんな容體だつたら大變ぢやありませんか。」

「打棄つてお置きなさい。」

優しい目で、

「又？ 屹とよ。酔ふと我儘をいつてしやうがありやしない。何時かもこんな晩ね、ホテルの歸途に、築地の海岸を二人で歩行して居たら、何うです、急に思出して、返子へ行きたくなつたつて、これから直に出掛けるなんてさ、憎らしいから、勝手に御執心の龍宮の聲でも聞いておいでなさいといつたら、まさかと思つたのに終汽車で、杜戸まで行つて來てね、それなんですもの、」

といひかけて、

「忘れて居たこと。さあ、冷水、もう酔つた介抱はして上げまいと思ふけれど。」

三十五

姉が弟にいふ如く、

「だつて可哀相だから、厭ね、お酒がまだ香ふよ。ほんたうに姫様ばかりぢやありません、今夜なんざ、私のだつて恩賜だわ。」

「打棄つて置くが可いです。」

「打棄つて置いて何うするの、」

「死ぢまへば其までです。」と擲つやうに云つて面を背けた。

其の顔を追ふやうに、情の籠つた、さかしい、涼しい目を働かして、

「また、そんなことをいつて、姉さんもう世話をしないから可い、駄々兒ツちやありやしないよ。」

え、駄々兒ですとも、工匠！」

向直つて新三郎は言ふ聲に力を籠めた。



「僕は駄々兒です、意氣地なしの骨頂、野呂間の素天邊、二本棒の繼階子だ。貴女のやうな、陸軍少將の令嬢で、音楽界の花形で、下谷一番伊達者といふのに、酔つぱらつた介抱をして頂くやうな、氣の利いたんぢやありません。打棄つてお置きなさい、へむ、一人姉さん下谷にごさるだ。」

新三郎はボンと手を拍つ。

「そら、ね。」と笑つて居る。

「何の、何の人をつけ、おもしろくもない、意氣地アなくても、智慧がなくても、これでも江戸ッ兒のはしくれた。ヂヤンと打つけりや目を醒す、火事に如才はございませぬが、ヴァイオリンの合方で、棟割長屋の、夜があけて堪りますか。小兒は泣出す、犬は吠える、お附合迷惑で大屋様御難儀だ。申戯ぢやない。」

「そら、ね。」と笑つて居る。

「お衣さん。」

笑つて答へず。

「令嬢、令嬢。」と、聲高に呼んだ。

「厭ね。」

「貴女惚れてますね、僕にぞツこんだね、ぼツと来て居るんですな。」

「知らないわ、私。」

「否確に惚れて居ます、又、惚れて居なくツて、此の世話が出来るものか。世の中によ、貴女に一寸見られたばかりで、天窓からぞツとするものが無數ある。酔ざめの水なんか飲まして貰つて御覽じろ、氷の木乃伊だ。僕も惚れてます、何のことはない、ひれふしてですな、御足の指に接吻し奉るくらゐ惚れてるんだ。兩方惚れてるから、此の縁まとまる、大吉だね、片や奏樂者片や詩人、凄取組でございますな。」

白蠟細工の、天狗の孫見たやうな小僧の呼出しで、陸軍の少將が馬に乗つた立行司だ。

「そら、ね。」と笑つて居る。

「ね、惚れて居ませう、けれどもです、けれどもですな。貴女は其の位置を以て、其の風采を以て、甚だ立入つたやうですが、且つ其の容貌を以てだ。いふまでもない又其の藝術を以てだ。一朝すべてを泥土に委して、是を車夫に與へようとはしますまい、馬丁に與へようとはしますまい、譬ひ其の男に惚れてもですな。」

「ね。」と唯笑つて居る。

「又間違つて與へてならうか。今あなたが、其の身體で車夫や馬丁の娼々になるといへば、天が



許さん、人も許さん。人ごとぢやないけれど、僕も敢て許さんです。近い話が、姫様だ、伯爵の令嬢竹子姫が法界節と駈落をすると云つたら、貴女は何と、黙つてこれを許しますか。」

「そら、ね。」と笑つて居る。

### 狐格子

#### 三十六

新三郎は眼を瞋らし、

「敢て許さんでせう。けれども、車夫といひ馬丁といひ、法界節といつて、更に人を煩はさず、一家を營んで居るものなら尙談すべしだ。貴女は何と、くどいが、其の位置、藝術、風采の一切を以て、これを城の番人に與へますか。」

城の番人！

僕がこゝに云ふのは、戈を横へて城門に立つて、敵を防ぐ勇士といふ意味ぢやない。大手前の番太郎だ、菖蒲草の袴で六尺棒で、徒士が上つても土下座をする、いや、其にも劣つた、折助仲間、緞賣の類、いざ鎌倉といふ時にや、濠の埋草にもならない野郎で、一人扶持の食潰し、あは

れんで言や、不便なもんだが、手厳しく掛合へば、祿盗人、賊臣ですな。得て然ういふ奴は、城の草を取らしても、墓に、目をまはす、當前だ。」

切齒をして、

「埋草になりや、車前子の方が餘程おためだ。今僕は、僕は今、畜生！此處からも判然見える、鶴の城に對しては、草にも劣つた、折助仲間緞賣の類です。打棄つてお置きなさい。折仲の酔っぱらひを介抱遊ばしたなんと云つちや、御家老の嬢様お身の上です。貴女お手討もんですぜ、何の事はない、文金島田の投首で、紫の裾模様、緞子の帯を堅矢の字、緋縮緬の蹴出か何かで、金の扱帯を長く引摺つて、奥庭の松の立木に縛られて居る方だ、あゝ、いたはしや、影が薄い。御臺様お情で、旨く行つた處で背戸口から落人で、そら、乳母の家へのめすり込んで、其處で法界節といふんですな。第一貴女御兩親をどうします。打棄つて置いて早くお歸りなさい。お衣さん歸つて下さい。」と屹といふ。

「貴方、私一人だわ。へ、れけのレケちやつた處なんか見られたもんだから、極が悪いもんだから、いろんな事をいつてさ、あなた、お酒をあがると何時も然うよ。私やもう厭だけれど、お父さまなんか、其處が好いんですとさ、そして何時でも然ういふの。新三郎さんが酔つていふ、あのぶうくを一絡めにすると、一陣ぐらゐる、進めつて、號令が出来ますとさ、現在のなんぞ例よ



り壯だから、三軍を叱咤するのね。」

聞きも果てず、

「ど、ど、何ういたし、ぐうの音も出ず、ぐうの音も出ないんです。城、城のしの字も出ないんです、城の歌なんか出来るもんか。」と思ひ餘つて心の裡を。

衣子フト氣がついて、

「あ、貴方、それでお酒を飲んだのね。」

「……………」

「道理で、姫様が入らしたのに、顔出しをしても下さらなひでさ。それだから今夜、東山へお迎に行かうと思つて来たんですよ。」

畑の向まで来ますとね、思出したと云つては勿體なうございますけれど。」

片手を上げて伏拜み、

「此ね、摩利支天様は、私が小兒の時から信心してね、まるでおねだり申すやうにして居たの。」

新さん、あなたや、私たちの神様ですよ。何うぞ、新さんも立派なものが出来ますやうにと、お願ひ申しに来たんですよ。何もそんな顔をしないでたつて、私たちの思でも出来ますよ。」

「何うして！ 何うして！」

「否！」

「企及ぶべからず。せめて濠の埋草なら可いけれど、折仲だから逆も不可ん。しかし、口惜いです。實に無念だ。僕はもう、爪でも長かつたら、一念で、城、城の石垣に切めてひつかき疵でもつけて見たい。」

「まあ、あれ又そんな顔をしないでさ、ですから御酒なんかあがるなよ、よ、新さん。」  
と真心から、引添うてしめやかに、

「父上てばね、あなた、あなたは酔つて三軍を叱咤したり、號令をかけたなりなんぞなさらないでも可いの。他に仕事があるんだもの。さ、上げますよ。冷水でもあがつて、判然して下さいよ。だから、いつでも、およしなさいッていふのにね。」  
果は弱々と言ふのであつた。

三十七

「眞實に、酔つちや何にも出来ないわ。」

「お待ちなさい！」

新三郎は片膝を立てて開直り、



「何酔つちや出来ぬ？ 以つての外だ。此の、此の酒あつたればこそ、未だ幽に絲のやうな望を繋いで、薪に臥し、膽を嘗めて、僕も聞いた、——此の、藝術守護の摩利支天尊の破堂の縁に立籠つて、纒かに筵旗を立てるの勇氣があるんです。

然うでなくツても、僕をして酒なからしめば、元來、榮螺の中に海神の宮殿を見る能はずして、奏樂者の姿に魂を飛ばす折仲だ。疾の昔、衣の襟高きこと八寸二分、散髪に分け方骨髄に入つて、洋服に羽が出来てね、巨匠の袂にぶらさがつて、半巾の面縛で、死刑をうけ、魂魄此の土にも留まり得ないで、愛神のお茶漬、晚餐の餌ともゆきませんや。一體あの小僧なんか、何を食つて生きてるだらう。車夫をやるでもなし、馬丁をやるでもなし、何をして生きてるだらう、恐らくわれれを喰つとるのだ、われれが其の餌食であるとして見ると、僕なんか、お香物でお茶漬の方で、貴女なんざ本膳七五三だね。否、事實。あ、おなじ餌食なら氣の知れない愛神にやられるより、如かず、龍宮の細語を聞かうと心がけて、昔から手心の知れた魚の餌食となる事だ。」

堪りかねて、

「貴方。」

「……………」

「新さん、私一人だわ。」

「……………」

「私一人だわ。」

「……………」

「私一人だわ、新さん。」

「勿論、秋山令嬢唯一人、僕は酔つてテレ隠しに、見榮をいふのでも、太平樂を並べるのでも、駄々を捏ねるのでもありません。僕はもう些とも酔つちや居ないんです。お互に身體は清し、何にも疾しい處はない。僕は折助たることを知つた、仲間の女房に女工匠は荷が重い、實に天下の不經濟ですから、斷然と別れませう。相濟まん。全く相濟まん。かゝる車夫馬丁に劣るものとは知らなかつた、あなたと手を携へてと思つた大なる望は、しかし、貴女を欺いたんぢやありません。また自ら欺きもしなかつた。自分は信じて居たんだが、己を知らざる、甚しいものがあつたんです、別れませう。」

「まあ。」

手にひかへた冷水の水香を取つて、新三郎はぶる／＼と震へた。  
「水杯。」



「え。」

「謹んでわかれの水杯。」

「縋りついて、

「ま、ま、待つて下さいよ、新さん、全くなの。」

「もう同一ことは言ひません。」

「ぢやあ。」

衣子は口早に息忙しく、

「それぢやあ、私、折助でも仲間でも可うございますよ。新さん、そんな、そんな仲ぢやありません。」とばかり、呆れ顔に茫然として、餘の事に、

「私や、涙も出ないんだもの。可いわ、折助でも。」

「否、そりや不可ん、そりや不可ん。それだと僕が今謂つた、天人ともに許さん事になる。第一差配さんが迷惑、小兒は泣出す、犬は吠えるだ、折助長屋にヴァイオリン。」

新三郎は傍に蒼く幽に光ある、秋野の露に月の影射す如き、錦の包の樂器を見て、片手にこれを取上げた。

「先づ、其方へお取りなさい。で、僕は杯を此方に持つ。」と云ひかけて、衝と立ち上つた劍幕に、

桔梗、刈萱、女郎花、あはれ、吹き靡けたやうに衣子も立つた。羅の袖もはらくして、

「何うするの。」

「そして此ツ切分れませう。」

三十八

「それとも、今、たつた今、其のヴァイオリンを擲ちますか、ボーゲンを持つた手に鍋釜を提げて、折助の飯が焚けるか何うです。もし然う決心を下さるなら、天人ともに許さないでも、山の中なり野末なり、これから二人で駈落ちませう、何うです。」

「そりや、何ですけれど、いくら私には。」

「ぢや、其のヴァイオリンをお棄てなさい、目の前で大地へ投げて下さい、松風や浪の音なら、擦違つても氣がつかないが、蒲鉾小屋へヴァイオリンぢや、目に立つて仕様がなない。」

「だつて。」と人形のやうにしツかり抱いて、悄然としたのである。

「不可ますまい、又、可いつたつて、僕がさせない、天がさせません、人もさせない、思ひ切つて別れるです。」

衣子は堪へかねて、身を揉んで、



「だつて、今、今、だつて、新さん。少し考へさして下さいな、もう何うしたら可いだらう。」  
 「いや、決心は瞬間です。僕だつて、僕だつて、此の、此の決心は明日までは堪へられない、一秒時。」ときれくくに云つて聲をくもらしたが、

「え。」といふより、其の自ら誓つた、別れの水を毒の如く、突立つたまゝぐつと仰いで、衝と投げると、水呑は白い糸を曳いた。

「あれ。」

衣子は恰も其の地に落ちざるに先んじて袖で受けようとしたやうに、階からドンと下りた、立竦んで、見る／＼涙頬を傳ひ、

「まあ、まあ、新さん、それは借りて來たのぢやありませんかねえ。」

痛切なる聲して、新三郎、

「其かはりに置いて在らつしやつた簪を、茶屋の娘にやつて下さい。」  
 衣子は瞬もしないで居た。

「ぢや、又杜戸の姉さんが出來たんですね。厭です、いくら、いくらあなたが、そんなでも私は厭です。簪は記念といふぢやありませんか。それだけけれど、私未練ぢやないけれど、こゝで此のヴァイオリンを棄てる決心が出來ないから、あなたの心が鎮まるまで一度お別れ申しませう。お

別れ申しますよ、別れて参りますけれど、路々も考へてね、直にも引返して來ますから。」  
 と聲も心も沈み果てた、頭を垂れて一步二歩、衣子のうなだれて、行く姿、優しく氣高く、う

つくしい。唯見る此の世の人にあらず、月宮の美姫罪あつて、流罪の雲に乗れるが如し。  
 新三郎は爪立つて、伸上るまで見返つて、唯一聲、

「お衣さん。」

片手にヴァイオリンを抱いたまゝ、衣子の最後に見返る時。

「たとひ僕と別れても、あなたはマイステリンとして、些とも變つたことはありません。」  
 「あなたは？」

「僕は。」

「詩人。」といつて爪先に力を入れた、衣子は駈出して戻らうとしたが、一髪動かさず、描ける如くに突立た戀人の姿を一目。いはれあるべし、聞くが如くんば、我渠を棄てざれば、海神の宮殿に参じて、城の歌作ること能はざるべき也と、さかしき人は歩を轉じて、蝶々の帯、薄の裳、寂しく松吹く風に消えたり。

新三郎は倒れようとして、撞と狐格子の扉に怛つた、響に揺れて、がたりと上から、肩にか、つたものがあつた。



「まあ、何う遊ばしたのでございます。」  
来たのは清瀧の女房で。

三十九

「お房も案じて居りますよ。おや、今入らしたお嬢様は何處へおいでなさいましたえ、松坂さん、もし、松坂さん。」

「お、かみさんか。」

「何うなすつたんでございます。お嬢さんはお見えなさらぬぢやありませんか。」

「追拂つたです。」

「え。」

「様子でも知れたでせう、彼が即ち、僕をして、姫公に土下座をせしめる婦人だ、思切つて追返した。」

と新三郎太息を言つた。

「だつて、あんなお美しい嬢さんを、何うしてあなたは。」

「何うしてたつて死ぬほどの思だ。一生懸命、なか／＼これが容易な事で出来るものか。」

女房は深く頷き、

「皆、お城のせるでせう。」

「勿論。」

「怨みですなえ。」

「僕はもう、怨みが通越して無念です。此の力足らずとはいへ、何の城一ツ、城一ツ驚くことはいない筈だに、それが、矢張、姫公に土下座の料簡から起るんだ。其のために、秋山の棄てたと思ふと口惜しい。おかみさん先刻、簪を置いて来たでせう。彼は、お房に遣つて宜しい、秋山の女の飾を奪つて、お房の髪に翳すんです。悪魔のわざだ、夜叉羅刹の擧動だ。しかし、杜戸の巖端に美人が弾するヴァイオリンを棄てて、改めて龍宮の細語を、榮螺に聞く、少くとも松ぼつくりから風の音を聞く誓の験だ。何のこれならば城の歌、何の事が、と思ふけれど、胸から割つたやうに、身體半分削り取られた心持で、あの秋山に分れても、未だ、歌の其の緒だつて見出さない、分らん、些とも分らん、おかみさん、僕は何うして居るすかな。」

女房近く寄つて、とみかうみ、

「否、弓を持つて在らつしやいますよ。何うしてなえ。」



新三郎は愕然として、唯見れば弦を挟んで、肩にかけ、弓杖を支いて扉に凭れた、思ひもかけず凛々たる勇士の如き己が姿。

「お、こりや今、僕自身、自分の魂が抜けたのかと思つた、後姿が、向うの松のかけにかくれた時、何か上から来て胸に障つたものがあると思つたが、何うともなれ身體と、別に氣をつけても見なかつた。それぢや、此の弓！」

「奉納の額でございませう。」

女房も廻廊に上つて、竝んで上を仰ぐと白い、新な額面は龜遊軒の一連が、謹上再拜のそれであつた。

添へて二條、白羽箭。

「何うしてこれが落ちたかね。」

目を瞑つてものをもいはず、しばらくして、雲の晴れたやうな面色して、女房は悚然とした。

「もし、摩利支天様のお授けです。」

「お授けです。」

これには答へず、廂が低いから、女の手でも抜くと取れた、矢を持直して、押頂き、

「一矢遊ばせ、松坂さん、あなたの弓のお手並は、私が拜見いたしました。思ひ切つて、一心に

射て御覽なさいまし、さあ、貴客。」

「何を、的は。」

「お城です。」

「……………」

「ね、怨ぢやありませんか、憎らしいぢやありませんか。口惜しいでせう、無念でせう。敵とも仇とも、障礙とも思つて十分に射てお了ひなさい、もし、お分りになつたでせうね。」

新三郎、身ゆるぎをして、雀躍し、凛々しき面に笑を湛へた。

「應。」

「お分りになりましたでせう、さあ、あなた。」

「應。」

時に三日月を大きく抱いて、弦を引いて衝と放した。ぴんと鳴つた。

取直して、片肌を脱ぐと、筋がしまつて肉が震へる。

女房が片膝ついて、上へ捧げ出す矢をそばめて、屹と彼方の空を望んだ。

雲開けて、月小さく、描ける如き城の趾、墨繪の松の梢に在焉。

ガツキと番へる。



「南無摩利支天尊。」と御名を念じて、女房は、おつと見詰めて、じりりと寄つた。

涙橋

四十

「やあ、阿魔、欲しいか、これが欲しいか、ようこれ、欲しかつぺい、こら、小いもんだが太く光らあ。」

湯川にかけた涙橋、渡つた袂の路の折れ角、空の色のだんよりと、水も白くなつて曇つたのは、鬼が此の星を盗んだ所爲か、燦々紫に輝く簪を、指のさきにくるくるときらめかして、牙を出して莞爾つくは飯豊猿の悪權太。

「こら、何うだ、ふは、やあ桔梗の花簪とけつからあ。やあ、阿魔、汝、夢中になつて見惚れて居るで、ちよろりと蕪に攫はれただ、欲しかつぺいな、欲しかつぺいな。」

裳の雪の消々に、お房は取亂して、土の上。葎の宿の星祭、寶石の簪を守つて、唯一人、御堂へ新三郎を見に行つた、清瀧の女房の留守を、どさり天井から飛込んで、聲も出ぬ間に搔攫ひ、葎簾を蹴倒して悪權太、疾風の如くに飛び出すから、兎角うの分別も、ものいふ隙もなく、銀杏

がへしの根を亂して、跣足で此處まで追つて來た、お房は橋を渡り越して勾配に膝を突くと、呼吸を切つて起きも上らず、唯唇を動かすのみ。

飯豊猿、渾名の如く、毛だらけの膝を折り、尻を突出して中腰に踏みながら、  
「やあ、姉え、欲しくば簪返すべい。己はあ、何も盗賊でねえだ、汝の顔見たいで、摩利支天様さ御堂の縁の下で寝るけれど、乞食でねえ、獸のう一ツ打放しや、食資も、飲資も、博奕資も出来るだんで、何もこれ人様のもの塵一葉、欲かあねえ。たゞ、はあ。邪魔のねえやうに、汝此處まで誘引出しただ、別あねえ、返してやるべい。」

すつと寄ると、お房は其の姿を見るさへ恐しさうに、わなくと、震へたので、猿は長脚を高く踏んで背後へ廻つた。  
廻つて、上の方から大きく持つて行く、簪は流星の如く、光を残して、蒼く輝いてお房の黒髪に宿つたのである。

女は纔に振向いて、眞白な手を腕も露に、嬉しさうに拜む姿。  
悪權太厭な聲で、  
「拜むわ、拜むわ。」

と言つてゲラ／＼と凄く笑ひ、



「む、拜むわ、そんなえに嬉しいか。簪返して貰つたで拜むほど嬉しいか。まだ、まだまだ、其の拜んだ手、放してはなんねえだよ、しつかりと合せて居るだよ。苦しくツても放してはなんねえ、血反吐を吐いても合せて居るだ。身體がしびれても取つちやあなんねえ。やあ、阿魔。」

と疾くいつた、悪權太の顔の色、芳年が彩色の静面黙陽志の風あり。

「これ、可いか。そしてお念佛唱へるだ、汝、いま首いメめて殺してやるだ。」

「あ、あ、あれッ」

片手を解くと、お房は掴まれた襟を放さうとおさへて、遁げようとして、前へ倒れた、項は玉を伸べて、するりと衣紋が背中へ抜けると、裾は緊乎と踏留められた。

「擗くな、やい。己が、これ、うむと睨んだら、驚だつて遁しッこはねえだ。やあ、阿魔、汝、風の吹く時は恐えだらうと思ふで、己、汝の家をぐるぐると廻つただ、雨の降る夜さは夜一夜、汝の軒下に立つて居ただ、其の美しい頬けた見ては、遠くから拜んだい。なに、これ、通りがかりの姉えが預けた簪一ツなくならかいて、生死の目をするだに、己がといふと、影を見てせえ、泣くやうにおびえるだ、合點ならねえ。それも唯厭だちうなら我慢すべいが、汝、今夜他に男を拵えただ、業のウ焼けて、身體ア油で煮られるやうだア、堪んねえ。だけんど猿や狐でねえ、人間は一匹取換だで汝を殺しや、己も死ぬだ、やあ、阿魔、あきらめて往生せいちや。」

月下の的

四十一

「分つたつべい、汝、人の深せつを無にして死ぬだ。己、深せつを無にされて死ぬだ。己が汝に殺されて、汝己を殺すも一ツだ。殺すも殺されるも同だつけ、算盤球の當つて見せえ、己が方が引合ねえだ。汝惜しい命だつべ。己、獸同然で人間交さ出来ねえだけんど、入んねえ命といふはねえ、蟲けらだつて惜しい命だ。やあ、打つた獸た、賣るだよ、己が命も死んでやるべい、擗かねえで殺されるい。」と、熱き涙をこぼしながら、拭はむともせぬ手拭の自分の項を巻けるを取つて抜いて、ぐツと押當てた。

お房はばたく、左右の手で、空を打つて、

「おかみさんえ。」と呼吸の下。

救は目の前に来たのである。東山の素見もどりが、二人此の體につかくと寄つたが、一人は飯豊猿を見て、一人はお房を見、齊しく颯と左右に退いた。







両手を組んで、あこがれて去つた。  
知らずや湯川に淵をなす、水蒼く、月白き、巖に坐して、神女あり。我死なむか、此棄てなん  
か、包の錦は溪川の行く方も分かず流しやりしが、あまりの惜しさに、唯一曲、衣子は岸に片膝  
をなげて、先刻に一度ボーゲンに手のかゝると齊しく、雲分れたり、水静まつて、響く名家のウ  
アイオリン。

殆ど同時に、新三郎は白羽の當つた頬の色、月に輝き、見据ゑた瞳に心を籠めた、胸に御堂の  
扉を洩る、燈明の赤きを浴びたが、あたりにももの氣勢あり、姫神差覗かせたまふかと、氣清く、  
神澄み、骨氷つて、颯と靡いた單衣の風、銀黄金の鎧を吹いて搖ぎの絲も鳴るかとはばかり、此の  
ま、雲にも乗らむする、我を忘れてきりきりと満月の如く引絞つた。

銀河斜に鶴の城、其の片翼残れる石垣、押手の拳に手に取る如く、矢頃は遠く隔つたが、青春  
意氣のほとばしる處、幻の虹を描いて、練絹の絲を空に曳けば、海の宮殿に髣髴たる、月夜の  
的はじりりと狙ふ雙眼に引寄せた。

いでくと思ふ、こはいかに、矢羽に震ふ虚空の音楽、泣くが如く怨むが如く嘯くが如く、耳  
を刻んで胸を抉つて骨に染む時、矢尖にちらつく衣子の姿。  
美しき星に圍まれて、樂器を抱いて天に在り。

左に外し、右に避けても、矢の根冷く、疾き劍、正に其の胸について放れず、秋の草の彼の姿、  
森の陰に消えたる時だに、おのが身半ばそぎ落されて、魂の抜け失すると、血汐寒かりし新三郎、  
目も眩み、腕しびれ、力なえて、藻腕の案山子矢を落した、よろくと踉蹌いて、思はず、はら  
はらと落涙する。

射損じたり、第一矢。

清瀧の女房、柳眉を逆立て、控への二の矢を、

「貴下！」と取つてさし出すを、屹と見て、打領き、新三郎は取直して、再び丁と番へたのである。  
思ひ切つて一步を進み、更に秋水の瞳を凝し、姫神の御名を胸に、鎧の袖を揺直せば、白氣再  
び空を射て、放たずして疾く貫く、矢頃可矣、飛禽の翼縫ふ可き也。

曳固め、きり、とめ、兵弗と切つて放す、弓は大浪を打つて返した、矢響き高く白羽の神箭、  
遙に遙に霏々として、風と相打つ雪一片。

さて手應は胸にあつた、新三郎は見るく中、割然として、心ひらけ、鏘然として文字聲あり、  
腹案成んぬ、立處に。



高野聖



「參謀本部編纂の地圖を又繰開いて見るでもなからう、と思つたけれども、餘りの道ぢやから、手を觸るさへ暑くるしい、旅の法衣の袖をか、けて、表紙を附けた折本になつてゐるのを引張り出した。」

飛驒から信州へ越える深山の間道で、丁度立休らはうといふ一本の樹立も無い、右も左も山ばかりぢや、手を伸ばすと達きさうな峰があると、其の峰へ峰が乗り、巔が被さつて、飛ぶ鳥も見えず、雲の形も見えぬ。

道と空との間に唯一人我ばかり、凡そ正午と覺しい極熱の太陽の色も白いほどに冴え返つた光線を、深々と戴いた一重の檜笠に凌いで、恚う圖面を見た。

旅僧は然ういつて、握拳を兩方枕に乗せ、其で額を支へながら俯向いた。

道連になつた上人は、名古屋から此の越前敦賀の旅籠屋に来て、今しがた枕に就いた時まで、私が知つてゐる限り餘り仰向けになつたことのない、詰り傲然として物を見ない質の人物である。

一體東海道掛川の宿から同じ汽車に乗り組んだと覺えて居る、腰掛の隅に頭を垂れて、死灰の如く控へたから別段目にも留まらなかつた。

尾張の停車場で他の乗組員は言合せたやうに、不残下りたので、函の中には唯上人と私と二人になつた。

此の汽車は新橋を昨夜九時半に發つて、今夕敦賀に入らうといふ、名古屋では正午だつたから、飯に一折の鮓を買つた。旅僧も私と同じく其の鮓を求めたのであるが、蓋を開けると、ばらばらと海苔が懸つた、五目飯の中等なので。

（やあ、人參と干瓢ばかりだ。）と粗忽ツかしく絶叫した。私の顔を見て旅僧は耐へ兼ねたものに見える、吃々と笑ひ出した、固より二人ばかりなり、知己にはそれから成つたのだが、聞けば之から越前へ行つて、派は違ふが永平寺に訪ねるものがある、但し敦賀に一泊とのこと。

若狭へ歸省する私もおなじ處で泊らねばならないのであるから、其處で同行の約束が出来た。渠は高野山に籍を置くものだといつた、年配四十五六、柔和な何等の奇も見えぬ、可憐い、お

となしやかな風采で、羅紗の角袖の外套を着て、白のふらんねるの襟巻をしめ、土耳其形の帽を冠り、毛絲の手袋を嵌め、白足袋に日和下駄で、一見、僧侶よりは世の中の宗匠といふものに、其よりも寧ろ俗敷。



(お泊りは何方ぢやな)といつて聞かれたから、私は一人旅の旅宿の詰らなさを、染々歎息した、第一盆を持つて女中が坐睡をする、番頭が空世辭をいふ、廊下を歩くとじろくく目をつける、何より最も耐へ難いのは晩飯の支度が済むと、忽ち灯を行燈に換へて、薄暗い處でお休みなさいと命令されるが、私は夜が更けるまで寐ることが出来ないから、其間の心持といつたらない、殊に此頃の夜は長し、東京を出る時から一晩の泊が氣になつてならない位、差支へがなれば御僧と御一所に。

快く領いて、北陸地方を行脚の節はいつでも杖を休める香取屋といふのがある、舊は一軒の旅店であつたが、一人女の評判なのがなくなつてからは看板を外した、けれども昔から懇意な者は断らず泊めて、老人夫婦が内端に世話をして呉れる、宜しくば其へ、其代といひかけて、折を下に置いて、

(御馳走は人參と干瓢ばかりぢや)

と呵々と笑つた、慎み深さうな打見よりは氣の軽い。

岐阜では未だ蒼空が見えたけれども、後は名にし負ふ北國空、米原、長濱は薄曇、幽に日が射

して、寒さが身に染みると思つたが、柳ヶ瀬では雨、汽車の窓が暗くなるに従つて、白いものがちら／＼交つて來た。

(雪ですよ)

(然やうぢやな)といつたばかりで別に氣に留めず、仰いで空を見ようとしもない、此時に限らず、賤ヶ岳が、といつて、古戦場を指した時も、琵琶湖の風景を語つた時も、旅僧は唯頷いたばかりである。

敦賀で懐毛の立つほど煩はしいのは宿引の悪弊で、其日も期したる如く、汽車を下ると停車場の出口から町端へかけて招きの提灯、印傘の堤を築き、潜抜ける隙もあらず旅人を取圍んで、手手に喧しく己が家號を呼立てる、中にも烈しいのは、素早く手荷物を引手繰つて、へい難有う様で、を喰はす、頭痛持は血が上るほど耐へ切れないのが、例の下を向いて悠々と小取廻しに通抜ける旅僧は、誰も袖を曳かなかつたから、幸ひ其後に跟いて町へ入つて、吻といふ息を吐いた。

雪は小止なく、今は雨も交らず乾いた軽いのがさら／＼と面を打ち、宵ながら門を鎖した敦賀の通はひつそりして一條二條縦横に、辻の角は廣々と、白く積つた中を、道の程八町ばかりで、唯ある軒下に辿り着いたのが名指の香取屋。



床にも座敷にも飾りといつては無いが、柱立の見事な、疊の堅い、爐の大きいなる、自在鍵の鯉は鱗が黄金造であるかと思はる、艶を持った、素ばらしい籠を二ツ並べて一斗飯は焚けさうな目覺しい釜の懸つた古家で。

亭主は法然天窓、木綿の筒袖の中へ兩手の先を竦まして、火鉢の前でも手を出さぬ、ぬうとした親仁、女房の方は愛嬌のある、一寸世辭の可い婆さん、件の人參と干瓢の話を旅僧が打出すと、莞爾々々笑ひながら、縮緬雑魚と、鰯の干物と、とろ、昆布の味噌汁とで膳を出した、物の言振取成なんど、如何にも、上人とは別窓の間と見えて、連の私の居心の可いと謂つたらぬ。

聽て二階に寢床を拵へてくれた、天井は低いが、梁は丸太で二抱もあらう、屋の棟から斜に渡つて座敷の果の廂の處では天窓に支へさうになつて居る、巖乗な屋造、是なら裏の山から雪崩が來てもびくとせぬ。

特に炬燵が出來て居たから私は其ま、嬉しく入つた。寢床は最上一組同一炬燵に敷いてあつたが、旅僧は之には來らず、横に枕を並べて、火の氣のない臥床に寝た。

寝る時、上人は帯を解かぬ、勿論衣服も脱がぬ、着たま、圓くなつて俯向形に腰からすつぱりと入つて、肩に夜具の袖を掛けると手を突いて畏つた、其の様子は我々と反對で、顔に枕をするのである。

程なく寂然として寐に就きさうだから、汽車の中でもくれぐれいつたのは此處のこと、私は夜が更けるまで寐ることが出來ない、あはれと思つて最う暫くつきあつて、而して諸國を行脚なすつた内のおもしろい談をといつて打解けて幼らしくねだつた。

すると上人は頷いて、私は中年から仰向けに枕に就かぬのが癖で、寝るにも此儘ではあるけれども目は未だなく、訝えて居る、急に寐就かれないのはお前様と同一であらう。出家のいふことでも、教だの、戒だの、説法とばかりは限らぬ、若い、聞かつしやい、と言つて語り出した。後で聞くと宗門名譽の説教師で、六明寺の宗朝といふ大和尚であつたさうな。

三

「今に最上一人此處へ來て寝るさうぢやが、お前様と同國ぢやの、若狭の者で塗物の旅商人。いや此の男などは若いが感心に實體な好い男。

私が今話の序開をした其の飛驒の山越を遣つた時の、籠の茶屋で一緒になつた富山の賣藥といふ奴あ、けたいの悪い、ねちくした厭な壯俊で。

先づこれから峠に掛らうといふ日の、朝早く、尤も先の泊はもの三時位には發つて來たので、涼しい内に六里ばかり、其の茶屋までのしたのぢやが朝晴でじりじり暑いわ。



慾張抜いて大急ぎで歩いたから咽が渴いて爲様があるまい、早速茶を飲まうと思つたが、まだ湯が沸いて居らぬといふ。

何うして其時分ぢやからというて、滅多に人通のない山道、朝顔の咲いてる内に煙が立つ道理もなし。

床几の前には冷たさうな小流があつたから手桶の水を汲まうとして一寸氣がついた。其といふのが、時節柄暑さのため、可恐い悪い病が流行つて、先に通つた辻などといふ村は、から一面に石灰だらけぢやあるまいか。

(もし、姉さん。)といつて茶店の女に、

(此水はこりや井戸のでござりますか。)と、極りも悪し、もちく聞くと。

(いんね、川のでございます。)といふ、はて面妖なと思つた。

(山したの方には大分流行病がございますが、此水は何から、辻の方から流れて來るのではありませんか。)

(然うでねえ。)と女は何氣なく答へた、先づ嬉しやと思ふと、お聞きなさいよ。

此處に居て先刻から休んでござつたのが、右の賣藥ぢや。此の又萬金丹の下廻と來た日には、御存じの通り、千筋の單衣に小倉の帶、當節は時計を挟んで居ます、脚絆、股引、之は勿論、草

鞋がけ、千草木綿の風呂敷包の角ばつたのを首に結へて、桐油合羽を小さく畳んで此奴を眞田紐で右の包につけるか、小辨慶の木綿の蝙蝠傘を一本、お極だね。一寸見ると、いやどれこれも克明で分別のありさうな顔をして。

これが泊に着くと、大形の浴衣に變つて、帶廣解で焼酎をちびり／＼遣りながら、旅籠屋の女のふとつた膝へ脛を上げようといふ輩ぢや。

(これや、法界坊。)

なんて、天窓から嘗めて居ら。

(異なことをいふやうだが何かね、世の中の女が出來ねえと相場が極つて、すつぺら坊主になつて矢張り生命は欲しいのかね、不思議ぢやあねえか、争はれねえもんだ、姉さん見ねえ、彼で未練のある内が可いぢやあねえか)といつて顔を見合せて二人で呵々と笑つた。

年紀は若し、お前様、私は眞赤になつた、手に汲んだ川の水を飲みかねて猶豫つて居るとね。ボンと煙管を拂いて、

(何、遠慮をしねえで浴びるほどやんなせえ、生命が危くなりや、藥を遣らあ、其爲に私がついてるんだぜ、喃姉さん。おい、其だつても無錢ぢやあ不可えよ、憚りながら神方萬金丹、一貼三百だ、欲しくば買ひな、未だ坊主に報捨をするやうな罪は造らねえ、其とも何うだお前いふこと



を背くか。といつて茶店の女の背中を叩いた。

私は匆々に遁出した。

いや、膝だの、女の背中だのといつて、いけ年を仕つた和尚が業體で恐入るが、話が、話ぢやから其處は宜しく。」

四

「私も腹立紛れぢや、無暗と急いで、それからどん／＼山の裾を田圃道へかゝる。

半町ばかり行くと、路が恠う急に高くなつて、上りが一ヶ處、横から能く見えた、弓形で宛で土で勅使橋がかゝつてるやうな。上を見ながら、之へ足を踏懸けた時、以前の藥賣がすた／＼遣つて來て追着いたが、

別に言葉も交さず、又ものをいつたからといつて、返事をする氣は此方にもない。何處までも人を凌いだ仕打な藥賣は流眊にかけて故とらしう私を通越して、すた／＼前へ出て、ぬつと小山のやうな路の突先へ蝙蝠傘を差して立つたが、其ま、向うへ下りて見えなくなる。

其後から爪先上り、應てまた太鼓の胴のやうな路の上へ體が乗つた、其なりに又下りぢや。賣藥は先へ下りたが立停つて頻に四邊を向して居る様子、執念深く何か巧んだかと、快からず

續いたが、さてよく見ると仔細があるわい。

路は此處で二條になつて、一條はこれから直に坂になつて上りも急なり、草も兩方から生茂つたのが、路傍の其の角の處にある、其こそ四抱、さうさな、五抱もあらうといふ一本の檜の、背後へ蜿つて切出したやうな大巖がニツ三ツ四ツと竝んで、上の方へ層なつて其の背後へ通じて居るが、私が見當をつけて、心組んだのは此方ではないので、矢張今まで歩いて來た其の幅の廣いなだらかな方が正しく本道、あと二里足らず行けば山になつて、其からが峠になる筈。

唯見ると、何うしたことかさ、今いふ其檜ぢやが、其處らに何もない路を横斷つて見果のつかぬ田圃の中空へ虹のやうに突出て居る、見事な。根方の處の土が壞れて大鰻を捏ねたやうな根が幾筋ともなく露れた、其根から一筋の水が颯と落ちて、地の上へ流れるのが、取つて進まうとする道の眞中に流出してあたりは一面。

田圃が湖にならぬが不思議で、どう／＼と瀬になつて、前途に一叢の藪が見える、其を境にして凡そ二町ばかりの間宛で川ぢや。礫はばら／＼、飛石のやうにひよい／＼と大跨で傳へさうにすつと見こたへのあるのが、それでも人の手で竝べたに違ひはない。

尤も衣服を脱いで渡るほどの大事なのではないが、本街道には些と難儀過ぎて、なか／＼馬などが歩行かれる譯のものではないので。



賣藥もこれで迷つたのであらうと思ふ内、切放れよく向を變へて右の坂をすたくと上りはじめた。見る間に檜を後に潜り抜けると、私が體の上あたりへ出て下を向き、

(おい、松本へ出る路は此方だよ、)といつて無造作にまた五六歩。

岩の頭へ半身を乗出して、

(茫然してると、木精が攫ふぜ、晝間だつて容赦はねえよ、)と嘲るが如く言ひ棄てたが、聽て岩の陰に入つて高い處の草に隠れた。

暫くすると見上げるほどな邊へ蝙蝠傘の先が出たが、木の枝とすれくになつて茂の中に見えなくなつた。

(どツこいしよ、)と暢氣なかけ聲で、其の流の石の上を飛々に傳つて來たのは、莫塵の尻當をした、何にもつけない天秤棒を片手で擔いだ百姓ぢや。」

五

「先刻の茶店から此處へ來るまで、賣藥の外は誰にも逢はなんだことは申上げるまでもない。

今別れ際に聲を懸けられたので、先方は道中の商賣人と見ただけに、まさかと思つても氣迷がするので、今朝も立ちぎはによく見て來た、前にも申す、其の圖面をな、此處でも開けて見よう

として居た處。

(一寸伺ひたう存じますが、)

(これは何でござりまする、)と山國の人などは殊に出家と見ると丁寧にいつてくれる。

(いえ、お伺ひ申しますまでもございませぬが、道は矢張これを素直に參るのでございませぬ。)

(松本へ行かつしやる？ あ、本道ぢや、何ね、此間の梅雨に水が出て、とてつもない川さ出來たでがすよ。)

(未だすつと何處までも此水でございませうか。)

(何のお前様、見たばかりぢや、譯はござりませぬ、水になつたのは向うの那の藪までで、後は矢張これと同一道筋で山までは荷車が並んで通るでがす。藪のあるのは舊大いお邸の醫者様の跡でな、此處等はこれでも一ツの村でがした、十三年前の大水の時、から一面に野良になりましてよ、人死もいけえこと。御坊様歩きながらお念佛でも唱へて遣つてくれさつしやい。)と問はぬことまで深切に話します。其で能く仔細が解つて確になりはなつたけれども、現に一人踏迷つた者がある。

(此方の道はこりや何處へ行くので、)といつて賣藥の入つた左手の坂を尋ねて見た。



(はい、これは五十年ばかり前までは人が歩いた舊道でがす。矢張信州へ出まする、先は一つで七里ばかり總體近うござりますが、いや今時往來の出来るのぢやあござりませぬ。去年も御坊様、親子連の順禮が間違へて入つたといふで、はれ大變な、乞食を見たやうな者ぢやというて、人命に代りはねえ、追かけて助けべえと、巡查様が三人、村の者が十二人、一組になつて之から押登つて、やつと連れて戻つた位でがす。御坊様も血氣に逸つて近道をしてはなりましねえぞ、草臥れて野宿をしてからが此處を行かつしやるよりは増でござるに。はい、氣を付けて行かつしやれ。)

此處で百姓に別れて其の川の上を行かうとしたが弗と猶豫つたのは賣藥の身の上で。

まさかに聞いたほどでもあるまいが、其が本當ならば見殺ぢや、何の道私は出家の體、日が暮れるまでに宿へ着いて屋根の下に寝るには及ばぬ、追着いて引戻して遣らう。罷違つて舊道を皆歩行いても怪しうはあるまい、恚ういふ時候ぢや、狼の匂でもなく、魍魎魍魎の汐さきでもない、ま、よ、と思つて、見送ると早や深切な百姓の姿も見えぬ。

(可し。)

思切つて坂道を取つて懸つた、俠氣があつたのではござらぬ、血氣に逸つたでは固よりない、今申したやうではずつと最う悟つたやうぢやが、いやなか／＼の臆病者、川の水を飲むのさへ氣

が怯けたほど生命が大事で、何故又と謂はつしやるか。

唯挨拶をしたばかりの男なら、私は實の處、打棄つて置いたに違ひはないが、快からぬ人と思つたから、其ま、で見棄てるのが、故とするやうで、氣が責めてならんだから、と宗朝は矢張俯向けに床に入つたま、合掌していつた。  
「其では口でいふ念佛にも濟まぬと思つてさ。」

六

「さて、聞かつしやい、私はそれから檜の裏を抜けた、岩の下から岩の上へ出た、樹の中を潛つて草深い徑を何處までも、何處までも。」

すると何時の間にか今上つた山は過ぎて又一ツ山が近いて來た、此邊暫くの間は野が廣々として、先刻通つた本街道より最つと幅の廣い、なだらかな一筋道。

心持西と、東と、眞中に山を一ツ置いて二條竝んだ路のやうな、いかさまこれならば槍を立てても行列が通つたであらう。

此の廣ツ場でも目の及ぶ限り芥子粒ほどの大きさの賣藥の姿も見ないで、時々焼けるやうな空を小さな蟲が飛び歩いた。



歩行くには此の方が心細い、あたりがぼつとして居ると便がないよ。勿論飛驒越と銘を打つた日には、七里に一軒十里に五軒といふ相場、其處で粟の飯にありつけば都合も上の方といふことになつて居ります。其を覺悟のことで、足は相應に達者、いや屈せずに進んだ進んだ。すると、段々又山が兩方から逼つて来て、肩に支へさうな狭いことになつた、直に上。

さあ、之からが名代の天生峠と心得たから、此方も其氣になつて、何しろ暑いので、喘ぎながら先づ草鞋の紐も緊直した。

丁度此の上口の邊に美濃の蓮大寺の本堂の床下まで吹抜けの風穴があるといふことを年經つてから聞きましたが、なか／＼其處どころの沙汰ではない、一生懸命、景色も奇跡もあるものかい、お天氣さへ晴れたか曇つたか譯が解らず、目じろぎもしないですた／＼と捏ねて上る。

とお前様お聞かせ申す話は、これからぢやが、最初に申す通り路がいかにも悪い、宛然人が通ひさうでない上に、恐ろしいのは、蛇で。兩方の叢に尾と頭とを突込んで、のたりと橋を渡して居るではあるまいか。

私は眞先に出會した時は笠を被つて竹杖を突いたまゝ、はつと息を引いて膝を折つて坐つたて。

いやもう生得大嫌、嫌といふより恐ろしいのでな。

其時は先づ人助けにする／＼と尾を引いて、向うで鎌首を上げたと思ふと草をさら／＼と渡つた。

漸う起上つて道の五六町も行くと、又同一やうに、胴中を乾かして尾も首も見えぬが、ぬたり！あつというて飛退いたが、其も隠れた。三度目に出會つたのが、いや急には動かず、然も胴體の太さ、譬ひ這出した處でぬら／＼と遣られては凡そ五分間位尾を出すまでに間があらうと思ふ長蟲と見えたので、已むことを得ず私は跨ぎ越した、途端に下腹が突張つてぞつと身の毛、毛穴が不殘鱗に變つて、顔の色も其の蛇のやうになつたらうと目を塞いだ位。

絞るやうな冷汗になる氣味の悪さ、足が竦んだというて立つて居られる數ではないからびくびくしながら路を急ぐと又しても居たよ。

然も今度のは半分に引切つてある胴から尾ばかりの蟲ぢや、切口が蒼を帯びて其で恠う黄色な汗が流れてびく／＼と動いたわ。

我を忘れてばら／＼とあとへ遁歸つたが、氣が付けば例のが未だ居るであらう、譬ひ殺されるまでも二度とは彼を跨ぐ氣はせぬ。あ、先刻のお百姓がもの間違でも故道には蛇が恠うといつてくれたら、地獄へ落ちて来なかつたにと照りつけられて、涙が流れた、南無阿彌陀佛、今でも悚然とする。と額に手を。



「果が無いから膽を据ゑた、固より引返す分ではない。舊の處には矢張丈足らずの骸がある、遠くへ避けて草の中へ駈け抜けたが、今にもあとの半分が絡ひつきさうで耐らぬから氣臆がして足が筋張ると石に躓いて轉んだ、其時膝節を痛めましたものと見える。」

それからかくくして歩行くのが少し難澁になつたけれども、此處で倒れては温氣で蒸殺されるばかりぢやと、我身で我身を激まして首筋を取つて引立てるやうにして峠の方へ。

何しろ路傍の草いきれが可恐しい、大鳥の卵見たやうなものなんぞ足許にころ／＼して居る茂り鹽梅。

又二里ばかり大蛇の蜿るやうな坂を、山懷に突當つて岩角を曲つて、木の根を繞つて參つたが此處のことで餘りの道ぢやつたから、參謀本部の繪圖面を開いて見ました。

何矢張道は同一で聞いたにも見たのにも變はない、舊道は此方に相違はないから心遣りにも何にもならず、固より歴とした圖面というて、描いてある道は唯栗の毬の上へ赤い筋が引張つてあるばかり。

難儀さも、蛇も、毛蟲も、鳥の卵も、草いきれも、記してある筈はないのぢやから、薩張と疊

んで懷に入れて、うむと此の乳の下へ念佛を唱へ込んで立直つたは可いが、息も引かぬ内に情無い長蟲が路を切つた。

其處でもう所詮叶はぬと思つたなり、これは此の山の靈であらうと考へて、杖を棄てて膝を曲げ、じり／＼する地に兩手をついて、

（誠に濟みませぬがお通しなすつて下さりまし、成たけお午睡の邪魔になりませぬやうに密と通行いたしまする。）

御覽の通り杖も棄てました。）と我折れ染々と頼んで額を上げるとざつといふ凄じい音で。心持餘程の大蛇と思つた、三尺、四尺、五尺四方、一丈餘、段々と草の動くのが廣がつて、傍

の溪へ一文字に颯と靡いた、果は峰も山も一齊に揺いだ、恐毛を震つて立竦むと涼しさが身に染みて、氣が付くと山風よ。

此の折から聞えはじめたのは哄といふ山彦に傳はる響、丁度山の奥に風が渦巻いて其處から吹起る穴があいたやうに感じられる。

何しろ山靈感應あつたか、蛇は見えなくなり暑さも凌ぎよくなつたので、氣も勇み足も抄取つたが、程なく急に風が冷たくなつた理由を會得することが出來た。といふのは目の前に大森林があらはれたので。